6557 15-4-1

# 緑丘

1967 No. 59
奇数月発行

外人講師特集号

水仙
菅谷重平

小樽商大
同窓会誌

SINCE 1876

結論が出ました——
「★サッポロビールは
最初のうまさが持続する」

●雑味・雑臭がないから　うまさが持続

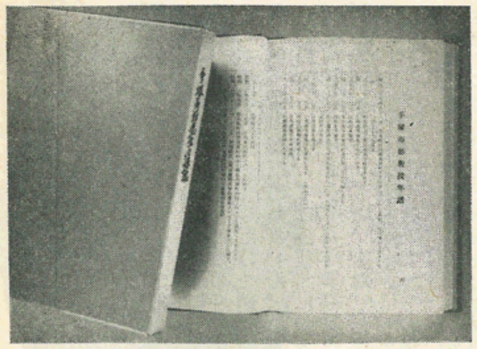
ビールの味の総仕上は濾過の工程が受けもちます。サッポロビールは独自の方法で雑味・雑臭を完全に除去、味の純度がずば抜けて高いのです。
何杯飲んでも最初のうまさが味わえる————サッポロビールだけの秘訣です。

緑丘

全国版
(通巻)No. 59号
(42年度 5号)
(編集責任者)
大阪市東区道修町3の12
塩野義製薬株式会社内
蓑目英三
(緑丘会大阪支部)
大阪市北区梅田八番地
新阪急ビル8階
サッポロビール㈱内

# 全日本にたった二〇〇冊

## 〃手塚寿郎先生の追憶〃豪華限定版



お蔭を持ちまして好評の〃手塚寿郎先生の追憶〃も在庫僅少となりました。

あと数冊宛左記に分散在庫してありますので至急御申込み下さい。

壱部壱千円（郵送箱代一〇〇円別）

（北海道地区）
札幌市大通西四丁目一番地
北海道銀行ビル内シオノギ製薬KK
木村俊也（昭一四）宛
（TEL 26—一三〇一）

（関東地区）
東京都中央区銀座東七丁目六
双葉ビル内緑丘会東京支部
神田正英（大一五）宛

（関西地区）
兵庫県西宮市清水町一—一六
蓑目英三（昭一一）宛
（TEL 22—九七〇八）

「手塚寿郎先生の追憶」お送り下さいまして有り難う存じます。手塚さんも地下で嘸かし喜んで居られることでしょう。ほんとうにお骨折ご苦労さんでした。

立派な追憶を出していただいて幾重にもお礼を申し上げると共に労に対し最大の敬意を表します。

（初代学長　大野純一）

手塚寿郎先生の追憶有難く拝受、殊に装訂、背文字、中扉、口絵、目次、序、本文、編集後記、奥付すべて申分なし。

貴兄はもとより御家族あげての年余の御苦心御辛労に対し万腔の感謝と敬意を表す。

緑丘精神この一巻に結晶し
永遠に光を放つ

（昭四　板垣与一）

手塚先生は「栃木県立商業学校」卒業第一回第一号の卒業証書を授与された方ですので「現栃木県立宇都宮商業高等学校図書室」に備え付けて後進の指導に役立たして貰う積りでおります。（大一一　村上武夫）

同文館は大正九年に先生の処女作とも申すべきゴッセン研究を出版させて頂いて居ります関係上お送りいただいたものと拝察いたします。

先生の後輩でございますので、特に此際先輩の偉大なる足跡を偲ばせて戴ける機会をお与え下さいましたことを深く感謝いたして居ります。現在出版事業に携さわるものとしてこの書の出来上るまでの貴殿の御苦心も充分わかり深い敬意を捧げる次第でございます。

この本は弊社の図書室に収め永久に保存いたします。

（同文館出版株式会社
熊井征太郎）

小生の書斎にある緑丘コーナーに亦一冊（「手塚寿郎先生の追憶」）諸先生、諸先輩のご労作が増えました。（昭二八　芳賀　厚）

「手塚寿郎先生の追憶」その見事な出来栄えの中に貴兄のたゆまざる愛情と魂の輝きを観得しました。

（昭五　水垣敏正）

「手塚寿郎先生の追憶」すべての点において手厚い配慮がなされていることを泌々と感じています。ゼミナールこそ違え、地獄坂では時折肩をならべてお話を身近に伺ったことがあり、最も印象の深い先生です。

永く座右におけることを喜びとするものです。

（昭一二　五十嵐良一）

少部数の限定版をかくも立派に上梓していただき感謝の言葉もありません。

懐かしい魂の故里として書架を飾らして頂きます。

（昭一六後　早川延治）

「手塚寿郎先生の追憶」御寄贈下さいまして誠に有難うございました。

永く本館に保存し、貴重なる学術研究の資料として閲覧に供しご厚志に応えたいと存じます。

（一橋大学附属図書館）

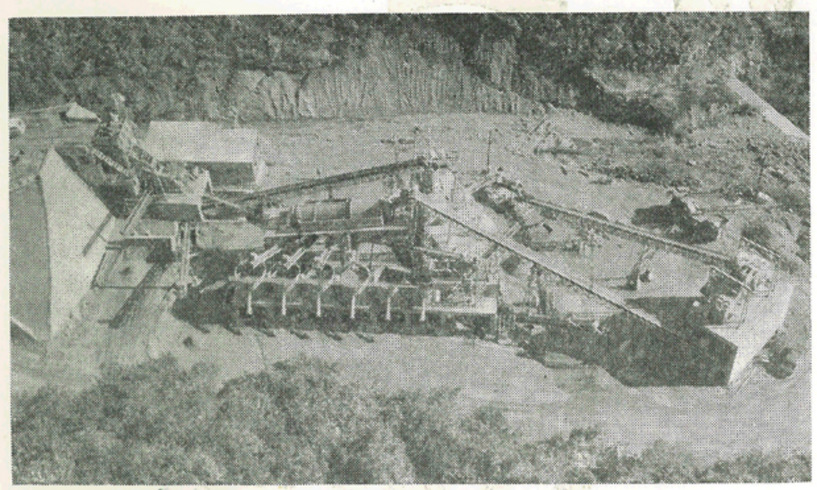
「手塚寿郎先生の追憶」三部大学で買取り学生のため図書館に置き度いと思います。

（小樽商大学長　実方正雄）

よき時代のよき大学の教師と学生の交流が脈うって楽しい読み物ともなっています。ここには現代に欠けている何かがあり、有意義な文集であると思います。

（北海タイムス社学芸部
河原昌春）

国土綜合開発に貢献する



KYCプラント

—営業品目—
砕石プラント　アスファルトプラント　バッチャースケール
砂利撰別プラント　クラッシャー　ベルトコンベアー
バッチャープラント　コンクリートミキサー

KYC光洋 機械工業株式会社

代表取締役社長　奥村正美（昭17卒業）

本社　大阪市北区南同心町1丁目31番地　電話大阪(358)3521(大代表)

大阪支店　電話大阪(358)3521(大代表)
東京支店　電話東京(254)5601～5
広島支店　電話広島(61)5101～3
福岡支店　電話福岡(43)6461～4
札幌支店　電話札幌(24)9594～6
仙台支店　電話仙台(25)4441～3
名古屋営業所　電話名古屋(221)7037～8
高松営業所　電話高松(61)4391～3
鹿児島営業所　電話鹿児島(2)3055・1650

# 手塚寿郎先生の思い出

大野　純一（初代学長）

私にも原稿をとの依頼を受け乍ら折悪しく健康すぐれず札幌の斗南病院に入院中でありましたので遂に機会を失って申し訳ありません。

手塚さんについては公私共に数々の思い出があります。「商学討究」出版のいきさつ―手塚、南両兄と拙宅ですしをたべながら企画をしたこと。

今は亡き糸魚川兄と上海行きの引き止めに努め、その斡旋をした神戸商大のS教授と秘かに小樽で逢って談判（？）したこと。

その時手塚兄は『僕は進退いずれにすべきか、君達二人にまかすから一高S氏に逢って呉れ。いつか伴先生が京大の教授が東大に引抜かれることを承諾した。ところが学部長（？）が反対した。そこで当人はすっかり困って神経衰弱になり、遂いに自殺した、という話を聞いたことがある。その時はそんな馬鹿なことがと思ったが、今の僕の心境はその京大の教授と同様で、彼の気持が良くわかる。君達二人に一任するから校長とS教授と話し合って呉れ』とのことで、神戸のS氏に来て貰ったのだった。しかし我々の力及ばず遂いに小樽から手塚兄を失なうことになったのであった。あの時もう少し何とかならなかったかと今でも残念である。

私的生活では、私の留学が決った或る冬の夜の大吹雪の中をわざわざ深雪をこぎ乍ら拙宅を訪ねて呉れたことがある、何の急用かと思って上ってストーブの側に来て貰ったところ、それは留学中の私生活の難問の解決策であった、私は不幸にして家内と共に行くことになったと話したところ「しまった、それでは今迄の話しは全部取消だ」と云って大笑いしたこともあったのでした。

ほんとうに公私共に私は大きな恩を受けた人であった。


営　業　科　目

日立商品
業務用電気品
ホイストモートルブロック
変圧器熔接機
各種電動工具

日立汎用機
各種搬送機械
ホイストクレーン
各種ポンプ
送排風機
電圧縮機

日立冷凍機
パッケージ型空調機
各種冷凍機
各種暖房機
除温機ショーケース
冷機応用品一般

電気工事
各種工事設計施工
高圧受配電設備
低圧配電設備
冷暖房設備
電気配電相談

日本電氣機器株式會社

取締役社長　天野雅司（大正15年）

本　社　大阪市北区曽根崎新地2の50　TEL(361)8871～9
神戸出張所　神戸市兵庫区西上橘通り1の1　TEL(56)5306




# 外人講師特集

## ネフスキー先生の思い出

越崎宗一（大一一）

私は二年に進学した時第二外国語にロシヤ語を選んだ、先生はネフスキーである。

私の聞いている範囲では先生はロシヤの大学で東洋学科を専攻、卒えて日本へやって来た、その当時は日本の古文調で会話したという。私がロシヤ語を始めた時は先生は日本人と変らぬような流暢な日本語を話し、自由に漢字を書き、家庭では和服に角帯をしめていた。着流しで妙見筋の花柳街へお忍びで出掛けるという風評もあった。

語学の教授法はベルリッツ法といい実物を使って教え、教室では日本語をなるべく使わぬ方法だった。先生は語学の天才で数ケ国語を自由に話した。頭のいい先生だということはすぐ感じとれた。悪戯好きの生徒が、先生が教室へ入ってくる前に黒板に「寝婦好」と書いておいた、先生は入ってくるなり黒板掃きで一語も発せず消してニコニコと授業を始められた。

私は緑町の先生の官舎へよく遊びに行った方である。初めに行った時は顔にアザのある年とった女中がいた、ところが何時の間にかこの老婦はいなくなって代りにマンドリンをひく女中とも奥さんともつかぬ三十前位の女性が居るようになった、然し私は敢えて身許についてはきかなかった。

先生は日本の民俗学に興味を持ち研究していたようで、東北のオシラ様や、性をシンボライズした石像の写真を度々見せて下さった。当時私には余り興味ある問題でなかったので「変った先生だなあ」位にしか思わなかった。（先生離樽後、積丹の奥さんの実家からネフスキー蔵書の一部や手稿書簡などが出て友人長谷川幾久雄氏が一括買取ったが、日本民俗学にとって貴重な文献であったらしい）

二年の時の外語劇大会に先生の選定でプーシキンの「吝ショクなる武士」が出され私がその主人公をやらされた。平素は女人禁制の高商校舎も外語劇の日だけは生徒の姉妹家族や下宿の娘にまで入場券が配られ生徒も張切って演じたものだ。爪に火をともすようにして金を貯めた老武士が独り寂しくベットで臨終の息を引取る幕切れだが、今はの際にも金庫の鍵が気にかかり「鍵！鍵！」と二言叫んで息が絶えるのだが、ロシヤ語で鍵のことをクルウチユと云うので私が最後に

# スミルニッキイ先生についての思い出

高崎　徹
(現札幌大学教授
元ロシヤ語担当講師)

「クルウチユ！クルウチユ！」
とベッドの上で虚空を掴んで叫ぶとチンプンカンプンロシヤ語の中に日本語らしい
「苦ちい！苦ちい！」
と聞えたのであろう。観客がドッと吹き出して悲劇が喜劇になってしまった思い出がある。
先生は授業では実に厳しく大いに尻をたたかれた。忘れ難い外人先生であった。

ベーク・ブラート・スミルニッキイ――先生は自分の呼び名をこう云っておられた。普通ロシヤ人の呼称は名前と父称と姓とをいうものであり、先生の名はシメオン、父称はニコライウィチである。ベーク・ブラートというのは身分や位を意味するもので、ベークとはトルコ民族の住む地方の知事、地主、長者のこと、ブラートの方は正教徒団の僧侶の正称なのである。恐らく祖先がそういう地位にあったのであろう。先生自身は帝政ロシヤの陸軍大佐であったという。

面白いことには、東京から小樽高商にこられて緑町三丁目に居住していた時代の名刺には、「ベーク・ブラート寿美留爾月」と印刷されてあり、最上町に移ってからのは、「ベーク・ブラート菫日記聖聞」とされてある。前者もなかなか凝ったものだが、後者に至ってはまことに洒落れた当て字といえよう。聖聞はもちろんシメオンである。「それは神さまが聞くことでしょう、ネエ、タカサキサーン」と云われたものだった。この名刺をもらうと、誰でもうなづき、感心したものである。

私は、先生には大正十一年に東京外語で約一年間ロシヤ語を教わった。専任のトドローウィチ先生が賜暇帰国中、スミル（私たち学生はこう呼んでいた）先生が臨時に教授されたのだった。その後小樽でまた一所に勤めるようになったのだから、先生についての思い出は実に沢山ある。中でも外語劇は先生の最も得意とするところで、外語のトドローウィチ先生もそうであったが、演出にかけては素人ばなれしているほどうまかった。外語でもたった一度だがオストローフスキイの「雪姫」をやって大喝采を博したし、小樽高商においてはロシヤ語劇はたとえ科白はわからなくても、見て面白くもあって毎度好評だった。ある年などは先生自作のものを演出したくらいで、まったく演劇には目がなかった。それも特に喜劇を好み、稽古も毎晩夜中になっても止めず、疲れを知らずに、時には鼻唄まじりで、いかにも愉しそうに学生たちを指導していた。メーキャップも全部自分で手がけるし、衣裳や小道具などもほとんど自分で作り、長さ二メートル、幅も高さも一メートルの大長持ちいっぱいに詰まってお宅に置いてあった。とにかく、一年のうちで先生がいちばん元気で活気にみちあふれた楽しげな時期が、外語劇の期間中であった。

お宅にはオルガンとアコーデオンがあり、先生は音楽もたいへん好きで、自分で弾きながらよく歌っていた。ある時、稲穂町の劇場で市内の名士たちによる慈善音楽会みたいな催しがあった。その際先生は堂々と登場し（ちゃんと舞台化粧までして）、二、三曲歌ったが、声量もなかなかあって上手なのだが、満場の聴・観衆はどっとばかり爆笑した。当時の小樽人は歌手のジェスチュアなどはまだ見馴れていないので、先生のステージ・マナーやジェスチュアが、失礼にもただおかしかったのであろう。もっとも先生にしてもわざと大げさにやったからかも知れない。しかし先生はニコニコ笑って退場したものだった。

また画も好きで、これも自分で描いていた。書斎に当てた部屋に画架が立てられ、描きかけのキャンバスがのっていることが時々あった。ほとんどが肖像画で、中にニコライ皇帝の半身像もあった。とにかく芸術一般なにでも趣味をもっていた人である。文学はもちろん古典に興味を感じており、ただ亡命者なので蔵書の数は少なかったが、その中にレスコーフとかクープリンのものがあったのには眼を惹かれた。プーシキン、レールモントフ、ゴーゴリ、それに欠本だがトルストイ全集など、但しドストエーフスキイのものはなかったように憶えている。十九世紀末にペテルブールグで出版されたものが殆んどで、中にも、もうさびてしまった金背文字の帝政時代の百科辞典がずらりと十数巻並んでいるのが有難かった。おかげで引かせてもらい、ずいぶんご厄介になったものだった。

また、これは普通なら「お気のどく」というべきところなのだが、先生自身はいわゆるロシヤ式な「ニッチェヴォー」で、独身生活を決して苦にせず、炊事、料理、掃除、買物など（洗濯だけは別）すべて自分でやり、かえって楽しんでさえいるように見え、特に料理はこれまたお得意の一つで、時折、厚い料理の本を開いて、変ったロシヤ料理を作ってご馳走して下さったりした。恐らく当時の高商の先生方は一度や二度はきっと先生の手料理を召し上った経験がおありだと思う。復活祭にはいつも数人お宅に招待されたものだった。



初めてお宅を訪ねた者がびっくりするのは先生の異常な動物愛護癖である。生き物好きは世間にたくさんいるが、しかし先生の場合はむしろグロテスクといえるほどの飼い方だった。室内、それも客間に、大きなガラス張りの飼育箱を置き、その中に大小の蛇がにょろにょろしているのには、私などぞうっとしてしまったものである。また狭い庭には猿、兎、雉（きじ）、おまけにひきがえるまでおり、狆（ちん）は家の中に放し飼い、猫もいる。犬、猿、雉と揃えて飼っているところなどはいかにもスミルニッキイ先生らしい洒落っ気である。書斎には金魚、目高の鉢と小亀の鉢も置いてあった。猿はたいへん先生に懐き、外出の時ゆっくり自転車を進めて行く先生の肩にちょこんと乗っている面白い光景は（ちょうどマッキンノン先生のロバと共に）小樽の一名物のかんがあった。

乗り物といえば、先生は自家用車を用いたことでは恐らく小樽では早い方だったと思う。何という車であったかその名は忘れたが、白い小型の可愛らしい車であった。私もちょいちょい乗せていただいた。自転車の場合と同様でスピードを出すようなことは全然せず、ゆっくりした安全運転なのである。ところがどうしたはずみか、ある時道路脇へ転落し（たしか地獄坂でだったか）、幸い大した怪我はなかったが、車は大破、そしてその後は乗用されずにどこへか安く売ってしまわれた。

道楽といっては申し訳けないけれども、小樽に博覧会（札幌と一緒の）があった年、先生は稲穂町の国道筋で岡本病院の横向いに当るところの店を買って改造し、レストランとカフエーの合いの子のようなものを始めたものである。ロシヤ語で名を付けて「グロート（洞窟）」と称しまさにグロテスクな感じそのものでこれも先生の洒落と趣味との合いの子であった。事実、四方の壁を凹凸のある岩石の恰好に造りあげ、這入った瞬間鼻をつままれてもわからぬ暗さで、ランプとローソクの明りで幽かに照明が施こされているといった具合だった。大方、外国のどこかにそういう酒場でもあるのだろうと、私などはそう思って面白かったものである。コックには無口な老いてなお逞しい白系露人を使い、その連れ合いのこれまた無愛想なロシヤの大女がウエートレスの役をうけたまわっているのもグロというしかない。その着想と実現とは先生のご自慢であったものの、いつ行ってもお客らしい人影はなく、先生と誰かが向い合って席についているだけであった。今ならいざ知らず、その頃の小樽にはまだ不向きであったのであろう、夏に開業し、秋の末には廃業してしまった、このために貯金はほとんど使い果たしたと云っておられたが、しかし残念がりもせず、一向平気な「ニッチェヴォー」という顔だった。どうしてそんなことをやったものか、予め誰かに相談されたのか、その点は私は知らない。とにかく先生の奇行の一つである。

先生は人に対する好き嫌いがたいへん強かった。好意をもつ人にはじつに真実で親切であるが、好かない人のことは口をきわめて悪く云った。特に学生を可愛がり、孤独生活のためでもあろうが、幾人かは代わる代わる自宅に置いて、「××ちゃん」とちゃん呼ばわりしてよく世話をしておられた。まあ学僕というようなものかも知れないが、その取り扱いは親身の者にもできないくらい温かであり、先生自身楽しそうであった。

小樽高商のロシヤ人教師としてはかつてネフスキー先生のような特異な学者も居られたことがあるので、それにくらべれば、スミルニッキー先生は特別学者ではないが、さすがにロシヤ貴族の出であるだけに教養人であり、当時はまだロシヤ語の教科書などの少い頃であったので、先生は会話の本や読本を著作し、出版されたものも二、三あるのである。それにまた変っているのは、その読本には自作の文章や、フランス語から自分で訳されたものも幾つかのっているし、巻末には音符付きのロシヤ民謡がたくさん収められていることとか、会話の本には化粧品を買う折りの会話が特に詳細にのべられてあること、または読本の巻頭に先生がフロック姿でありったけの勲章をつけた写真をかかげてあるところなど、いかにもスミルニッキー式であって、うれしいものであった。

思い出は数かぎりなくあるのでいつかまとめて書きたいと思っている。最後に云っておきたいことは、先生は多年小樽高商の教師として尽くされた功により日本政府から勲章を授かったのであるが、これも変っていて、先生自身がさかんにおねだりしたのであって、手紙を出しさえもしたと私に云ったことがある。だから授かった時の喜びようは全く無邪気な子供のようであった。それもそうであろう。式日や何かの折りにはいつでも帝政ロシヤの勲章をいくつもフロックコートに佩用して得々としていたのであるから、何としても日本の勲章が欲しかったわけである。

そうした先生が事もあろうに、日本の戦争の犠牲者の一人となって、札幌の拘置所に収容され、終戦後に出所されてこられてからは体力もなかなか回復せず、元の元気な姿ではなくなり、経済的にも困難され（もっともこの点はわれわれ日本国民も皆そうであったが）、その後何年もたたぬうちに亡くなられてしまったことは全く悲しいことである。もう一つは、家庭的にめぐまれなかった先生の生涯を思うと、たとえそれが多くの白系の人と同様に革命によるものではあったにしても、なんとも不運な人というほかはない。

夫人は一度小樽に来られたそうだが（その頃は私はまだ来樽していなかった）、長く居らずに、ソ連へ帰ってしまわれたという。先生の口から夫人に関することを聞いたことは絶えてなかった。また幼年期から先生の許で育ち、小樽の学校にも通った次男のアレクセイ君も、年ごろになると母親のところへ去ってしまった。初めの便りでは学問があるという意味でか、沿海州のある村の委員にさせられて喜んでいるとのことであったが、後に、どうしたことか日

本のスパイの嫌疑で処刑されてしまったのである。その知らせに接した時の先生の暗い、悲しい顔は今も目にうかぶ。全く慰めの言葉もお悔みも云えないくらいであった。

次にまた長男のニコライさんは時折先生のところへ戻ってくることもあったが、一年のうち大方は日本国内の放浪の旅に出ていた。ただ終戦後の先生の晩年にはずうっと先生のそばに居るようになり、先生が亡くなられた後も先生同様独りで最上町のお宅で暮らしていた。今はどうしておられるであろうか。先生に似ていや、より以上お人よしで、「ニッチェヴォー」であったニコライ君、年もすでに六十を越えているであろうが、残念ながら、私はその消息を知らない。お会いしたいものである。

―一九六七・九・二三―

# シメオン・N・スミルニッキー先生

江川裕一郎（昭一三）

緑丘誌上にて「外人講師特集号」原稿募集発表あり、一しきりあれこれ在学時代親しく教わった外人教師の面影を偲んだが、さて何か書いて見ようかと思うと三十年前の記憶であり間違った事を書きしるす事になってはという危惧もあり筆をとるのを躊躇したが、今は亡きスミルニッキー先生への追悼の意を表したく私が露語を第二外語としてとるに至った経緯やスミルニッキー先生の印象やらを思い出すまま書いて見たい。

露語を第二外語として選んだきっかけとなったのは第一にE・S・S（English Speaking Society）の新入生歓迎パーティ（北海ホテルと記憶するが）が開かれた時に先生の勧誘があった事です。当時私はE・S・Sへ入会する積りで出席したのだが、たまたま私の隣席にスミルニッキー先生が座られ上手な日本語で盛んに露語がやさしいし面白いと宣伝された。（実際には露語程難しい外国語はないと思うし面白いという境地には全然達する事が出来なかった。今でも思う事だが、当時露語の人気はそれ程なかったので外人教師としてス先生は一人でも多くの受講生を獲得したい気持だったのではないかと思う。

第二の理由は当時露語は東京外語、大阪外語の外は小樽高商、長崎高商しか講座がなく謂わば特異な学科であり、小樽高商へ入学したればこそ特色ある外国語を身につけるべきだと思った事。

第三は小樽の置かれたロケーションから考えて露国との貿易の拡大の必要性から一度は露国へ行って見たいと考えた事。（未だその機会がない。青年の夢に終ったわけだ。）

第四は小樽高商の外人教師としてマッキンノン先生や、スミルニッキー先生は小樽市民や中学生達に或る程度の近親感を持たれていた。私は小樽中学在学時代にチョイチョイ街であのカイゼル鬚を生やしたスミルニッキイ先生を見ていたので何となく近親感を持っていたのだろう。

第五は露語をマスターして、ロシヤ文学を原語で読めるかも知れない、という野望があったこと（これは終に野望に終ってしまった）。

かくして露語を第二外語として、会語はス教師、文法は高崎講師に習った次第であるが、先生の言に反し難かしく大いに悔んだものだが、試験の点数は一番甘かったのではないだろうか。そのせいでもないだろうが現在露語では数語しか憶えていない。外語劇でヒロインとして二時間近くも熱演したのに、すっかり忘れてしまうとは自分ながらなさけないと思う。

＜動物好きの事＞

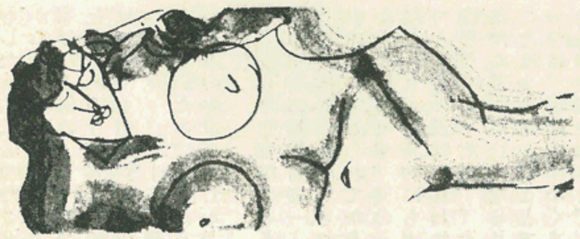
ス先生は当時ダットサン小型自動車を運転して登校されていたが、当時已に御老体、且つ脚部不自由なせいでもあったろう。併し一般学生にはモダンな教師に見えたことと思う。ス先生はモンキーを飼われておられ、チョイチョイ学校にも連れて来られたと記憶している。また自宅には蛇を数匹飼っておられ、外語劇練習のためス先生宅に訪れた際は一寸薄気味悪く感じたものだ。だが独身の先生としては学生の外には他に愛を分ち与えるものがなかったのかも知れない。

＜政治の事＞

白系露人将校として日本に亡命されたことは聞いているが、学生当時私は政治については聞いたことがない。これは教師として政治問題はタブーとして止められていたためではないだろうか。

昭和二十年三月三十一日解嘱と緑丘に記してあるが、私は昭和十三年卒業後、関西、北支、召集と続き、戦後昭和二十一年六月北支より帰国の後一時小樽に住んだが、当時ス教師の消息を誰にも聞けず未だに後悔している。

已に御他界されて久しい筈だが、教師をやめられて後の消息を知りたいものと思っている。



# 三たび ニコライ・A・ネフスキーの生涯について

墓目英三（昭一一）

〝緑丘〟がネフスキー講師のことを取り上げたのは一九六六年五二号で



あった。丁度同じ頃「民族学研究」はニコライ・ネフスキーの生涯と題して加藤九祚氏（平凡社勤務）が発表していることを〝緑丘〟が取り上げた二カ月後に大阪府立図書館で発見した。

その資料によると「最近キチャノフという西夏学者が西夏学発達史を一般向きにのべた「文字のみが語る」（一九六五）と題する小冊子を著わし、その中でネフスキーの生涯を自ら調査し、その全貌をかなり詳しく記述している」とあり、こおどりして図書館にその複写を願い、その一部を要約して発表する機会を得た。

一、少年期から日本留学まで

ニコライ・ネフスキーは一八九二年二月十八日、ヤロスラウリ県ヤロスラウリ市に生れた。父親は県内のポシェホニエ郡にある地方裁判所の予審判事であった。ネフスキー（愛称コーリヤ）が生れて一年も満たない時妻に死別し、後妻を迎え、二人の女児をもうけた。ところがコーリヤは、今度は父親に死別し、一家は離散の止むなきに至った。

そこでコーリヤはルビンスク市に在住していた母方の祖父サスニンのもとに引きとられた。サスニンは市内の教会の聖職者として教会構内の小さな石造三階建ての家に住んでいた。

このルビンスクはこの地方最大の定期市のたつ場所として知られ、毎年七月、聖ペテロ祭とともに約三週間つづいた。世界の各地からあらゆる人種がさまざまな商品を持ちよって集まった。それはさながら人種の見本市の観を呈した。東洋からは中国人のほか日本人まで見られ、中国人の曲芸師のまわりには連日黒山のような人だかりであった。コーリヤ少年はこうした環境の中で、いつとはなしに東洋に対する莫然としたあこがれを持つようになった。

一九〇〇年八月、コーリヤはルビンスクの中学校に入り、それまで彼は学校というものに入ったことはなく、祖母や伯母、従姉から家庭で教わっただけだった。

コーリヤは四年生のときから金持出身の子弟のための家庭教師をつとめ、また夏休みには中学校の入学志望者の受験勉強を手伝うために田舎に出かけた。

コーリヤの十二才の夏、ポシェホニエ郡へ行った時コーリヤは約五〇篇の現地俗謡を書きとめたことがある。やがて彼は孤児の優等生としてスモレンスキー奨学金を受けるようになり、学費を免除された。

一九〇五年その前年からはじまった日露戦争ではそれまでルイビンスクでもあまり知られなかった東洋の小国日本が満州の野にロシヤ軍を撃破し、日本・東洋に対する関心はいやが上にも高められた。

コーリヤはルイビンスクに住むタタール人と知り合い、その家に通ってタタール語を習いはじめ、また彼の先輩に、モスクワのラザレフ東洋語専門学校でアラブ、ペルシャ語を学んでいた人がいたことに影響され、独学でアラビヤ語を勉強しはじめた。

一九〇九年コーリヤ（以後ネフスキーと呼称する）はルイビンスク中学校を銀メダルで卒業した。彼は東洋語を学びたいと希望していたが、長年育てられた伯母の要望にそってペテルブルグ工芸専門学校に入学した。ここで一年間学んだネフスキーは、二年目の夏、列車の機関士助手として実習も行なった。しかし彼の心中では東洋語に対する愛着がますますつのり、一九一〇年退学してペテルブルグ大学に入学した。

一九三六年五月に書かれた彼の自伝の表現によると「専門として中国語、日本語を選んだ。これに対して私は長い間惹かれるものを感じていた」とのことである。

この大学ではじめて後年親しい友人になったコンラードと知り合い、有名な中国学者アレクセーエフ（一九二九年以後アカデミー会員）と後年ネフスキーの西夏語研究の資料を提供したイワノフAの教えを受けるようになった。

アレクセーエフは中国の詩と芸術の問題を講義の中にとり入れ、イワノフは西夏語という未知の言葉に興味を抱いた。彼は一九〇八年カズロフ探検隊がカラホト（黒城）から将来した豊富な古文書の中に西夏語と漢語とを対訳した学習書「蕃漢合時掌中珠」を発見し、その翌年これを学界に発表した。

日本語学科の方は正教員欠員のまま、午前中はロシヤに帰化していた日本人クロノ・ヨシブミという人が大学での授業を委嘱されていた。クロノ先生の教科書は「日本外史」であり、外務省の役人ドーリヤはチエンバレンの日本語文法のローマ字をロシヤ風の強いくせのあるアクセントをつけて読んでいたとのことである。

一九一三年、ネフスキーは二カ月間、あこがれの国、日本を訪れた。彼は長崎の宿で、大学で教えられた通りの日本語を話したところ、全く通じなかった。柳田国男氏はネフスキーの思い出の中で「……皆きょとんとして返事をしなかったとか、あの時は情けなかったと後で私らに話していた」と書いている。この二カ月間彼は東京に滞在して日本文学の研究に従事した。

一九一四年、ネフスキーは卒業論文を提出した。表題は『李白の詩一五篇について遂語訳と意訳を行ない、そこに見られる自然描写の絵画性を指摘し、さらにその数種の外国語訳に徹底的検討を加える試み』というものであった。

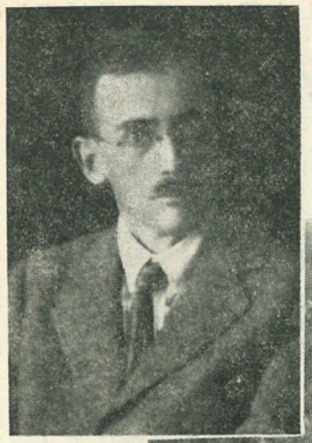
大学としては日本語の正教授を養成する必要があったので、ネフスキーは教授候補者としてさらに勉学をつづけることになった。しかし第一次世界大戦の勃発とともに大学の予算は大幅にけずられ、その結果無給のまま残された。そこで彼はエルミタージュ博物館に職を得、勉学のかたわら中国と日本の古銭の整理にあたった。

一九一五年（大正四年）大学当局はなんとか予算をつくり出し、ネフスキーを二年間日本へ留学させることとなった。やがて東京へ、そして小樽高商赴任への運びとなる。

（以下次号へ）

# 大正末期のマッキンノン師

黒羽秀夫
(昭二)



昭和初期のマッキンノン先生
(昭四　栂健氏提供)

マッキンノン先生には大正末期緑丘で大変御迷惑を掛け誠に相済まぬことをした。生意気にも先生の会話教授法『サブスチテュション・テーブル』が単調だ、つまらない、気に喰わないと云って悪童共を唆かし先生の授業を集団エスケープし、先生に御心配をかけて快哉を叫び、遂に監生部のコワイ先生からキツイお目玉を頂戴した冷汗の出る思い出。血気にはやる若気の到りとはいえ本当に相済まぬ次第。

こんな無礼極まる私をも師は大変可愛がって下さり、御宅へも度々御伺いして御厄介になった。二、三先生の思い出を善かれ悪しかれ記して見たい。

其頃師は学齢前後のベティ、リンコナ、トムの三人のお子さんに毎夜黒板を使って規則正しい英語のレッスンをしておられたが、未だ三、四才位のいたいけないトム君（現ワシントン大学教授）『ザ・ベアー・イズ・デンジャラス』の『デンジャラス』が仲々旨く発音出来ず、泣出しそうな顔。しかも先生の毅然たる態度――。

また一日トム君御宅の前の空溝の中に運悪く真逆さまに転び落ちたのを見た私は、走って行って引起そうとした処、先生は『ウエイト』と云ってトム君の様子を確かめた上『ゲットアプ、ゲットアプ、トム』と声も大にして自力で立ち上がる様励まされた。私達日本人の子供に対し余りにも甘過ぎる慣習を思い西洋人の子供に対する躾けの如何に厳しく立派なるかにホトホト感心した次第。★

或る日、十人ばかりの悪童は先生と北大のブラウン教授と共に双尾山にキャムピングを楽しんだ。

ブラウン教授は私を前にしてマッキンノン先生に向い、北大にもせめてK君ぐらい話せる学生が一人居たらなあ、と私のブロークン・イングリッシュをも余り気にとめない様子でお世辞を云われた。

これを聞いたマッキンノン先生こそとばかり得意になり、吾が小樽ではK君の如き学生は箒で掃き棄てる程居る、と云い、如何に自分の教授法の優れているか、また如何に緑丘の学生のレベルが北大生に比して高いかを誇らしげに得々として語られたのにはビックリし、且つ恥かしいやら嬉しいやら。

★

マッキンノン先生といえば何人もすぐ『ドンキー』を思い出す。その頃わが国では未だ自動車などは稀れで殊に北海道では殆んど、日常目にする事は出来なかった。先生はこれを『マイ・オートモビル』と云って大変可愛がり毎日乗馬を楽しみにしていられた。

晩春の夕べ、例の如く『いわゆるドライブを楽しんでいられた先生は花園公園に差掛った時どうした訳か、何に驚いたのか、不意に『ドンキー・オートモビル』は立ち止り前足で宙を掻いて立ち上った。

瞬間先生は鞍から投げ出された。折よくその場を通りかかった一高商生、驚いて走り寄り師を抱き起した。幸運にも全く幸運にも大した負傷でないことを見たその学生T君はホットしてそのまま立ち去った。数日後、先生は自分を救けてくれた親切な学生を教室に見付け、喜んで先夜の礼を述べられた。驚いたことにその学生は豆鉄砲を喰った鳩の如く目をくるくる。全く人違いだ、と云う。

事実あの時はすでに薄暗く、その上突然のショックで先生は完全に人違いしてしまったのだ。が、一途にその学生だと思い込んでいた先生はその頃乃木将軍を崇拝し日本人の武士道的精神の美わしさに心粋していた折柄でもあり、その学生が内気で謙譲な精神から恥かしがって知らぬ顔をしているに違いないと信じ込みこの尊敬すべき高潔な人格の所有主の床しい態度にいよいよ感じ入ってしまわれたらしい。

浜林先生とM君の話ではないが、Y君というこの学生は会話のテストでその後思いも掛けぬ恩恵に浴したとのこと。真疑の程は勿論知らないが。



# ミス・バグレーとマキンノン先生

佐藤信雄
(大一二)

私はミス・ケート・バグレーには前後三年英会話を習った。はじめの二年は札幌の一中（今の南高校）であとの一年は緑丘であった。中学校ではイングリッシュ・エコーという教科書を使っておられたと記憶するが、小樽ではテキストがあったかどうか忘れてしまった。大変静かな声で話をされたが、内容は覚えていない。ただいつかクリケットのことを詳しく話して下さったことがある。しかしスポーツの説明はそれを見たことのないものには分りにくくて、どうもよく理解ができなかった。

学生たちはミス・バグレーはいくつだろうなどと年齢を話題にしたが、同時に習っていたマッキンノン先生から、そのようなパーソナル・クウェスチョンをするのは、日本人の欠点だと教えられたところだったので、さすがに誰も質問しなかった。ずっとあとになって何かの印刷物に年齢がのっているのを見たが、四十歳のちょっと前と記憶している。

今関西におられる椎名先生とお話をした時、先生がミス・バグレーのところへ遊びに行かれた。どうして結婚しないのかときいてみると、日本では珍らしいことかも知れないがイギリスでは独身の女はいくらもいると答えられたという話を伺ったことがある。

ミス・バグレーは特に謹厳という方でもなかったと思うが、笑顔をみせるということもなかった。質問が分らなくてとんでもない答などが出ると、思わず口許がほころびる程度で、それも一年間に指折りかぞえる位しかなかった。

私は札幌一中から三年もつづけて習ったので、よく知られていた生徒の一人だったのだろう、他の人よりは余計指名されたようだ。その度にうまく答えることができたかどうか、恐らくブロークン・イングリッシュで何とか切りぬけていたのだろう。

先生の黒板に書かれる字が印象にのこっている。私達が中学校の英習字の時間に習ったように一語を続けて書くのではなくて、一字一字をはなして書かれるのだが、それでも結構速く、しかも実に端正な美しい書体であった。

もう一つ忘れ難いのは、少し離れてみると分らないのだが、いつであったか近寄って見ると、お顔にかなり長い白い毛が生えているのを発見したことだ。欧米の婦人はかみそりをあてないと聞いて成程と思ったものだ。札幌一中には帽子をかぶって来られて、教室でも取らないので、欧米の事情にうとい当時の中学生には奇異な感じがしていたが、小樽では帽子はかぶられなかった。学校当局が日本の習慣を話して、教室内で帽子を脱ぐようにしてもらったと誰かが話していたが、真偽のほどは分らない。

あれから四十数年たったがまだご存命であろうか。

マッキンノン先生のお話は面白かった。「オタル　イズ　アニギナカスィティ」などとおっしゃる。にぎやかな所といなかくさい所があるというのだ。ミス・バグレーはそんなことは一言もおっしゃらなかったので、すごく面白く感じた。

しかし、そのうちだんだん私はマッキンノン先生の時間にあまり真面目に勉強しなくなった。そのことを考えると、私は大変はずかしく、先生の前に出て行かれないような気がするのである。

先生は実際に役立つことを色々教えて下さったのだ。前にも書いたが会話の心得として、パーソナル・クウェスチョンをしてはいけないことを強く言われたが、これなどは本当に役にたつ教えであった。また質問することの重要性も何度も話され、その練習も課せられたが、十七歳になったばかりの少年にはそれが分らなかった。後年英語の教師になって先生のご意図がようやく分ったが、あとの祭りであった。先生はその後それについての著書もおつくりになり、私もある人からもらって書棚にのっているが、この本は先生について練習をしないと十分な効果はないように思う。

ある日、先生はかなり大きなトランクを重そうに下げて教室に入ってこられた。目を丸くしてみている私達の前に、先生がとり出されたのは皿、スプーン、ナイフ、フォークの数々、そしてテーブルマナーのお話が始まったのである。当時の私は、氷水やかけそば位は食べた経験があったが、アイスクリームさえ殆んど口にしたことはなく、まして洋食など口にするのは一体いつのことかと思っていたが、そう思いながらもそのお話はしっかり聞いていたらしく卒業後洋食をたべる時どの位役にたったか分らない。

このような先生に二年間も受け持

たれていながら、どうしてもっと色々なことを教わらなかったろうかと口惜しい極みだが、後悔は先に立たず、また度しがたき小人であった自分を何としようか。

滝川中学校に職を奉じてから数年たった時、道庁施行の全道学力テストというのがあった。五年生に英語の試験があって、今は亡き浜林先生が主になって問題を作られた。ずっとあとになって浜林先生からシカに伺ったところによると、この英語の試験に満点をとったのが、当時小樽中学校（今の潮陵高校）に在学していたマッキンノン先生の御子息であったという。そしてこの方が現在日本文学研究の権威になっておられるのである。

マ先生来日の機会にお目にかかってお詫びの一言でも申上げたい気もしたが、家にあって蔭ながら先生の御健康を祈っているのがいいような気もした。

「マッキンノン先生、どうぞもっともっと長生きをなさって下さい。」と申し上げてペンをおく。

## 大正末期
# 外人講師の憶い出

西川正巳（大一五）

フランクと云うドイツ人の先生があった。ドイツ語に多いいわゆる guttural sound の余り上手でない英語で講義をされたけれど、かえってそれが僕達には判り易かった。僕等は先生から商品学の講義を聞いた。それで試験になると黒板に大きく Metals とか Celluloid とか、とてもデッカイ問題を一問だけ書いて問題を印刷されたことは一度だってなかった。（平素は講義を理解し易い様にとタイプしたプリントを沢山くれたけれど）問題を出すと先生はおもむろに机間巡視を始めて、背を丸めてうつむいて答案を書いている生徒を一人一人 You bend too low とか sit up, とか何とか云って姿勢を直して歩かれた。生徒は不正なカンニングなんかはしないと云う信頼と、近視を憂うる親心からこの親切な挙に出たのであろう。試験の最中でも先づ生徒の健康、体格と云うことを考えられるその教師像を僕は誠にありがたいものと今も思い起すのである。

二年の一学期に僕はこの先生の商品学に不合格点をつかまされて級長の入江君を煩わせて先生に交渉し追試の問題を予め教えて貰って二次にやっと合格点を貰ったことなども今は懐しい思い出である。先生が黒板に色々板書をされている間に幾人かの素早い級友がエスケープすることもあった。そんなとき先生は母国語でアインズ、ツヴァイ、ドライと声を出して人数を調べてわざと大袈裟な身振りで "Some gentlemen have disappeared." と歎息されたが、その表情はとてもユーモラスであった。ドイツの学術雑誌に立派な論文を出されて博士号を持っていられたと云うことである。Dr. Frank とお呼びするとても喜ばれたと云う子供らしい一面も語り伝えられていた。

デーゲンさんにはドイツ語を習った。僕はデーゲン先生と一緒に余市の林檎畑にピクニックする程個人的に親しくはなかったのに卒業後三年目位で遇然小樽近くの列車の中で出会った。"Excuse me, but I am a graduate of the Otaru……" とおぼつかない英語で話しかけたらいきなり "Oh, I know you, Mr. Nishikawa," と響きに応ずる様に自分の名を呼ばれて実に感銘したことがある。小樽へ着く迄僕を相手に英語でまくし立てられたのが、何か中学生の単語習得についての特別な先生独自の御意見であってそれが二、三カ月後の「英語研究」に先生の御名で出ているのを見たときは本当に嬉しかった。

ラウンズさんは小樽に入学した最初の外人の授業であった。若いイギリス人のこの先生がイキナリ "Good morning, gentlemen." で授業を始めたのに僕等はいささか戸迷いさせられた。Gentlemen と呼ばれることが何となく面はゆい気がしたからであろう。

マッキンノン先生には会話を習った。先生の著わされた "Question" をテキストに使われたけれども勿論フリー・カンバセイションが織り交ぜられて今から思うと食事のマナーや何やかや手にとる様にお教え下さった。日米国交問題で加州の排日問題が大きく問題になったとき、我々血の気の多い者達はその忿懣の鉾先を先生に向けて或る日の先生のご授業を全員ボイコットして先生に悲しい思いをおさせした事を今にして申し訳けなかったと思うのである。先生は日本語についても相当色々ご研究になっていられて伊藤整さんが、「若い詩人の肖像」の中に書いていられる様な日英語呂合せとでも云ったシャレを教室でしゃべられることもあった。階段教室でお得意の漫談の途中、廊下のベルが鳴ったトタンに「タイム・イズ・モーネー」と云う見事な捨台詞と共に先生のお姿は既にドアの外に消えていた。その先生がお元気で日本へ再遊せられ、十月一日、日曜日の夜、緑丘会名古屋支部総会で懐しの対面をいたしました。

はるばるとアメリカより来ましつる
　老師の声に張りありて嬉し
白き髪白き髭にもそのかみの
　おもかげ見えてただに嬉しき

キャメロン先生に三年生のとき貿易実践を習った。Notitngham 大学とロンドン大学の School of Economics を卒業して来朝された英人

（次頁下段へ）



# コレポンのラウンズ

白井孝一（大一四）

大正十一年の四月、私は緑丘当地高商に入学した。一年の教室は本館右手の角からＡＢＣＤ組の順に奥へ連らなっていた。私の教室は三方ガラスの明るい校庭に面した室だった。伊藤整の小説に「海の見える丘」というのがあるが校庭もその一つ。小樽には海の見える丘が到るところにある。彼と共にエスケープして正法寺の裏山で畑の大根を失敬して生かじりしながら漫談した思い出がある。

大学を卒業して若いロンドン子の妻君同伴でリバプールからブルーフアンネルに乗って小樽へ直航して来たのがラウンズである。私共Ａ組の教壇に立ったのが多分第一声ときいていた。開口一番ヒヤ・リズ・アイ・カイヴル。さて何と言われたのか一同ノートをとりかねていると、黒板に書き出した。

Here is a cable.

何のことない、彼の発音が正しくなかったのだ。その時東京出身の某君があれは cockney だと云って〝われわれは King English をならっている。キング・イングリッシュを使えと、抗議した。彼は、君達はエーというからいけない、エイと発音しなければいけない。すなわち double bowel ei を主張しながら弁解していた。後に知ったことだが、彼の妻君が、あなたコクニーを使わぬようにと注意されたので、吾々三年生になって再び講義を聞く頃には正されていた。だが早口になるともとの黙阿弥、当時英国の学生間では盛んに使われていたということである。いわゆる英語のベランメイ口調というところらしい。

二年生の時は外語大会の英語劇の指導を受けた。プロローグに、死んだ直島一郎君のヴァイオリンや私の下手くそなピアノなどから始まり、文部省から女形を出してもよいとのお達しで私はお妃を演ずることになり新モスの桃色に銀紙で模様を張り付けたのを着付け、パチリをといて顔中真白にぬりたくった。そして口唇一ぱい口紅を付けたからたまらない、手の黒い、口の大きな女が出来上って大笑い。今時の学生は専問の美容師に化粧させてお利口なことだ。

三年生の或る春光麗かな日だったが、別に受講拒否などという深い意があったわけではなく、ふらふらと一同春光にさそわれて彼の時間に集団エスケープした。行った先は天狗山の下、未武牧場の下の草原に集まった。呑み助は一升瓶一本手に入れて来たらしい。草っ原に寝そべって暫らくして皆で天を仰いで「お茶を持って来い」と叫んだ。最上町通りのおかみさんが大きなヤカンにお茶と茶碗を持って上って来てくれた。大正時代はそういう好き時代であった。翌日教務主任に組中コッテリ油をしぼられて大団円となった。

吾々が大正十四年三月に卒業すると、彼も間もなくやめたらしい。いわば若い教師の十二回生ということになるのでなかろうか。

気質の権化みたいな身嗜みの実にいい先生で何時もきれいに shave された端正な顔立で教壇に立たれるので僕は心中秘かに先生のお顔を一個の審美的対象物として眺めながら先生のお口を漏れる Kings English を夢うつつに聞いた。僕の座席は何時でも教壇の真下であったのである。或る年ちょっとした動機から先生にクリスマスカードをお送りしたら丁寧なご返事を頂いて恐縮したことがある。先生は横浜高商に移られ二、三の英文著作を公にされたが、そのうちの

The Students' Guide To English Book-keeping By R. E. M. Cameron が一冊僕の手許にある。その中で先生は This work is the outcome of nine years teaching of English Book-keeping in Higher Commercial Schools in Japan, first in Otaru aud later in Yokohama. としたためていられる。

【お詫び】

前号四十五頁〝表紙絵〟について尾形圭介君の所属を新制作派と紹介しましたが、二紀会の誤りにつき訂正します。

# フランク先生、デーゲン先生そしてもう一人ウランズ先生

M　O　L　E

（大一二）

### フランク先生

フランク先生はドイツ人で理科の先生であった。私達が習ったのは二年生の時。英語で講義をなさるのだが、ドイツ訛りがあってなれる迄は苦労した。

先生は最初に次のようなことを私達に言われた。一区切りついたところで若し分らない所があったら、遠慮しないで「ワンス・モア」と言えそしたらまた説明する。分らんのをそのままにして先へ進むと、だんだん分らなくなってしまうから―という意味であった。そこで我々は先生の講義の一節が終って「ドウユーアンダスタンド？」と言われると、すぐ誰かが「プリーズワンスモア」という。するとフランク先生は、ちっとも厭な顔をしないで同じ所を繰り返された。言葉使いなど多少ちがっていたが。そしてその一節の終りにくると、「アイキャンゴーオン？」と尻あがりにきかれる。「イエスサー」というと先に進むという具合であった。

ある時まことに珍らしく一寸脱線して何かの話をされた。講義に直接関係のない話である。話を元へもどして先に進もうとした途端、後の方から「プリーズワンスモア」といった奴がいる。私などハッ！として先生の顔をみたら、ほんの瞬間苦笑のような表情を浮べられたが、またその話をなさった。その前からフランク先生の辛抱強さにおどろいていたが、この時はシミジミ感じ入ってしまった。

一学期の終りか二学期の終りの試験の時である。その学期には鉄と鉛とアンチモニーか何か習っていた。ところが上級生にきくと、鉄を習った時なら鉄しか出ないというのである。私はもともと理科は不得手だし、上級生がいかにも自信をもっていうので、鉄のところを一心に勉強した。そして合併教室で待っていると、フランク先生が入って来られてチョークで黒板に問題を書かれた。おどろいたことに、その年は鉄以外の金属だけが出た。かなり多数の学生が「アイアンプリーズ」と哀願したが、ニコニコ笑っているだけで取り合わない。その時どんな答案を書いたか忘れたが、お情けであろう、何とか及第した。

答案を英語で書く関係で、和英辞典の持込みが許されていたので、中には色々細工してきた者もあるようだ。

フランク先生の実験は私の苦手であった。一応言われた通りにやってみるのだが仲々うまく行かない。いつであったか、アルコールランプで熱していたフラスコの底がぬけてグチャグチャになった。いやになってボンヤリしていると、背の大きい先生は目ざとく見つけて側に来られ、「ホワットアーユードウイングナウ？」とおっしゃる。フラスコがこわれましたと下手な英語でいうと、すぐさま「トライアゲン！」という。青い青い眼が眉の下に深く入っていて、その眼で上からじっと見つめられ、こんな風にいわれると気の小さい私は身のちぢむ思いであった。

ドイツ訛りの英語で困ったことは前にも書いたが、こんなことがあった。私のクラスに若林君という人がいたが、この人のローマ字名を発音する時、先生は必ず「ミスタ・ヴァカバヤシ」と発音するのである。とても温厚な人だがよく腹を立てていた。温度という語がテンパツァのようにきこえるのである。しかしこの語なんか理科の授業だけあって何度も出てくるからすぐ覚えて、かげでよくまねをした。

デーゲン先生

先生はスイス人で担当はフランス語とドイツ語の会話。やはり英語を使って授業をされた。私はドイツ語の組であったが、当時はフランス語は希望者が少ないのに反して、ドイツ語は希望者が多かったので、一クラス四十人位はいる。先生は別に教科書も使わないで、はじから「ヴアスイストダス？」などといいながらクラスをまわる。学生の方はそれこそモタモタしているものだから、五十分の授業に一回あたるのがせいぜい、一度あたれば厄を免かれた気になって、他の人の会話なんかろくすっぽきいていないのだから、あれでは会話もうまくなる筈がない。

デーゲン先生はピアノがお上手らしく、一度有料でピアノ独奏の会をされた。その時はじめて私はベートーベンの「月光の曲」をきいたのである。ピアノはまだまだ珍らしいころで、小樽にも指折かぞえる位しかなかったろうと思う。そういう時代だから、「月光の曲」の面白味も、先生の腕前のほどもまるきり分らなかった。

いくらか記憶がさだかでないが、ピアノの演奏はきくものであると同時に見るものだ、目をつぶってきいていてはだめだ、と言われたのは先生であったように思う。ほんとにそうかも知れない。

一度だけ先生は教室でドイツ語の歌を教えて下さった。「イッヒハッテアイネンカメラーデン」ではじまる歌を、足早に机の間を歩きながら唄って下さった。その声の美しかったこと。これは私も覚えて、今でもうたえるほどんど唯一のドイツ語のうたである。

雪が小樽の山々も町も埋めつくしていたある朝、空が目もさめるように青かった。学校に出かけた私は、地獄坂に出るところでデーゲン先生にお会いした。他に人通りもなかったので、何ということなしに先生の側に近よって、下手な英語でお話をしながら学校迄行った。私が青空の美しさについて語ると、先生も本当に美しいといい、これと同じ位美しい空を昔も見たことがあるとおっしゃって、どこか忘れたがヨーロッパの町の名をあげられた。もう一つ記憶にのこっているのは、先生の英語が私が想像していた程には流暢でなかったことである。そういうこともあって、私などでもそう気おくれしないで、一しょに歩いてゆくことができたのかも知れない。

### ラウンズ先生

この方はイギリス人。その前におられたジョーンズ先生の後任として来られた。私は三年の時週五時間教わった。商業、経済、簿記などである。オックスフォードの出身とか伺ったが、発音が少しちがっていて、ノートするのが始めの内は困難であった。セームをサイム、デイをダイという発音だからなれる迄大分苦労した。学生が筆記できるようにゆっくり話をして下さるのだが、中学校時代に書取りを余りやって来ない人達は、閉口していた。しかもその授業が週に五時間（五十分単位だが）もあって、一時間に二頁から三頁ノートする訳だから、少し怠けたりするとノートがたちまちブランクだらけになる。他人のノートを借りても借りられた人自身、スペリングを思いのままに書いておくこともあるから、試験ともなると大変であった。

茶目な奴がいて、黒板に先生の横向きの似顔をかいて、先生の後頭部の髪の毛が少し上にあがっているところを誇大にかき、上衣のポケットからいつもキチンとのぞいているハンケチと両方から線をひいて、「ユースレス」とした。先生は入ってきてそれをみると、ヘンな顔をして早口に何かいうと教室から出て行ってしまった。授業がつぶれてうれしいというのもむろんいたが、誰かあやまりにいって来ようというのもいて黒板をきれいにして代表が二人位教官室へ出かけた。しばらくして教室に見えて、いつものように授業をされた。

先生の講義中、ノートもしないで話をしている学生がいると、そちらの方を向いて「サンキュッ」と少し尻上りに言われる。「サンキュー」という語はああいう時にも使えるんだなと覚えた。そう言われてまだ話をつづけていると、出席簿の角で教卓をコンコンとたたいて、もっと大きな声で「サンキュッ」とやられる。これだけ言われれば下でもむいて黙らざるをえない。

ある時先生は私たちに作文を書かせられた。題はなかったような気がする。何でもいいから当時の感想でも書かせられたのだろう。しばらくして講評があったが、その時今は亡き島栄蔵君の名前をあげて激賞された。これだけの英文が書ける者はイギリスの大学にもたくさんはいないと言われた。島君の英語の力には前々から敬服して、いくら努力しても人の好い彼に返した訳。人の好いのを好いことにして、正規の授業を嫌い、独語の流行歌の紹介許り所望した。北海屋ホテルの下宿に訪ねてさえ来ればビールを嫌程飲まして独逸大学生の様子を満喫させてやると云われるのを好い気になってどやどや押し掛けた心臓男も相当あったそうな。独語仏語程には英語は上手でないと自分でも云って居られた。

nephew を独語では Neffe と云う。それは分って居るが、nephew と云う単語がどうにも思い付かない。「君達は英語はよく知ってるんだから」と誰彼にきかれるが、皆そらとぼけて、知らぬ、知らぬと云う。黒板に Neffe, Neffe と書きつらねて苦しんで居られる様子を見て皆喜んで居た。天罰てき面、そのために独語劇に主役を演じた萩原君を除き、我々悪童連どれも独語は物にならなかった。悪いこと許りして居たものである。

露語のネフスキー教授に就ては既に本誌で述べられたことがあり、数々の「伝説」もあるが、一応略する。とにかく語学の天才と云っても好い人だったようである。氏から正しい日本語を嫌応なしに教えられた連中もかなりあったそうである。彼の後任のスミルニッキイは白系の公爵だったそうな。世が世なら容易にお目通りもかなわぬ高貴なお生れだったのである。そのお方に或る生徒がエビスと発音をし、その意味を質ねたと云う。私は露語は全然分らないが、何でも露語でエビスと発音すると、とんでもないものを指すのだそうである。それで昔エビスビール



## 緑丘の外人群像

菅野祐治

（大一二）

緑丘で教わった外人教師の思い出となれば先ず商品実験のフランクさん。伯林大学助教授だったのを強いて来任頂いたので校長以上の高給と聞いた。堂々たる体格、独自のユーモア。講義の内容は語学の関係上さして高級なものではなかったが、我々の聞取能力の不充分なことは百も御承知だから、御自分から「ワンツモア？」と質ねられる。我々習い立ての独語使って見たくて仕様がない。What is this？と聞く処 Was ist das？と質ねる。言下にDas ist eine…聞き取れない。あっけにとられて居ると軽く頭を叩いて行かれる。何とも云えない愉快な存在だった。

ジョンズさんには教わらなかった。しかし毎夕やや前かがみにラケットを小脇にテニスコートに通われる、あの哲人的な歩みは特に印象的だった。祖国の雑誌への寄稿から上田貞次郎博士に認められ、一つ橋に引き抜かれた。だから、その後任ラウンズ教授も、ジョンズの後任たることに大きな誇りを持って居られた。仲々要領を得た。明快な授業をする人だった。がロンドンから直接小樽へ来任されただけ、生粋のロンドン英語 "A" の発音には少なからず面くらった。

一番いぢめて上げたのは独語と仏語を教えたデーゲンさんだった。小尾さんの独逸文法でいじめれた仇を

あんな風にはなれないと思っていた私であるが、更にその思いをあらたにした。その後島君に会うと、もう一つ書いてみよといわれて困っていると、それほど困ったらしくもない笑みをうかべていた。

伊藤整氏の「若き詩人の肖像」をあとで読んでみると、氏もラウンズ先生に習い、やはり作文を書いて大いに賞められたことが書いてある。島君が三年の時伊藤氏は一年におられたと承知するが、緑丘の学園に少なくとも二人、イギリスから来た年若き教師を感激させた人がいることは、他人事ながらうれしい感じがする。

# ラウンズ教師

伊藤　整

（大13）

英人のラウンズ教師は、ある時、生徒たちに英文のエッセイを書くことを命じた。私は万葉集論を書き誰かの万葉集の思想研究を参照して、仏教が根を下ろす前の日本人の思想は、明るいもので、それ以後の仏教的なペシミスティックな暗いものとは違っていた。本来の日本人はむしろギリシャ的と言うべき明るさを持っていた、というエッセイを、覚つかない英文で書いた。

教室でラウンズは、いつもの癖で上衣の袖口からハンカチを出してハナをかんでから、生徒をアトランダムにあてて、書いて来たものを読ませた。一人が立って経済の論文めいたものを読み終えると、ラウンズはそれは先頃の『神戸クロニクル』のエディトーリアルの影響がある、と言い、もう一人が読むと、よく出来たがオリジナルなものとは思えない、と言った。何かの本の引きうつしにちがいない、という意味であった。そのあとで私があてられて立って読んだ。私は中学生の時以来、教室で本を読むとき、いつも声がふるえて困るのであった。その時は、英語だと思って、別な意識が働いたのか、さして震えずに読み終えた。そしてこれはイギリス人が聞いたら、ずいぶん拙いものだろう。しかし仕方がない、と思いながら坐った。

するとラウンズは、今までとうって変った口調で、私のエッセイがスプレンディッドであり、クワイト・オリジナルだと言って、興奮した面持ちでほめた。彼はそれに続けて、"As a poet, Mr. Ito has made some reputation already in this school. Some day, he will make himself famous in this country." と言った。私は、はっと思った。私が校友会誌に発表した詩のことで私に何か言った教師など、一人もいなかった。それに、一学級に二百人もいる生徒の中で、私を特定のイトウだとラウンズが知っていることすら不思議であった。教員室で英詩好きの小林象三教授か、スティーヴンスンやハーディーを私たちに教えている浜林生之助教授が、私の詩のことをほめてラウンズに話していたにちがいない、と私は思った。私は大変うれしく感じ、顔がポーッとほてった。蒔田栄一はオレに悪意を持っているだろうから、私の詩のことをラウンズにほめて言う筈がない、と私は思った。私は、うれしく思った次に、反動で、はかなく悲しくなり、心の中で考えた。イギリスという地球の遠い反対側の国からやって来たこの経済学者が、オレの英文のエッセイを称讃し、おれの日本語の詩を推称し、おれが将来有名になるなどと予言したって、彼は日本文を読めるわけではない。おれの将来についての彼の予言が当るだろうなどと考えて喜ぶのは、空しいはかないことだ。あてにすることのできない称讃の言葉を聞いて、おれは徒らに禁欲の重荷を一つふやしただけだ、と私は思った。にもかかわらず、私はやっぱりうれしかった。しかし私は、ラウンズ教師に近づくことをせず、その後間もなく、彼の妻が産後の病気で入院したと聞いた時も、廊下ですれちがう彼に見舞の言葉を英語で述べる勇気も持てなかった。（「若い詩人の肖像」から）

と云うのがあったが、ロシヤ向け輸出用には特に名称を変更したそうである。生徒の質問に公爵はにやっと笑われたそうな。しかし教官である以上答えない訳には行かない。困じ果てた公爵は、やおら右手で妙な形のものを作り、そのまま右手を高く差上げて急いで教官室に亡命なさったと云う。蓮田（勉二君）の云うことだから真偽の程は保証しかねる。

上述ラウンズ教授は何でも気さくに教えて呉れた。当時（尤も今でもそうだが）私はフェミニストで婦人問題に興味があり、そうした文献をあさって居た時、我が国の女性問題を扱った手頃な原書を図書館で見付けたので、それを抄訳して卒論とすることにきめた。処が、一カ所どうにも意味がはっきりしない。それでその原書を教室に持参し、授業後分らない処を指示して質問した。処がいきなりその本の表紙をかえして見、"Oh, American?" と叫んだ丈、一言も返事されない。アメリカで出来た本に関する質問なんて、返事出来るかって訳なのである。止むなく浜林さんに質ねて意味を解し得たのであるが、日頃おとなしいあのラウンズさんがこれである。成程英米人の間の不和の感情はこうもあるものか。その現実を見せつけられ、「世界の平和望み遠し」の感を懐いたことを今に記憶して居る。

K・バグレイ先生に関し、思い出すまま書いて見る。

御自分で題を出され、それに就いて我々が短文を草する。次の授業時間我々が次々起立して暗誦するのを聞いて適宜直して下さった。



# 『ホエン アイ ケーム ツー オタル』作詞のデーゲン先生の思い出

油小僧（昭二）

大正末期私達は先生から独逸語を習った。師はスイス人であり、独・仏両国語を担当して居られ、仏語を教わった組もある。

師は我々に解り易い英語で独逸語の授業をされたが、如何なる理由か『毛の生えた独逸文字』に泥めず、そのうえ日本人のヘナヘナした先生の独逸語授業も面白くなかったので私は『アイヅル・ボーイ』の本領を発揮して『イッヒ・カン・ニヒト・フェルステ・ドイチェ』で在学中押通して了った。思い出して全く慚愧に耐えない。

デーゲン先生は学生に対して一様に親切で授業にも熱心であり、しかも稀に見る男らしい快男子であった。英語の『マンリー・マン』を云うのは師のような男子を指すのだろうと常に敬意を表していた。これは私許りで無く、当時の全学生は心から師に敬愛の念を捧げていたに違いない。

師は音楽が得意でピアノも仲々上手らしかったが、音痴の私にはその腕前を云々するのは不可能だ。唯一つ全緑丘人として忘れてならないことは、今もなお愛唱されている『ホエン・アイ・ケーム・ツー・オタル』は師の作詞（曲はスイスの民謡にあるらしい）である。校庭の咲き誇る八重桜の樹下で眼下に美しい小樽の港を、更に遙か遠くシャコタンの薄紫に霞む山々を眺めつつ、師から教ったこの歌のレッスンのあの楽しかった情景。四十余年を経た今もなお眼前に彷彿として残る。

斯くてこの歌の愛唱される限り、デーゲン師の名は夢美わしき緑丘と共に永遠に生きるであろう。師は独逸語の出来ぬ私を如何なる訳か『ミスター・スマイルズ、ミスター・スマイルズ』と仇名までつけて可愛がって下さった。恐らく授業中、師から『当てられても』回答が出来なくて、仕方なく唯ニヤニヤ笑っていたためかも知れない。

愈々卒業試験の発表のあった夜、温情ある大野先生他諸先生のお蔭でヤット虎口を脱した私は、同じ思いの悪童数人と暫く振りに丘を降りて、我ながら殊勝にも一パイのコーヒーを祝盃にナゾラエていた折柄、突然デーゲン先生が一人で入って来られた。『お蔭で卒業出来ました』とお礼を申上げると、師は『コングラチュレーション』と云って右のポケットから乾杏子を取り出してすめて下さった。これが師にお目にかかった最後である。私達が丘を巣立って何年か後、ワンマンで有名なT教授と意見を異にし、丘を去ってタイ国に行かれた師には必ずしも幸福の神は訪れなかったらしい。

あの文字通り美しく仲睦まじかった夫人―曾つて軽川へピクニックに行った時、私の前で恥らいながら『ジス・イズ・フォア・マイ・ハズバンド』と云って生クリームをドッサリ師のカップに注いだ。あの主人思いのみ目美わしく貞淑な夫人―とも別れ、終戦後アメリカ行の船便を求めて東京のM船舶を訪れられたらしい。たまたま同社の役員をしていた私と同級のY君、先輩で当時未だ専務だったSさん、二人で師に会い、その気の毒な身の上を知り『フリー』で師の希望通りアメリカへ送り届けたとのこと。全く隠れた緑丘の師弟愛美談ではあるまいか。

最後に米国に行かれた師がマッキンノン先生同様御健在で御幸福な生活を御過しのことを心から御祈りする次第である。

（一八頁から）

御健在であられるならば（七十五、六才位でしょうか）マッキンノン先生のように小樽へ再度お迎え出来ないものかと懐しまれます。因に夫人は先生より一層体格の良い、今でいうグラマーで、見事な頼りになるお姿でした。大きなお嬢さんもおいでした。ポートレートは昭和四年卒のアルバムの中からうかがうばかりです。

或る時与えられた題が「我が愛好する人物」だったので、何気なく私は石川五右衛門を愛好すると云った。先生は別に何も特別に云われなかったが、越崎君始め同級生皆が驚いて、一躍私はクラスの名物男になった。私としては格別何も奇をてらった訳ではない。英人が一般にロビンフッドを愛好するように、盗人ではあるが貧民のために善からぬ金持を襲う、その義賊的行為を賞美したのである。バグレイ女史は分って下さったようであったが、同級生には妙な感じを与えたらしい。

次にこれは外人教師には関係ないことだが、英会話に関することなので付記する。

もったいない話だが、生物学者大平頼母先生からも英会話を教わった。先生が "Do you take sugar when you drink milk?" と聞かれたので "No, I take no sugar, because my name is Sugar-no" と答えた。そのためにMr. Sugar-noとして先生にだけは名前を覚えて頂いた。当時学校に菅安右衛門と云う先生が居られたりして、皆が「カンノ、カンノ」と呼ぶので、いささか気を悪くして居た際だったので嬉しかった。しかし一般米人のように「ミスタ、スギャノ」と呼ばれると、ゾッとする。「ギョーテとは俺のことかと、ゲーテ言い」と同じ。

# R・M・キャメロン先生の憶い出

松本要一（昭四・税理士）

先生の在職期間を「大阪緑丘」紙で拝見すると、大正十四年九月一日から昭和六年三月三十一日までとなっている。その後は横浜高商へ転出された筈であった。

私が母校に入学したのは大正十五年四月であったから、一年生から三年生を卒業するまで確かに御世話になったことになる。

お顔は赤ら顔で、小さい感じであったが、身体は能く引き締った凛々しい姿であった。それもその筈、オックスフォード大学在学中ラグビーのレギュラーであり、陸軍中尉の軍籍にもあったと聞かされて成程と思ったのであった。

三年間を通して、商業と経済を英国の高校程度（現行六三制と考えて）のテキストを使用して講義されたと記憶する。その中で今なお印象に残っているのは、景気循環説をボールドに円を画いて、繰返し繰返し説明されたことである。

軍隊生活を経験されただけに時間には格別几帳面で、殊に私共が二年生の時は、私のクラスは奇妙に第一時間目が多かった。そこで眠い盛りの学生達は折々遅刻して来るものがあったが、ノックをして来るものがあったが、ノックして入室して来ると、必ずといってもよい程「ゲット・アウト」と叫んで受講を拒んだものである。

度々の遅刻生の中の一人は私であった。処が不思議なことに私の場合だけは、ドアをノックして細目に開くと、彼は私の顔をみて「カム・イン」と、のたもうのである。辛うじて「サンキュウ」と小声で答え、抜き足差し足自席に着くのである。クラスメートは苦笑し乍ら、「松本だけは別格だなあ」と小声で囁くのを聞いたのが昨日のことのように思い出される。何故だったろう。それは決して出来が良かったのではない。折角先生が熱心に説明されるのに、生徒が反応を示さぬ程教師として張合いのないものはない。（後年私も教壇に立つ身になって痛感させられた）。私は元来英語は不得意だから満足な質問は出来ないが、コックリ肯いてみせたり、進度を妨げる茶目気があって「プリーズ・ワンスモア」と手をあげたりしたものである。これが先生にとってはマークされる生徒となったものであろうかと推察される。

二年生の終り頃、私は学生結婚をして姓が金子から松本に変った。その折、出席をとられた教授が、訂正されてあるローマ字を読みにくそうに〝マツモト〟と云い、どうして姓が変ったかと質問された。でも私には答えられなかった。

クラスメートの誰かが、「ヒー・イズ・マリッヂ」と説明され、私は赤面したが、先生も「お芽出度う」と私の顔を見直して、我事のように平素の赤ら顔を一層赤くしてニッコリされた。

こんなこともあって、どうやら卒業さして貰ったのであったが、昭和七年六月下旬の或日、横浜桜木町駅前の市電安全地帯に、カンカン帽をかぶって立っている私の前を、軽快なスポーツカーに乗った外人が通り過ぎようとしてフト私の姿を認め、振り返って「ハロー、ハロー」と呼びかけ、車はストップした。どうしたのかと良く見れば、キャメロン先生その人であった。「久し振りだなあ」と話しかけられるのであるが、聞くだけは聞けても、思うように返事の出来ぬもどかしさと残念さ、それでも最高のブロークンで近況を答え、握手を頂いてお別れした。

これが先生との再会であり、永い別れであった。大東亜戦争となり、日英は闘わねばならぬ不幸な事態になったが、先生は祖国の軍人としてビルマ戦線に従軍された模様と人伝に聞いた折は、感慨無量で、戦争というものが本当に呪わしいものに感じられた。

（一七頁へつづく）

積水化学工業㈱
チッソ㈱　特約代理店　プラスチックの綜合商社
旭化成工業㈱

田中弥商事株式会社

取締役社長　田中弥三郎（大12）

（本　社）　大阪市東区北浜2丁目74番地　TEL(06)6556代～9
（東京出張所）　東京都千代田区神田淡路町2丁目19番地　TEL(251)2271・5259
（九州出張所）　福岡市奈良屋町2番19号　TEL(23)3391・6022



# 懐かしい人　ストリーさん

玉井武（大一二）

**一、ストリーさんとの出あい**

当時の小樽高商には新任の外人講師（勿論英語科関係）の世話は、新米の日本人教官がするという慣わしがあった。この不文律通り、私がストリーさんを小樽駅に出迎えたのは、昭和十二年六月十五日の午後のことである。度の強い眼鏡をかけ、紅顔長軀を駱駝色のオーバにつつみ、ゆるめにバンドをしめた一英国青年――これがオックスフォードを卒えるとすぐ、ロンドンの日本大使館で取交わした契約書の通り、小樽高商に赴任して来た彼の来樽第一日の姿である。この後彼はここに三年間の滞在をする。そしてその期間に彼がこの国に寄せた関心がやがて実を結んで、母校オックスフォード大学に設けられた極東問題研究所の研究員となることになる。

**二、在樽時代の思い出**

彼を小樽駅に出迎えた日のことは、余りにも印象的で忘れられない。彼は東京から、当時まだ珍らしかった飛行機で札幌入りを試み、汽車に乗り替えて小樽の土を踏んだ。彼の言葉によれば、東京で会ったファーミンジャーの奨めで、英国で受取った赴任旅費から奮発して空の運賃を捻り出したが、お蔭で本国からの荷物は別途に送らねばならぬことになり、俺は馬鹿をみたと言って笑った。しかし津軽海峡以北の空の旅は、大変景色がよく、大空から見下した支笏・洞爺の眺めは絵をみるようだったとほめ、飛行機を降りて札幌へ出たら、市民は美しい衣裳で歩いており、町かざりも綺麗でとても賑やかだったと、地上の姿もまんざらでなかった様子。考えてみたらその日は札幌神社の大祭第一日！道理で……。

来樽当初のストリーさんは越中屋ホテルに泊っていた。同僚にはマッキンノン氏、メーチン氏など居たが、着任早々の彼ではあり、人柄にも大きな相違があったためか、この人達とは余りなじめず、同年兵の自分が遊びにゆくとノスタルジアにとりつかれたような顔をして、海岸に行こうと誘い出しては釣人の垂れる糸を眺め、帰国の時には北極海を通って帰りたいなどとポツリと洩らしたり、列車の入れ替え作業のいそがしい線路の見える所に佇んでは、ポカンと下を眺めながら、「日本には鉄道友の会がありますか？僕は英国の会員になってるんですよ」などときかせてくれた。ノスタルジアのとれぬ間は、今日で小樽へ来てから四週間だ、今日で六週目に入ったなどとポソッと洩らし、きかされるこちらは週を単位に時を数える西欧の考え方を追っかけ廻していた。

ホテルを引払って高商正門上の外人官舎に移ったのは夏休み前だったかしら？パンドラの箱みたいなのをあけると、出て来る、出て来る、様々のものが。「ミスター・タマイ・ホエアリイズ・マイ・ホット・ウォータ・ボトル？」と血眼でさがしている。手伝ってはみたが、こちらに分る筈のありようもない代物――つまり日本流に言えば、水枕そっくりのものがそれだった。（所変れば水枕も湯タンポになるか……）

小樽にまだなじめないでいる彼を七夕だ、月見だと言っては家に招いた。史学科出身の彼は、故事・来歴や伝統の説明を私に求めた。常日頃は来訪専門の彼にも招待する日がまわってくる。それはクリスマスだ。クリスマス・ツリーに色々なものをさげて、集まった子供達に片言の日本語をつかっては取って与え、食卓一面に積み上げたサンドウィッチやクッキーを覚束ない言葉ですすめている。クリスマス・ウイザウト・チルドレン・イズ・ナンセンス。こういって毎年彼は知り合いの子供達を招いた。

故国には小樽の盛夏のような酷暑はないのか、小樽祭の頃は大分暑さを苦にしていた。よく見ると本当に彼の服はどれも厚地で夏向きではない。そこで思い切って夏服新調ということにした。花園大通の一越という洋服店に二人で入っていった。勿論ストリーさんが注文主で、私は通訳。万事トントン拍子に進んで、では寸法をいただきましょうということになって、肩の荷をおろした私は少しはなれた椅子に引下って休んでいた。ふと見ると、前の畳一帖分もある大きな鏡の中に、ストリーさんがこちらを向いて立っている。うしろ下半身の寸法をとらせている最中だ。昔、私はワイシャツの前の部分が非常に長い理由を説明されたことがあったが、今ここにそれを実証する姿に接して、思わず目をそらせた。

**三、ストリーさんとの再会**

ストリーさんの着任後一カ月もたないうちに、支那事変がはじまった。「勝って来るぞと勇ましく」学生応召の度に、日の丸の手旗は花園大通に揺らぎ、ストリーさんが行列に入って行進する姿も再々見かけた。慰問袋にも欣然参加した。しかし周知の通り、事変は不拡大方針をすてて、対米英宣戦と進み、カナダを経て帰国したストリーさんとも、しばらくは音信不通の状態が続いた。戦争が終ってからの或る日、豪州使節団の一員として、ストリーさんが来朝しているというニュースを小樽高商の一卒業生から銀座附近での立ち話できかせてもらった。私は宙をとんで尋ねてみた。昔ながらの温かい握手で私を迎えて、ストリーさんは言った。

"Years have come saftly to

you !"

それ以来ニュージーランドの大学から、次はオックスフォードからと数回の来朝、そのたびに一度もかかさず会っている。

成城町に一戸を構えた時は奥さんと愛児との三人暮し。門標には「巣鳥」と書いてあった。帰りは駅迄送ってくれた、愛児をうば車に乗せて。駅の売店で「文芸春秋」を買って車窓から入れてくれたのも懐しい思い出。

ストリー一家が賑やかに緑丘を訪れたのは、その年の秋だったろうか。テレンス坊やが図書館横のローンを跳んで喜ぶ姿に、お二人はさも満足した様子だった。ストリー夫人が写真機の蛇腹を伸して、愛児の躍りはねる姿をうつしていらした様子も忘れられない。冬のスキーの味を忘れかねて、飄然渡道し、緑町の我家で身支度をして、植田英次君と三人、雪を排して裏山にのぼったのは暮れも押迫った頃のことだった。阿寒方面を金井勇君と一周したのは確か盛夏の候。自分は丁度帯広に出張中で、駅のホームにかけつけて、やっとの思いでさがしあて、帯広在住の山岳画家高本暁堂画伯の摩周湖の絵を贈った。今オックスフォードのストリーさんの家の食堂にこの絵が掲げられているときく。この時の帰り道にスエズからストリーさんの寄せた絵ハガキに、摩周湖の美は自分がこれ迄に訪れた世界中のどこの風景にも勝るものだと書いてあった。

最近の出会いは二年前の昭和四十年暮れの来朝の時だ。テレンスを故国において、ストリー夫妻だけの来日で、十二月十八日の夜はお二人の宿泊先の国際文化会館に彼のゲストとして一泊し、夜更けるまで三人で語った。中庭に明滅するクリスマスツリーの灯を見下しながら、海を越えた友情の美しさを泌々と味った一晩だった。

**四、本国に於けるストリーさん**

小樽三年の生活を基礎にストリーさんが築きあげたのは極東政治史の研究である。再三、再四にわたる彼の訪日は、その方面の資料集収が目的で、研究の成果たる著書も世におくられ、オックスフォードに於けるそのユニークな存在が、次第に重みを加えて来ていることは想像にかたくない。またストリーさんは日英協会の輝ける会員であり、他方、英国内に出版されている教科書の日本に関する誤りを訂正する機関の会長にもおされているということだ。あの穏やかな人柄が、この仕事には最適任者と私も信ずる。日本に関する正しい理解と認識を英国人の間に普及すべく、多忙の身をもいとわず努力を傾け、この方面の仕事にたずさわっている日本人のよき協力者と親しまれているストリーさんに心からの感謝をささげ、御一家の御多幸を祈って禿筆をおくことにする。

## 小樽での〝緑の春〟

〝緑丘五十年史〟から

一九三七年六月一五日小樽に赴任した時、「私の心は大きくふくらんだ」と言葉通り云うことができる。浜林教授が「まだ二十三才の坊ちゃんだ」とおっしゃる通り私は二十三才だったので、小樽のすべてのものが新鮮で、心はずむものだった。

私は小樽についても、北海道についても何も知らなかったし、日本についてもほんの少しのことしか知らなかった。

私は双発のダグラス機で朝九時に羽田を発ち、途中、仙台、青森を経て午後三時に札幌についた。そこで苫米地教授のお嬢さんとご主人の出迎えをうけた。札幌からは汽車である。銭函と小樽の間の海岸線と海の美しさに深く感動したのを覚えている。小樽駅では浜林教授とゼミナールの学生の歓迎をうけた。高商生の紺色の制服とひさしのついた帽子が私には奇妙に思われたが、学生達の笑顔で心暖い歓迎を、今、生々と思い出すのである。

私は新しい環境で楽しく過せるだろうと感じた。そしてこの第一印象は全く正しかったのである。私の小樽での三カ年は、冬の間二、三カ月ホームシックにかかったことを除けば全く素晴らしい年月であった。

こうした点で、第一に苫米地校長や学究的で手腕のある高商のスタッフの方々、第二に地獄坂と呼ばれる長い坂道を、朝夕登りおりした学生達に、心から感謝している。

私は皆んなが好きになってきた。私の日本に対する興味、現代日本史に対する関心は、こうした高商の人達の親切な心根、熱心な研究心、自分達の中にいる外人への思いやり、などによって刺激されて湧いてきたものである。この三年間を振り返ると、私は余りいい教師ではなかった。私には安易に流れすぎる傾向があった。クラスの漫談要求に応えて、オックスフォードの生活や、松竹座や日活館でみた新しい映画の印象などを話しすぎたように思う。

長い時間をかけて私は毎日日記をつけ、今でもそれを持っている。私は沢山の思い出を持って帰った。クラスルームのこと、火鉢を囲んでの教員室での話、紀元節や明治節のこと、学生が私の家へ来たこと。高商散歩（Kosho walks）や ピクニック、街へおりていったこと、などである。

小さなグループが英語を勉強するために「ABCクラブ」を結成した。学生達は本を読みに私の家へ集まった。

例えば、ある夜には私達はBaconのエッセー "Of Studies" をよみ、議論をし、主題の流れのすべてを検討した。又、時として街の中で会合を持つこともあり、郊外へ探訪に出かけたこともあった。

一九三八年の秋、ABCクラブのメンバーと余市を訪ねたことをよく覚えている。私達はリンゴが枝もたわわにみのった美しい果樹園を見せてもらった。私の日記によれば、余市行きの満員バスの中で、私達は伊藤整の作品について話しあっている。

ある夜、ABCクラブの学生が私の家へ集まって、戦争はさけられるかどうかを論議した。突然、緑ケ丘の下の方から半鐘の鳴りひびくのが聞えた。高商の前庭におりてみると松竹座から燃えあがる炎がみえた。この火が、当時の無気味な世界状勢を象徴しているように思われた。



北支那における戦いは、私が小樽に着任してから三週間後に始まったし、ヨーロッパからのニュースも、支那からのニュースも月と共にけわしくなってきていた。

更に私の母国と日本との間も悪化していた。しかし、緑ケ丘において私は一度も悪口を云われたことはなかった。小樽高商が実業家としての賞讃に価する訓練を学生にしていたことは疑いもない事実である。

例えば「外国貿易実務（Foreign Trade Practice）は、現在成功している卒業生の基礎の一つであったに違いない。

今では古く親しい友であり、戦前においては学生であった人達に会うのは本当に楽しいことである。何人かの人には日本からはるかに離れたところ、ロンドン、シンガポール、バンコックなどであっている。だから、私はABCクラブの大部分の人達といまだにつながりをもっている。

小樽高商での外国語への力の入れようは大変なものであった。戦前には小樽には色々な外国語の先生がいた。ロシヤ帝国の多彩な代表者であったBek-bulat Smunitskyを誰が忘れることができよう。フランス語を教えていた大黒夫人はまだ小樽にいると聞いてとてもうれしい。数百の高商卒業生はMr. McKinnonの人格を思い起すことだろう。

支那語を教えていた初老の紳士で、典型的な支那スタイルのHerr KLerksも思い出すだろう。もちろん英語教育の主だった日本人教師の方々の記憶も私はもっている。

年長の先生方には苫米地校長を筆頭に浜林教授、中村、小林象三の各教授がおられ、学者として一流であり、それぞれ強い個性をもっておられた。こうした先生方は、英語も、英国の習慣もよくご存知で、私の生活を楽しく興味あるものにするお手伝いをしていただいた。若い先生方の玉井、大谷、服部、岩田、喜多の各教授はよき友であり案内役でもあった。

高商、現在の小樽商大の大きな資産は、あの比類まれな海を見下す緑ケ丘であり、伊藤整は「海の見える街」と書いている。その景色は、パリパリする一月の冬の日でも秋の暖い日でも素晴しく美しい。だけど、六月の日暮に森の中で鳴きわめくセミはもう沢山である。だが、その木々はもう取り去られたか、やがて取り除かれることだろう。

緑ケ丘の何もかもが全く美しい。私の食堂には大学の校庭からみた景色の絵がかけられている。二本のポプラと、街と、港と、海の向う留萌の彼方の山々が描かれている。

心から小樽商大の五十年祭おめでとう！　この有名な学校が永遠に続き、常に先生と学生への愛情と忠節とを勝ち得、保ちつづけることを祈るものである。

R・ストーリー

セント・アントニーズ・カレージ
オックスフォード（英国）にて

## 異動（一）

### 栄転

飯島幸雄（昭一一）
旭川鉄道管理局経理部審査課長（北海道支社検簿）

鈴木一雄（昭五）
東京都品川区東五反田三丁目一七—六—二〇三
日本アジア・アフリカ経済研究所（日本連絡所）

金津良三（昭一六）
雪印乳業㈱大阪市乳アイス事業部

小川愛策（昭一三）
王子製紙株式会社春日井工場（本社総務部）
愛知県春日井王子町一

杵渕雄一（昭一八）
国鉄東北支社次長（東北支社青森出張所長）

山崎　均（昭一七）
日本銀行熊本支店
熊本市山崎町一五

佐藤清定（昭四）
日魯漁業株式会社専務取締役（常務取締役）

田上束稲（大一二）
日魯漁業株式会社会長（取締役社長）

藤城敏雄（昭一三）
大幸設備工事株式会社専務取締役

安在七郎（昭五）
日本生命保険相互㈱販売調査部長
常務取締役

横山為祐（昭一二）
興国人絹パルプ大阪支店長（発酵化成品事業部長）

### 住所変更

白勢慶吉（昭一一）
東京都目黒区東山二丁目二二番一〇—二八

飯島幸雄（昭一一）
旭川市宮下通四丁目　国鉄アパート一八—一〇五

牧野栄二（昭一二）
東京都中野区南台四丁目六四—五（表示変更）

今井彦弥（昭二九）
山形県酒田市中町一丁目二—三〇（表示変更）

高山貞一（昭一一）
東京都目黒区目黒五丁目二二—一六　三井銀行下目黒共同住宅

本間正一（昭八）
小樽市花園四丁目二三—三（表示変更）

菅　孝夫（昭八）
小樽市松ケ枝一丁目三一—二（表示変更）

金栄酉吉（大七）
小樽市相生町二番十七号（表示変更）

林崎二郎（昭一一）
藤沢市辻堂東海岸二丁目十二番三六号

池内　寛（昭三三）
札幌市琴似町北八軒町五二六

栗原　強（昭一四）
東京都港区赤坂四丁目十三—八赤坂パレスマンション三〇九号

高木重信（昭一一）
千葉県船橋市習志野台三丁目三番地十の四〇四

松本信男（昭一六後）
東京都杉並区上高井戸四丁目一五六一

# G・R・ストーリイ先生と「ゾルゲ追跡」について

大庭定男（昭一七）

G・R・ストーリー先生は昭和十二年より十五年三月まで緑丘に奉職され、私達が入学する直前には緑丘を去られていたのであるが、先輩諸氏より先生の御話をきき、また戦後には著名な日本及び東洋についての学者としての同名をたびたび聞き、一度御会いしたいと思っていた。

ところが幸運にも昭和四十年十二月六日、当社の小田先輩（非鉄金属部長代理、昭和十五年）に紹介され同先輩と共に東京で先生御夫妻に昼食を御馳走になり、いろいろな御話を伺うことが出来たのでこの時のことを中心に緑丘生各位に御報告致したい。

**東南アジア戦線で活躍**

昭和十五年三月、緑丘を去られた先生は召集となり、シンガポールに廻されて、情報将校として日本語を叩きこまれたとのことである。この訓練は相当厳しく大変だったらしいが、これが戦後には学問に非常に役立つことになるのである。

大東亜戦争が始まり、日本軍のマレー進撃、ついでシンガポール攻略の時には最後まで踏止まり、陥落直前にスマトラに逃がれ、船が沈められたが武運が強く無事であった。

その後カイロ勤務を経てニューデリーに来、対日本軍宣伝用のビラを作っているのを見たりした。

ついでビルマのチン高原で日本の三十三師団（師団長柳田元三中将）第十五師団（師団長山内正文中将）を対象にした情報活動に当ったが、日本軍の宣伝情報活動は自己の兵力を過大に宣伝する戦法を殆んどとらなかったのが意外であった。

**悲劇のインパール作戦**

先生によればインパールは山にかこまれた非常に美しい盆地であり、ここが日英両軍の死斗の場となったことは大きな悲劇であった。

ここで敗れた日本軍の退却は悲惨そのものであり、或る日、先生が点検した日本軍の戦死者の日誌の中に且ての緑丘の教え子（京都出身の中尉）の日誌があり、驚かれたとの話を別の機会に小田先輩はきいている。

インパールの悲劇については私も復員船熊野丸の甲板上で昭和十五年の先輩からきいた記憶がある。栄養不良とマラリヤから疲れはてた退却軍、坂をとぼとぼ上って行くと石につまづいてころぶが起き上る力がない。これを助けようとすれば自分も起上る力がない。止むなく心を鬼にして置去りにして行く。文字通りの「ビルマの立琴」に画かれた地獄図であったという。

**戦後の英国とオランダの暗斗**

戦中、戦後にジャワに勤務し、英軍に武装解除をうけた私には戦後の英国とオランダのインドネシヤの将来をめぐっての暗斗がヒシヒシと感じられたが、この点についての先生の話はまた興味深々たるものがあった。

終戦時、連合軍東南アジア最高司令官マウントバッテン元帥は、インドネシヤに対するオランダの主権を軽視する一方、インドネシヤの独立運動に同情的であったのが英蘭両国のシコリとなり、その後スカルノ時代のマレーシヤ対決政策で英国大使館の焼打ち、国交断絶というような事態になった時、オランダは英国に代りインドネシヤとのよりを戻すため微笑を送っていたのは英国に対するツラ当てといえるとの先生の見方であった。

同時に、オランダ人は長期的に物事を考えることが出来ない民族である。英国が印度独立に踏み切った後でもインドネシヤに恋々とし、二回に亘る警察行動などを通じてインドネシヤと完全な戦争状態となるなどその処理を誤ったり、古くは日本に三〇〇年間も唯一の貿易国として入っていたのに日本の実情を殆んど調べていない。

鎖国時代の日本を克明に調べ、記録し、これを西洋に照会したのはシーボルトであり、ケンプファーであり、彼等は東印度会社に勤務していたドイツ人でオランダ人ではないとオランダ及びオランダ人に対する評価は随分辛かった。

**〝ゾルゲ追跡〟について**

私達が先生に会ったのは丁度ロンドンのChatto and Windus社から"The Case of Richard Sorge"が、同じセント・アントニーズ・カレッヂ（オックスフォード大学の国際問題研究施設）のF.W.Deahin学長と共同で出版された直後であったので、この本の取材に当って得られた色々な話をきくことが出来た。

ゾルゲ事件という日本人にとっては忘れることの出来ない事件に先生が関心をいだかれたのは、日本の現代史を研究する上にはどうしても通らなければならない門である上に、同じ時代に日本に生活された先生にとっては、河合秀和氏（前述の本の飜訳を〝ゾルゲ追跡〟と題して筑摩書房より出版）によれば「帝国ホテルや文化アパートはすでに戦前からストーリー氏には馴染みの場所であり、東京の外国人社会、あるいは過度の親切と過度の警戒心とが奇妙な対照を示した当時の日本人の外国人に対する態度など、或る意味ではゾルゲと共通の体験を有している人といってよい」（〝ゾルゲ追跡〟訳者あとがきより）のであり、先生の関心を強くひくものがあったのであろう。

先生はこの本を書くため、ドイツ国内をくまなく廻り、当時のオットー駐日大使にも二回会ったが、ゾルゲがスパイであったとは現在でも信ずることが出来ないとのことであった。

これは〝ゾルゲ追跡〟でも詳細に論じられているが、第一次大戦で三



回も負傷した歴戦の勇士であるゾルゲに誰もが気を許したという盲点があったこと、反対にゾルゲ自身は大戦の悲惨さを体験することにより筋金入りの共産主義者になっていったのである。

先生は更にモスクワまで飛び、ソ連政府の極東担当責任者に会い、ゾルゲについて質問したが、「ゾルゲ事件というのは知らない」の一点ばりで取りつく島もなかった。これはスパイは帝国主義国が使うものであり、社会主義国は使用する必要がないとの公式論からの発言であるが、余りにも非人間的であるとの感じを強く持ったと話されていた。

そのソ連が昭和三十九年、ゾルゲの功績を発表し、その栄与を讃えるということを突然行なったのだからソ連という国は益々不可解な国である。

また、日本でも中ソ対立がゾルゲ事件の評価にも影響を与えて来、昭和四十年秋に行なわれた尾崎秀実の墓前祭に出席された先生が異様に感ぜられたことは、当時、中共と親しくしていた日共主流派は全然出席せず、ソ連寄りの「日本のこえ」一派ばかりが出席していたとのことであった（その後、主流派が中共と絶縁状態になった）

**好評の〝ゾルゲ追跡〟**

日本で飜訳される前から〝ゾルゲ追跡〟は星条旗紙、ウォール・ストリート・ジャーナル紙、サンデー・テレグラフなどの外字紙の書評で、〝公正に、客観的に〟見ていると非常に好評であった。

日本で出版された本年五月、丁度東独の官製の〝ゾルゲ事件〟の飜訳が出て、二つの本が同時に書評の対象となることが多かったが〝ゾルゲ追跡〟の方が常に好評であった。これも深い時代的理解を持たれた先生の観察が公正であったためと思われる。

**現代日本史にそそぐ情熱**

去る十月五日、椿山荘で行なわれたマッキンノン先生歓迎会に二十五年ぶりに岩田一男先生に御目にかかった際、たまたま話がストーリー先生のことに及んだが、岩田先生は「彼はよく勉強していましたよ。

"Contemporary Japan" など全部持って帰った。……二年前にオックスフォードに行き彼を訪ねた時、先生は小説新潮に自分自身のことが書かれているのを持っていたが、誰が書いたのか判らないので、私が書いたと思っている」とのお話だった。

ストーリー先生は既に戦前の日本の超国家主義運動を研究したThe Double Patriots; a Study of Japanese Nationalism, 1957と日本を訪れる多くの英米人旅行者が携えているA History of Modern Japan, 1960の名著を出されているが一貫して追求されているのは現代日本であり、この面では英国で比類ない学者となっておられる。

丁度来日中の昭和四十年十一月二十二日付のロンドン・タイムズの日本特集号に寄稿され、日本は経済的には既に大きな実力をもっているが国際的な発言権が弱い。これをもっと強めたいという国民的欲求不満が見られるという趣旨のことを書かれこれが朝日新聞などに取上げられて読者の反響をかったことがある。

このような突込んだ見方は日本をよく知り、戦後六度も来日している先生にして始めて観察出来ることであろう。

また、毎日新聞社より「日本の戦歴」というグラフが出版されていたが、先生はこれを辞書を引き乍ら一晩中読んだとのことで、悲惨な戦争の場面など多いため、悪夢をみてうなされたと述懐されていた。

その時の先生のお話では、次は大正天皇崩御より終戦までの時代を背景にした青年達を主人公にしたヒューマニスティックな物語を書きたいとのことであった。私は芹沢光次郎氏の「人間の運命」を推薦しておいたが、どのような作品が完成されただろうか。同時代を生きてきた私として非常な共感を覚えるものがある

**日英を結ぶきづな**

ストーリー先生は前述の通りオックスフォード大学附属のセイント・アントニー・カレッヂで教鞭をとられており、数々の日本に関する著書、ロンドン・タイムズなどへの寄稿を通じて日本及び東洋についての紹介に努められており、当社の留学生であった大野晴史君も日本に関する講演会で先生に会っている。また、今年の夏頃のNHKテレビの現地取材番組にも登場したという。

緑丘に籍をおかれた先生方がこのように英国の学界の第一線で活躍され、日英両国を結ぶきづなとなっていることは誠に喜ばしく、先生の御健康を祈って止まないものがある。

（三井物産経済協力課長）

広告マッチと美術印刷・紙工品
株式会社 三優社
京都市下京区寺町通松原下ル
TEL (36) 8171 (代表)
取締役社長 山村太兵衛 (昭12)
是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕

# G・R・ストーリー先生の思い出

亀山（旧姓須藤）英夫（昭一六）

先生については、文行寮前の外人官舎で起居を共にされた金井先輩や植田君はじめ多くの緑丘人が幾多の懐しい思い出を御持ちのことと存じますが、小生今夏大阪へ転勤し、緑丘編集部の隣組になりましたので拙文を書かせて戴く次第です。

私ども昭和十六年（前期）卒業組は十三年四月入学以来約二年間、親しく楽しく先生の教えを受けることが出来ました。当時先生はオックスフォード大学を出られて間もなく来樽されたのですが、英国人特有の固苦しさが無く、時には校庭のあの緑の芝生の上で〝MY BONNY〟の歌等を歌い乍ら貿易実務や英文簿記の授業を受けたりしたものです。

また当時はお若さとゆとりがあったせいか、夜の御活躍も相当だったらしく、深夜に地獄坂を昇るタクシーの轟音が文行寮の窓辺を襲うこともしばしばでした。昭和十五年の秋に久し振りに再開された文行寮の寮祭にドテラ姿の先生がビールを二〜三本大きなお腹に入れて見えられ、同級の長崎君（現在、外務省総領事）山本君（日綿内地繊維本部長）中曽根君（康弘代議士の弟、惜しくも戦死）等と乾杯したことが未だに忘れられません。

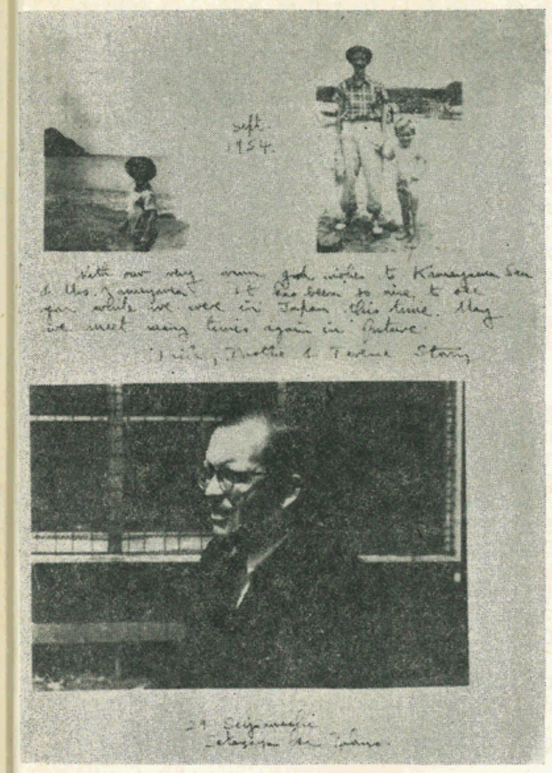
その先生に戦後初めてお目にかかったのは、多分二十四年戦後第一回の緑丘会が丸ビル地下で開かれた時でした。先生は在樽中余り使われなかった難しい日本語を話され、漢字迄書かれるには驚きました。何でも戦時中インドで日本語の特訓を受けられたとのことでした。

先生は戦後日英の復交に東奔西走され、先年日本政府より叙勲の栄に浴したことは、蓋し当然であります。

また御結婚後の先生を成城の御宅に御尋ねしましたが、非常に御質素で御円満な滞日生活を営まれ、昔日のプレイボーイの面影はありませんでした。

今年の六月末、NHKテレビで偶然〝オックスフォード便り〟という番組を見ました処、同大学のセイント・アンソニー・カレッジで〝日米開戦前夜の外交交渉〟について詳しく講義中の先生にお目にかかれたのは望外の喜びでした。

遙かに先生の御健勝と御活躍を御祈りする次第です。




## 四十二年度緑丘申込者氏名

これをもって四十二年度緑丘申込者の発表を打ち切ります。

毎度の事ながら四十三年度はこんなに遅れませぬようどうぞ早目に御手配下さい。

一人の申込者がもう一人の緑丘人をお誘い下さいまして「**お前の分も申し込んでおいたぞ。千円立替えておいたんだから**」といって下さったならいいのになあと思うことが度々あります。

要するに送金は面倒くさいのです。編集部もよくその厄介なことを承知しています。

それは今日すぐ送金手配をするに限ります。どうぞ今後ともよろしくお願いします。

(あ) 新谷健夫
(う) 宇佐美猪一郎
(お) 大沢三男
(か) 河端洋、勝海隆
(く) 久保田敏三
(こ) 小島貞三郎、風敏夫
(た) 高桑一之、高木久新、武内武一、田森誠一郎
(と) 富田博夫
(ひ) 広瀬久一
(ふ) 福原省吾
(み) 三井広見、水江純一
(む) 村井弥三治
(や) 柳沢靖三、山口公平
(よ) 横川義雄



# 美しさと優しさへの開眼
## ＝フィギス先生とマリオネット＝

寺尾八郎（昭九）

木片から作られてとてつもなく鼻が高いピノキオが田河水泡の「のらくろ伍長」の向うを張ってあるいは漫画、あるいは童話に昭和十二、三年頃少年少女の人気を博しているのを知った時の驚きったらなかった。

私はこのピノキオが一般に流布される前に世人にさきがけて、この舶来の人気者が在学時代すでに私におめみえしたのだとの得意さに胸おどらせる自身を見い出した。そしてこの誇りを与えてくれたフィギスさんの上に想いをはせた。しかし彼は日本を去って帰らず、ようとして消息不明である。

私にフィギスさんを連想させた主人公はわが国で二通りの名を持つあやつり人形（マリオネット）である。一つはピノキオ、他はピノチオで彼によって童心をみたされた方も多いであろう。前者は原作からの発音であり、後者は英語からの発音である。昭和六年入学早々私たちはこのマリオネット物語をテキストにフィギスさんから英語を習った。英語なので発音はピノチオとして教わった。

テキストは伊太利原作「ピノキオ」の英語版であったが作品全体を通じて今でも印象深いのは気まぐれないたづら小僧ピノチオに配するにやさしい女神の絶妙なとりあわせであった。ピノチオは漫画好き、童話の主人公である宿命から愚かしい性質ゆえに時折絶体絶命の危険におちいる。彼が危機にひんするとかならず若くて美しく心のやさしい女神が現われて助けてくれるのでピノチオは事なきを得る。私はピノチオの立場から優しく美しい女神を人生の珠玉だと心を打たれ、優美への憧れがしっかと芽生えた。万物から美しいもの、やさしいものを見てとるまなこを開かされたのである。

フィギスさんは作中「フーリッシュ」が出て来た時に「バカな」と先にも後にも始めて日本語を使った。この珍らしい現象に私たちは唖然として五〇近くの視線がフィギスさんに集中した。反響の余りな大きさからであろう。先生は見る見るうちに顔をくれないに染められた。すらりと長身な若い英国紳士の先生はブルーネットの髪で顔は白せきだったので乙女のはじらいに見まごうばかりの紅潮になった。ミスタブラッシュがぴたりとあてはまると私は今でも確信している。一年E組の同級生は当時の情景を思い出すことだろう。

講義物と違って演習づきのこの語学には教授が出欠を取った。外人教師なのでフィギスさんはローマ字で打った名簿を読むのだがミスプリントのせいかどうか原因は分らないが私はミスタトラオと呼ばれた。私は笑いをこらえて返事するのに苦労した。いろは順のリストだったので私の次が亡くなった阿部君なのだが彼は名が虎男なのである。彼が二度呼ばれ、私が一度も呼ばれない格好で偶然の符合がおかしかったのである。

またぞろ女神の話に戻るがフィギスさんに直接関した事ではないとは言え、先生の選んだテキストの影響なのであえて筆を滑らせるなら、図書館で特にやさしくして頂いた訳ではないが紺のガウンを着物の上に羽織った貸出嬢が女神に見えて仕様がなかった。和装を着流してたのか、はかまをはいてたかは分らない。一段と高いカウンターに君臨してたから。

語学全体に共通して言えるのだがフィギスさんの試験は楽しかった。試験前に習った範囲を何回も読めばよく、にが手な暗記が不要だったから。二年の時は著者も書名も忘れたがテキストは洋書の探偵物でなかったろうか。いつかの試験の時に探偵と犯人はどちらが利口かという問題が出た。国語ならぬ外国語で筆答しなければならないので取り組み甲斐がありベルが鳴った時は体がほてって居た。

私が入学後始めての夏休にならないうちにおやめになったデーゲンさんが小樽高商の音楽部が室蘭で公演した時指揮するのを室商の生徒として昭和三年かに劇場で見て外人って音楽的教養が高いんだなあと感心したが、フィギスさんが私の観察を裏書した。私が入学後歌った時講堂でピアノを弾いてくれたのはフィギスさんであった。

小樽を去ってからまっすぐ帰国したかよそへ回ったか知る由もないが、ロマンスグレイの紳士として在国なのであろう。文通したいので住所ご存じの方はご一報願いたい。未だ六十歳位であろう。

# H・メーチン先生　来京の憶い出

高木正夫（昭一五）

「紅顔、小柄、髪の柔い、いかにも英国人らしい青年」これがオックスフォード出身のメーチン先生の印象でした。オックスフォードと云えば世界の名門、その卒業生がどうして極東の国の北端小樽の一教師として赴任したのかと素朴な疑問を持ったものでしたが、教室で気持が昂ってくると頸から顎、頬、額と瞬時に、しかも順々に濃い桃色に変ってゆくのがよくわかりました。歌が好きらしくいくつか教えられクラス全員で合唱させられましたが、現在NHK第二放送のテーマ音楽として放

送しているのもあり、聞くのも楽しいものです。

この先生の二年間、遂に一度も学生に対して日本語の片鱗も洩らさず学生が如何に困っていても何とか切抜けるまで、むづかしい顔をして眺めておられるだけでした。

昭和十三年七月下旬、私宛に先生から一葉のはがきが参りました。八月に京都へ行くからよろしくとの文意で、さあ大変な事になったと思いましたが断わるすべもなく、コンサイスをポケットに、「京都駅から無事着いたかな」と心配しながらホテルに出掛けました。

以後二日間、辞書を手から離さずまだるっこいガイドをつとめました。金閣寺の庭園がよくわからない。英国なら芝を植えると云う語や、御所外苑の美しさなど場所、場所で感想を伺いましたが、最も興味をもたれたのは八坂道を上りながら見る清水の塔の姿のようでした。一番困ったのは、祇園で舞子を呼びたいと希望された時で、私自身足を入れた事もなく、何とか諦らめさせようと苦心の末、費用が大変だと返答した処、いかほどかかるかと反問され、え、ままよと一晩二百円位と口から出た途端、おーっと目をまるくして取止めになりました。一カ月の下宿代二十二円位でしたから先生も驚ろかれたでしょう。実際は当時いくら位でしたろうか。

三日目、父がすき焼に招待しました。予め日本語は全然駄目、日本食もすき焼位ならと云ってありましたので心配していた処、気持よく受けて頂いたばかりか席に坐ると実に流暢な日本語で父と挨拶を交されたのには今度はこちらが目をまるくしました。これなら日本中一人で旅行しても安心なものだと、僅か一年半に日本語をマスターされた事に感嘆しました。同時に床柱を背にキチッと坐り、すき焼、天ぷらは勿論、すし、刺身から漬物でお茶漬までおいしく食べると話されている先生の姿に、海外に雄飛した大英帝国人の心掛けを見た感を深くしました。もっとも日本に赴任されるまでに日本語の素養があったのかも知れませんが離京された翌朝は昼まで寝ていました。

九月に入って職員室に呼ばれペンギンブックを一冊頂戴しました。英国の子供用の冒険物語で仲々面白くて大切にしていましたが、戦時中に紛失して残念に思っています。

帰国されてやがて戦争となりましたが、現在はどうしておられる事でしょうか。

## 昭和43年度「緑丘」申込みは早目に！

〝緑丘〟四十三年度の申込みを開始します。

何時も申込まれるのが遅いため、編集部の印刷部数決定にはホトホト泣かされます。

途中（例えば三号位まで発行して）から申込送金してくる方がありますが、すでにバックナンバーが品切れとなり全く困ります。

途中で申込み時から一年というのはこの緑丘では出来ないのです。

年六回発行　壱千円

### 万人等しく仰ぐ緑ケ丘

過般小樽商大卒業生有志が旧師米人ダニエル・ブルック・マッキンノン夫妻を各自のポケットマネーを出し合って米国から呼び、八十二日間にわたり日本国内を案内し謝恩の意を示した事は、我が国はもとより世界の学界に於ても類稀なる美挙ではなかったかと思う。しかも日本婦人と結婚し、二十七年も日本人を教えて来た人を、ただ敵国人だからとの理由で嫌応なく追い帰された人を慰むべく、勲三等に叙し瑞宝章を贈与される様に取計った緑丘諸子の配慮は実に近来稀に見る美挙であったと云ってよい。

小樽商大は過去に於て軍事教練反対の運動を起した事がある。またプロレタリヤ文学者小林多喜二を生んだ。これらの事柄は人によって善しと云い、悪しとする人もあろう。しかし今度のマ氏夫妻を招聘し、謝恩の誠を致した事は何人と雖も礼讃せざるを得ないところである。

茲に緑丘学人の一人として、あらためて緑丘諸賢に心から敬意と感謝の念を新たにする次第である。本当に私はよい学校に入学してよかった。一生の仕合わせだと思う。

（大一二　菅野祐治）

### 早々と〝緑丘〟

### 昭和四十三年度申込み

四十二年度会費は三月号で終ります。

(あ) 新井章一
(い) 井本二郎、稲田憲
(う) 内崎隆雄、上埜敏夫
(え) 遠藤周寿
(お) 岡田春夫、小貫武
(か) 加地幸一、加藤信吉
(き) 木村頼雄、木内喜右衛門
(こ) 小林憲、越崎宗一、越崎清二、向当賢一
(さ) 佐藤一郎（小樽市）
(す) 角栄、雀部季吉
(た) 堂城不二人、竹屋政雄
(な) 中村平之助、中瀬秀一
(ひ) 樋山三郎
(ふ) 福吉俊夫
(ま) 松橋忠光
(み) 三輪栄作、三浦栄
(も) 森川正明、森下弘
(よ) 四谷宗義、吉田荘太郎
(わ) 渡辺一夫、若林幹一



# 読者の声

## 母校旧本館の一部存置について

前号に戸谷太通三氏の「小樽商大旧本館正面建造物移設存置運動について」が掲載されたが全面的に大賛成である。

建築後既に六十年を閲（けみ）するも土台廻りに些かの狂いもなく正面玄関の三階建てなど堂々たる木造洋風建築物で格調が高い。設計は文部省とのことであるが、あれだけの仕事をした建築請負業者の名は「緑丘五十年史」にも明らかにされていない。筆者は札幌伊藤組でないかとの事を耳にしたので三年ばかり前に伊藤組を訪れて尋ねたが、当時の書類図面など残っていないとのことだった。ただ係の人が念のためにと古い写真を調べてくれたら小樽高商の雨天体操場の写真が出てきたが玄関の写真は見出せなかった。この写真を貰ってきたので商大へ寄贈した。正面玄関を解体する時に天井裏に棟札があると思うが建築業者の名を解く鍵はこれしかないようである。

玄関を入ってラセン階段の様式は旧長崎高商や一高にあったものと同様でそれらが戦災などで消滅してしまった今日貴重な存在である。同窓伊藤整君は自伝小説「若い詩人の肖像」の冒頭で「校舎の主屋の中央は三階の塔になっていた、その真下の玄関を入った所のホールには平行した二本の階段があってそれを登ると更に二階から三階の塔に登るラセン形の鉄製階段が半ば装飾の役をしてハリガネ細工のようにとりつけてあった……」と書いている。

現在商大新校舎の一部及び図書館は完成し漸次旧校舎は取毀わされてゆくが、正面玄関を主軸とした中心部並びに屋上のマーキュリーは本校創立を語るシンボルであり、また貴重な文化財でもあるので是非構内に移築、残すべきである。

費用も大したことではないので広く同窓に呼かけ浄財を仰ぎ存置実現の運動を起してほしい。実現後は一部に学校史料を展示し、一部は緑丘会事務室や会合室に当ててほしい。

（大一一　越崎宗一）

## 小林多喜二特集号について

小生大学に出講しておりまして、近代文学の研究執筆をいたしております。昭和二十三年九月五日京都の大雅堂から「小林多喜二作品集」を出版しました。これは従来の全集に収録されず直ちに発禁になり世の人々に知られていない資料ばかりであります。

さて過日同志社大学の教授室で小樽商大同窓会誌〝緑丘〟多喜二特集を見せていただき、是非一部いただきたく、代金・送料をご教示願います。

西宮市松籟荘一五三　川並秀雄

## 「多喜二忌」

小林多喜二の命日が「多喜二忌」として北海道の俳句の季題の中に入っているのを知り、珍らしく思い、抜き書きしてみました。

（昭一三　戸谷太通三）

佐々木丁冬編「えぞ歳時記」より

### 【多喜二忌】（晩冬）

小林多喜二が殺されたのは昭和八年二月二十日であるが、それを私どもが知ったのは五―六年後だった。その時の私の感慨は、多喜二は方向を誤った、作家としてできるだけ長生きしてもらいたかった、というようなものだったと記憶する。北海道俳句の中に登場する歴史的人物の名では石川啄木とともに多喜二が圧倒的に多い。

果しなき寒き浪はも多喜二の忌　札幌　天野宗軒
多喜二忌の海茫々と雪降れり　石原ひろみ
多喜二祭ひとひらの雪唇に受く　岩内　横山木鶏
多喜二の忌旅に在りしもここも基地　琴似　菅原虚洞子
多喜二忌や帽裏ひしと己れの匂い　釧路　久保洋青
裁き切れぬ窓の曇りや多喜二の忌　豊浦　中谷真風
ちびしクレヨン箱に犇き多喜二の忌　茂尻　三浦徹三
売りあとの屑魚貰うて多喜二の忌　室蘭　三田朧波
白日に月浮かびたる多喜二の忌　浦臼　吉田つよし
天涯の荒星恍と多喜二の忌　沙留　後藤北陽

# 「緑丘外史」提案

中野清一（大一五）

（一）

広島に住んでいた頃、中国地区の同窓と親しく往来する機会が多かった。広島でも岡山でも緑丘の思い出話が弾むと、必ず「緑丘こぼれ話」とでも名づけるべき一冊の本を誰かがまとめてくれたら、という話になった。

京都に移ってから初めて上京した折にも、昭和十四年卒の後輩たちと和やかに雑談している中にやはり「早稲田外史」の向うを張るほどの「緑丘外史」が編纂されてよい、という一致した意見が出た。

私の狭い見聞の範囲でさえそうなのだから、随分とあちこちでの同窓交歓の席上で「緑丘外史」への声があがったことと想像する。

（二）

母校の教官だった頃、行幸記念誌を手伝う機会があった。手塚先生が編輯の中心だったが、天皇の行幸には直接関係のなさそうな記録も一応念のために集めていく中に、行幸記念誌が終ったら編集から外されたものを適当に単行本にでもまとめたら興味深いものが生れるだろうと考え込んだものである。

広島で大がかりな「新修広島市史」編纂の仕事を手伝った、というより手伝わされたことがあった。A5版で各巻六百頁内外のものを、総説篇、政治史篇、文化史篇、社会経済史篇など七巻に仕上げるというのだから大変な仕事だった。私の広島生活十六年の半ば近くは、私の学問に直結してはいないこの仕事に時間もエネルギーも吸いとられて終った苦い思い出がある。広島の犠牲においてこそ現在の日本人の生命は救われたという自覚が私にはあったから専門外の市史の一部（各巻を通じて終戦前後を記録するのが私に割り当てられた仕事だった）をまとめる苦労も厭いはしなかったが、一年たち二年たつ中に思いがけず苦労を慰めてくれる事情が登場してきた。各界の人たちに会って思い出話を聞きとり書きしていく中に大小無数の「こぼれ話」が次々に出てきた。市史が漸く完成してお互いの苦労を回顧する座談会が一回では終らず何回か続行されるにつれ、回顧談の記録を中心に「広島市史外史」か「市史余録」を編むべきだという声が高潮した。

（三）

「正史」に対して「稗史」という言葉がある。古い中国のならわしで「稗官」という名の特別なお役人が町や巷の噂さ話を聞き集めては君主に言上したのに始まるという。ことのいわれからしても「稗史」の方が案外に活き活きとした真実の歴史である場合が多い。誰かが編集した「川柳日本俗説史」の方が市販の日本歴史の類書などよりはるかに実相を伝えているのはその一例だし、また三浦周行博士の精密な日本法制史の正史的な業績は「こぼれ話集」と読み合せた時に始めて深い含蓄が味われてくるのもこの例にもれない。一橋大学長の増田四郎さんの欧羅巴都市論についての専門的な研究も「東と西」以後の随筆と綜合して読むべきものだろう。

緑丘には立派な緑丘五十年史がある。同時に、その立派さを浮彫にするためにも「緑丘外史」が編まれるべきだと思う。それはやがてまた正史として六十年史、七十年史を先々になって企画する時大変に役立つことにもなる。

（四）

「緑丘外史」を提唱する今一つの理由がある。編集の仕方如何では、独り「小樽高商外史」になるばかりでなく、広く一般の、日本における旧制高等商業学校史そのものにもなりうるし、もしそうなりうるなら、緑丘同窓生のみのための書物である以外に、そしてまたそれ以上に、緑丘関係以外の、一般の人たちにも興味を以て迎えられることになるだろう。あくまでも「こぼれ話」「舞台裏で語りつがれてきた話」などの類の収集に重点をおいてかかるなら、例えば小樽高商から横浜高商、高松高商、名古屋高商への恩師がたの転任に伴っての、高商教育史の拡がりを追跡、記録しておくことができるし、同窓人の足跡を稗史風に辿っておけば、高浜年尾さん、小林多喜二さん、伊藤整さんなど巨星を中心にしての文壇側面史が浮び上ってくるに違いない。佐々木理事長さんや古関周三さん、そして進藤孝二さんなど大実業マンの隠れたエピソード、例えば進藤さんのスエズ乗入れや、最近のモスクワ談判の奮斗談を採録していけば日本実業史の生々躍動する一面が後世に伝え残されることにもなろう。

戦争に絡まっての様々な話も集められるなら、現に企画進行中の戦歿者慰霊碑、或いは平和記念碑と相まって画龍点睛の役割が期待される。勿論、戦後の若い世代の同窓たちにも採録してほしい数多くのエピソードがある筈である。

（五）

「緑丘外史」と無雑作に言うものの、その企画・実行が容易ならぬものであることは私にも凡その想像がつく。費用も相当なものだろうし、かなりの時日を要しそうである。しかしやってやれぬことはないと信ずる。緑丘会が打って一丸となって欲しい。小樽本部も東京支部も大阪支部も、その他の支部の要となって作動する形をとり、編集の経歴から見て蓋目君中心に、小樽の中島大先輩、東京の神田兄が快く協力という態勢に、歴代の「緑丘新聞」編輯スタッフまたチームワークを組むところまで行けば自ら道は通ずるに違いない。

折から明治百年の年である。この一年に完成を見ずとも、記念すべきこの年にこそ凡その骨組だけでも構築してほしいと願ってやまない。

（立命館大学教授・広島大学名誉教授）



伊藤整氏

# マッキンノンさんを語る

## ―国際文化会館記念講演会―

「〝日本から見たアメリカ〟とゆう題で、わたしのアメリカ人像をお話しする訳ですが、わたしは、わたしの身近かなアメリカ人、じつは英語の先生のひとり、ダニエル・ブルック・マッキンノンとゆう人のお話しをしようと思います。わたしは、数え年の十八才のときから満二十才の春までの青春の三年を、北海道の小樽とゆう港街で英語を教わりました……。」

昨年十二月二十日夜、東京・麻布鳥居坂の国際文化会館で、その創立十五周年を記念する特別講演会で、詩人・作家・ほんやく家・評論家・教授、そして近代文学館理事長―（司会者国際文化会館理事長・松本重治氏、の講師紹介のことば）―伊藤整氏は、こう語りはじめた。

「緑丘」紙第五十八号マッキンノン先生特集号を片手にYour Highness Princess Chichibuを主賓に、二五〇人にあまる内外人の聴衆、東京のえりすぐった智識人たちを前にしてその各ページ、写真、あの記事この記事を読みあげながら、約三十分にわたって、ひとりのアメリカ人教師を描きながら、そしてときに、この教師を、三年がかりで招き迎えた緑丘人のささやかな、しかし全国的な動きに説きおよびながら、ひとりの人間を愛し知ることは、その国民を愛し知ること―ときには、共感と、そして時には、違和感を味うことであると、結んだ。

「伊藤さんは、ひとりのアメリカ人、われわれに親しい、ワシントン大学教授、ディック（リチャード）・マッキンノンのDaddyをとおして、アメリカ人の姿を描かれ、加藤周一教授（ブリティッシュ・コロンビヤ大学）はJAPANESE IMAGE OF AMERICAの題で、アメリカの社会のパタンを、広範な視野でとらえられた。そして、コロンビヤ大学教授ヒュー・ボートン博士（DR. Hugh Borton）は、ペリー提督来航以来百年あまりの日米関係を、POLITICAL SCIENCEの立場から論じてAMERICAN IMAGE OF JAPANを語られた。国際的な文化交流と知的協力のために、日夜活動をつづけて十五年をむかえた当会館は、このように秀れた、それぞれの興味ある講演をしてくださった講師諸先生に、聴衆各位とともに、心からお礼を申したい。」松本重治氏が、こう結んで会を閉ぢられたとき、聴衆のなかの一人、緑丘子は、良い教師、良き学者、良き学生の、たがいに励ましあった、いや、現に励ましあっているこの学園生活を、昔に今に想いうかべて、冷えた師走のひと夜を、たのもしいものとも、ありがたいものとも思った。

skin dew

朝と　お休み前に
5分間だけさいてください
スキン・デューに含まれた
天然の成分コラゲンが
あなたのお肌に
栄養としめり気を与え
1日中うるおいを
たもちます

Paris・London・New York
Helena Rubinstein
ヘレナ・ルビンスタイン
取締役社長　加地 幸一（大12）

# 申年におもう

## お猿天国

宮地邦介

小豆島の名所の一つに銚子渓というところがある。そこには四二〇匹ともいわれるお猿の大群が自然の姿で放ち飼いされていて、しかも至極人馴れしている。その生態はまさにお猿天国である。樹上に鎮座して、いとし子に乳房をふくませている母猿の姿は悟りすました子育観音の図よろしく、それにひきかえ、頭でっかちで身体のあちこちに禿げがあり、腫物（できもの）ができている子猿を背に負うて、旅人から大豆の奉謝を受けている母猿もいる。まさにそこらあたりのスラム街を連想され、やはり天国にも貧富の懸隔はあるものかと考えさせられた。かと見ればこちらの石の上にはボス猿ともおぼしき大猿が帝王然とかまえて微動だもせず、唯目玉だけパチクリさせて、何事も満ち足りたような赫顔をしてござる。

さては女房を腹這いに抱いて蚤を取っている（一説には身体から吹き出る塩のかたまりを取て食っているとも言われる）愛情こまやかな男猿、縄等もてあそんで悪戯に余念なき子猿、喧嘩の絶え間なき中年猿等々、もし人間よりも一段優れた者から見た人間社会も、こんな姿かも知れないと思う。

だた一つお猿に共通していることは、人から貰った餌は、如何にいとしの女房、子供にも分け与えず自分だけで食ってしまう図である。

ここらを見たら鶏にも劣る奴等と憎くたらしくなった。また傍らに柵を囲らして二、三十頭の鹿を飼ってあった。ここの鹿は角切りをせぬとかで頭に美事な角を頂いている。その柵内にお猿さん達が三々五々と遊びに来ている。遊び疲れたらまた仲間のところに自由に帰って行くだろうが、柵外に出られぬ鹿に心あらばと一寸同情したくなった。お猿さん達と別れて帰る途すがら旅のつれづれに猿という字を使った字句を考えて見た。

犬猿の間柄、猿蟹合戦、猿真似、猿智慧、猿面冠者、猿芝居、猿股、猿ぐつわ、さては歌に芝居に名も高い親猿、少しかしこまっては三猿の訓（見ざる、言わざる、聞かざる）等々如何でしょう。（大一一）

## 〈穴・原稿について〉

穴原稿は年輩者の投稿で満員の盛況です。早く投稿された方が待っているような訳です。

もう一つの穴は終戦後の卒業生のために設けた穴で、この方は幸い第一号に三十四年卒の角君が投稿下さいました。次号はまだあいておりますので早目に名乗りをあげてご投稿下さい。

原稿用紙四〇〇字詰一枚では多すぎますので二、三行はずして書いて下さい。

### 〈戦後卒業生の穴〉

## 大穴を逃がした男

見合をしたのは、女房が初めてと云うことになっているので、この記事は自ら堀る墓穴と云うことになる。昭和某年、丘と海と雪の美しい街で私はさるご大家の一人娘と見合をさせられた。彼女は小柄で、その夜の雪のように清楚な人だった。

宴なかば頃より、お嬢さんが私の顔をみては愛らしい微笑をおくってくれるようになった。可愛いエクボ！丘の上の公園で、街の灯をみながら私は理由をたづねてみた。

「靴下に大きな穴があいてますワ」

ゲッ!!だがユーモラスにゆこう。

「靴下の穴はあなたがつくろってください。ボクはあなたの……」

余計なことは言わなかった筈なのに、H！と云う理由で、私はさるご大家の若旦那と云う大穴をのがしてしまったことでした。

（三十四年卒　角）



## 別府来遊を勧める

—高崎山のお猿と最中—

菅野祐治

別府杉乃井ホテルでの記念撮影の写真が届けられた。マア何とかっこの好い事か。とび切りの別嬪さんを左右に待らし、四年前の教え子達に取り巻かれて私は喜色満面、鼻の下三千丈、楽しみによって長し、しかしこれには裏話がある。

古い金沢商業の卒業生達、加賀の温泉郷で同窓会を開き、昔お世話になった先生方を招待したいのであるが殆んど皆死んでしまわれたか、または病の床に就かれて出席がない。ところがここ博多に生きの好いのがまだ一人残っている。旅費を上げるから出て来なさいと云っても仲々出て来ない。よし一つこちらから別府まで出掛けよう。はるばる東京金沢から皆が出掛けるのに博多に居て出席しない事はなかろう。

殊に別府第一の旅館杉乃井で開くと云えば必ず出て出る。それに限ると衆議一決、この挙に及んだのだとの打明け話。且つ今ではやまなみハイウエイで天草までつっ走る事が出来、雲仙長崎の観光を了え、福岡東中洲の情緒を満喫の上、ムーンライトで月明の空を東に飛べば翌朝当り前に会社に出られるという。正にその通り。明治は遠くなった代りに九州は近くなった。そして温泉は何と云っても泉都別府、別府は杉の井、位置と云い設備と云いホステスと云い、正に日本一である。小樽商大の同窓会だから九州で開く事罷りならぬと云う法律はない。

もなかで思い出した。別府のPRを一つ。高崎山の野猿を題材に「只今零匹」と云う小説がある。一匹もない事を九州人は「一匹もなか」と云う。抜け目のない別府の商人早速一口最中の代りに「一匹最中」を別府土産として売出した。仲々評判も好い様です。お子供さんにお一つ如何と駅の売店の奇麗な女店員さんから勧められた。丁度今年は猿の年、是非別府へと私もお勧めする次第である。（大一二）

## 穴（三）

室谷賢治郎

札幌と小樽とを結ぶ国道のほぼ中間に当るところに春香という地名が与えられています。学生時代にスキーを楽しんだ緑丘人ならば春香山へ遠出した記憶をおもちでしょう。

銭函に程近い丘陵地帯にホテル長谷川ガーデンがあってよく緑丘人が会合を開きます。さて肝腎の穴はこのホテルではなくて、ホテルの筋向いの丘に立っている「トラブラーハウス」という片仮名書きの看板なのです。トラブラーハウス＝troubler houseでは厄介至極なものになり、警官の張り込みを必要としましょう。「トラベラーハウス」＝traveller houseだったなら、誰でも気軽に立寄って一服でも一睡でも出来ましょう。半可通の外国語を誇示される程嫌なことはありません。素朴に「憩いの家」と看板に書いて出した方が、どれ程気持がいいか知れません。「トラブラーハウス」を巧みにまぜ返す人が言いました。「あれは争論や喧嘩した人間たちが仲直りに一杯飲むところだよ。」

## お禿げ

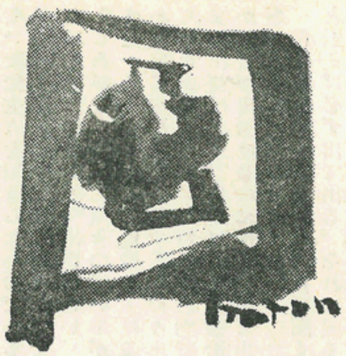
### 百人一首秀歌撰

選者　筑紫太夫

禿げ競ふ同窓生のせいならで
　はげ行く者は我が身なりけり
見せばやな名島の浜の人だにも
　禿げにぞ禿げしつやは変らじ
うかりける人も博多の山笠も
　はげて仕舞えと祈らぬものを
諸ともに哀れと思え枯れすすき
　主より外に知る人ぞなし
禿げるてふ我が名は高く立ちにけり
　人知れずこそ光り初めしが
忍ぶれどつやに出にけり我がこうべ
　これはこれはと人の云ふまで
妻見れば千々に物こそ悲しけれ
　我が身一人が禿げて仕舞って
君がため春の野に出でて若菜摘む
　我が禿山に湯気は立ちつつ
天つ風くもの通ひ路吹きとぢよ
　乙女の断髪一寸お待ちな
足曳の山鳥の尾のしだり尾の
　長々し髪少し頂戴
相見ての後の心に較ぶれば
　昔は禿を意識せざりし
禿の色は移りにけりないたずらに
　わたしが一寸浮気せし間に
吹くからに我が禿山も曇りなす
　むべシャンプは要らじと云うなり

# 毎日新聞連載
# 貸倒れ、年末調整、ゴルフクラブ入会金などその処理に対する税知識

北條恒一
（昭一五　税政評論家）



## 貸倒れ処理を慎重に

史上最高の消費ブームといわれている半面、中小企業の倒産は毎月記録を更新している。自分の会社はさておき、取引先の会社にそのような事態が発生することがある。そのために貸倒引当金の設定が認められており、また発生したときに貸倒損失の計上、または債権償却特別勘定の設定が認められている。貸倒引当金の設定は青色申告を認められている会社にしか許されないが、貸倒損失や債権償却特別勘定の計上は青色申告をしないものでも認められる。

取引先に対する債権を免除したとき、取引先が破産したり解散したときや債務超過の状態が相当期間継続し再起の見込みがないようなときなどには、債権の全額を貸倒損失として落とすことができるのであるが、会社は貸倒損失として計上しても税務調査に当たってこれを否認されることがある。その結果、債権者である会社は債権が回収不能であるにもかかわらず、その債権額に相当する税金を負担しなければならないという矛盾が起こる。

その原因を考えてみると、第一に回収のための努力に欠陥がある。どうしてもとってやろうとする努力の事績を立証できない。そのために極端な場合、税務当局からなれあいではないかと思われたりする。関係のある一切の書類、たとえば債権者会議の議事録や相手方の詳細な財産目録などを必ず備えておく必要がある。第二に最近の税務調査の能力が向上してきたことである。仮りにある債務者に内容証明で債権を放棄した旨を通知し、こちらは貸倒損失に計上したとしよう。この手続きによって貸倒損失に計上できることにはなっているが、税務当局はその真実性をとことんまで追究するのである。どのような方法によるかというと、債務者である会社の現状と経理内容をあらゆる方法で調査するわけで、その権限が税務当局にある。また、債務者をめぐる他の債権者が、その債権をどのように会計処理しているかまで調べる。多少でも債務者に息がかよっており、他の債権者はまだ貸倒損失として計上していないようなときには、貸倒損失の計上を否認される。その分について税金を追加しなければならないと同時に過小申告加算税をとられ延滞税もとられることになる。

債権償却特別勘定を設定できる条件の一つに、取引先が銀行取引を停止された場合ということがあるが中小企業者はいい加減にしている。取引停止になったという事実を銀行によって証明してもらっておく必要がある。

（一二月一六日）

## ご注意！年末調整

年の瀬が迫ると会社は決算期でなくても忙しくなる。最後の給与を支払うときに年末調整をしなければならないからである。この年末調整は会社から給与をもらっている人すべてにとっての決算なのである。毎月差引かれる源泉所得税は概算なので、一年分まとめてこれを精算することになる。たとえば大学を出て四月に入社し、一月から三月まで所得のない人は源泉所得税を払いすぎているかもしれないので、その払いすぎ分を返してもらうとか、生命保険料を払っている人はその分を差引いて計算してもらうとか、こまかい事務が重なる。条件が個人ごとにちがうので、この仕事は忙しい。忙しいといっても会社をささえている人たちに直接影響するので、注意深くやらなければならない。

四十二年分については、従来は税額から控除されたもののうち、所得からずばり控除することとなったものもいくつかある。障害者控除、老年者控除といった、たぐいのものである。老年者控除は本人しか受けられないが、障害者控除は本人ばかりでなく配偶者や扶養親族が障害者である場合も、受けられることを忘れてはならない。

そこで会社が往々にしてまちがった処理をする事項をこの際拾ってみよう。問題は賞与にある。年末賞与を社内預金にするよう従業員に勧奨し社内預金にした分は、現金で支給されていないので、本年中に支払った給与ではないように錯覚することがあるが、これはまちがいで、年内に支払われたものである。年末賞与の金額がきまらないようなときに、従業員に一時的な貸付金を支出し、来年になって賞与の額が確定したときにこれと相殺して精算するようなこともあるが、貸付金の実態が賞与であるならば、年末調整の対象とする必要もある。

会社が売上げ等の収益の入金を脱漏していたりして、その資金がなんらかの形で会社に受入れられる場合はよいが、なにに使われたのかわからないようなときや、渡切り交際費などで使途が不明のとき、税務調査の結果、賞与と認定されることが多い。本年中に支払いが確定したこの認定賞与の金額も、普通の給与に加算して年末調整をしなければならない。社長の報酬が一年間で二四〇万円、売上げ脱漏による行方不明の一二〇万円を社長の賞与と認定されれば、これを加算して社長の給与所得を三六〇万円として年末調整するのである。また本年中に給与等の収入が五〇〇万円を越える人は、年末調整によらず、普通の確定申告を来年することになった。（一二月二日）



## ゴルフクラブの入会金

ゴルフを利用した交際が盛んで、税務当局もこの実態に注目している。ゴルフクラブの入会金やいろいろな経費は、現在どのように税務上取扱われているのだろうか。

会社が法人会員として入会金を払ったときは、この金額を資産に計上しなければならない。しかもその償却は認めないことになっている。実際にゴルフをやるのは法人ではなく法人の役員か社員である人間である。このあたりから問題が出てくる。法人が会員となったのは全く名目的なものであって、役員や社員の個人的な利用が主目的であるというときは、入会金は役員などに対する賞与と認定される。ところがどの程度の利用から会社用であるか、また個人用であるかの物さしがあるわけではない。会社の接待のために役員が取引先の人と利用する度合と、単に役員だけで利用する度合とを勘案して、社用なのか個人用なのかを判定するより仕方あるまい。

会社名で入会できないときに、役員または社員の個人名義で入会金を払っていることがある。この場合はその実質をみきわめて、法人の資産とするか、役員に対する賞与とするかどちらかであるが、実質がはっきりしないで役員が負担しなければならないものかどうか明らかでない場合は、会社の経理を認めることになる。それにしても入会金は資産に計上して償却できないままにしておくか、賞与として社外流出したことに処理するかということになる。純然たる従業員である社員に対する賞与は損金性があるが、役員に対する賞与は損金にならないことに注目しなければならない。役員賞与は法人税をかけられる。しかも通達では、はっきり「賞与とする」と明示しているのである。

役員の名義で入会し、その入会金を会社の資産に計上しているときに、その役員が退職し、クラブの会員権はそのまま退職した役員がもらってしまったというようなことがある。そういうときは入会金という資産が減少し、その入会金の金額が役員に対して退職金として支給されたこととなる。

入会金だけではゴルフはできない。会費とか入場料などゴルフをするための費用がいろいろかかる。これらの費用は会社の事業に関係のあるものであれば交際費として会計処理する。入会金を役員に対する賞与とした場合であって、事業に関係なく役員の個人用に使ったことが明らかなときにその費用を会社が負担していれば、これまた賞与となる。

（一〇月二一日）

## 納税者は発言しよう

「納税者の声を聞く旬間」が全国で始まっている。いろいろな機会や場所をとらえて、納税者のなまの声を聞き、それを政府の政策に反映させようというのである。声を出すことは、納税者の権利なのだから、この権利をこういう機会に思い切って活用してもらいたい。

最近の税務相談所（国税庁、国税局に設置）の利用状況の統計をみると「苦情」を申立てた事項の分類では「職員の態度」について苦情を言った件数が全体の一％強を占めている。このことはなにを意味しているのか。なかには税務署の権力をカサにきた威圧的な態度、あるいはいやがらせ的な言動、国家公務員らしからぬ応接の態度などいろいろあろう。私はこの一％という数字はまだまだ少なすぎるのではないかと思う。目に見えない権力の前におじけづいて、遠慮している国民が相当いるのではないだろうか。別段この旬間にかぎらず、こういう種類の苦情は大いにぶつけるべきである。民主的な政治の発展はそういうところにこそある。同時に、納税者は王様であることを忘れてはならない。

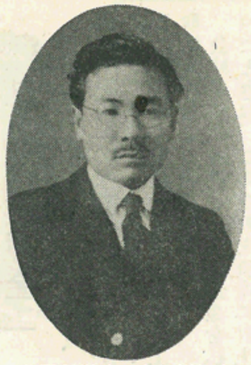
八十数万の法人は、法人税を納めてもらうお得意さんである。この法人に頭の痛いことは税務調査である。この調査の場に臨んだ職員の態度を観察していると、いろいろなスタイルに分類される。悪いことをしているだろうという先入観をありありとあらわし、強圧的に調査しようとするもの。たとえば前期に比べて利益率が低かったとき、その原因がどこにあるのか、紳士的に会社とともに探究しようとするものなどは両極端である。税務行政の執行面には指導行政的な面が加味されている今日、もちろん後者の方が適切であり、後日の紛議も少ない。後日の紛議が少なければ行政上のエネルギーの消費も少なくてすむ。税務職員の態度については、納税者の神経はまことに過敏になっていることを、税務当局の上層部はハダに感じてほしいものである。

納税者はこの旬間を機会に、大きな声を出せる場所があることをあらためて認識し、職員の態度などに常日ごろ注目していれば、いくらかでも民主的な税務行政に進化するであろう。また、税務当局は心を平らにし、常に王様である納税者の声を聞くべきである。ただ、その声を出した納税者をあとでとっちめてやろうというようなケチな考えは絶対にやめてほしい。

（一一月四日）

# 糸魚川先生の死を悼む

西野嘉一郎（大一五）



英国留学時の糸魚川先生

十一月十日午前十時半、先生は長野県松本市の病院で心筋硬塞のため急死なされた。この報は東京の各新聞に報道され、また本誌前号に大野先生が書かれた「糸魚川先生と私」という追悼文で緑丘の方にも既にご承知のことと思う。大野先生のこの追悼文の中に私の名前が出ていたことから、私も先生のご遺徳を偲びこの一文をつづった。

私が先生を知ったのは大正十二年春小樽高商に入学した直後のことであった。緑町のマッキンノン先生のお宅の隣に小さい下宿屋がまえのY・M・C・Aの寄宿舎があって、学校の廊下にはられてあった一枚の掲示をみてこの寮を訪ね、はじめて先生にお目にかかって入舎を許されて約一カ年間先生とご一緒に生活をしたことから、今日まで四十数年の間何かとご親交を得ていま先生のご訃報を知り、大野先生ではないが「しまった残念だ、もう一度会いたかった」と地団駄ふむ気持ちになっている一人である。私が今日あるのはまったく先生の感化によるものであることをしみじみ考えさせられている。

私が田舎の貧乏な家から故郷を逃げるようにして小樽高商に入学して学資にも困るようなこともあったがクリスチャンであったこともあり、Y・M・C・Aの寮にいれていただき、先生の人格に毎日ふれ夕食の後など討論をしているうちに、私は全く未知の自由世界を知ったような気がしてきた。私のようなものを決して子供扱いせず一人前の人格をみとめて、まじめに討論の相手をして下さった。先生は学校では銀行論、銀行簿記等を講義していられたと記憶するが、学問よりも基督教を通してのねっからの自由主義者であったようである。いま神奈川大学の教授をしておられる大熊信行先生が時々その寮に訪ねてこられてお二人で哲学や文学論を論じておられたこと、またそばで傾聴していたことを思いだす。朝夕ご一緒に聖書を読み讃美歌をうたっていられた先生であるが、どうしても洗礼を受ける気になれないといわれたのを聞き、こんなに熱心な先生がと不思議でならなかった。

一年程たって先生が結婚されて私達の寮から山の上の官舎に移られ、まもなく英国に留学されることになった。私達Y・M・C・Aのメンバーが先生の留学の餞別の集いをもった。その時わすれもしないが先生は私に「私の英国への留学は勿論専門の学問の勉強ではあるが、一度ゆっくり聖書を通読して基督教を勉強し自分の信仰生活を精算してみようと思う」といわれた。それから一年程たって私が小樽を卒業し東京に勤務してまもない時、一通の厚い手紙をロンドンの糸魚川先生から受取った。その手紙には先生がロンドンにおける一カ年間の色々な感想がつづられ、私にいわれた通り毎日英文の聖書を精読し、日曜日には必らずロンドン郊外の教会を次から次へと遍歴して歩き、そのうちのある教会の牧師の説教を幾度びか聞いているうちに、素直に洗礼をうける気持ちになって洗礼をうけた。人間というものは不思議なものだと書かれてあった。私はいまでもこの手紙のことをときどき思いだす。

ご帰国後小樽に帰られ教授として母校の重要な地位におつきになったが、小樽のある教会の内紛の結果教会が分裂したとき、正義の味方をされて留学中に勉強された神学を基礎に牧師の代行をされ、毎日曜日説教をされたことがある。そのときにも私にくわしい手紙を下さった。先生にはこうした強い正義を求められるところ、正義の味方をされるところがあった。それがいつも先生に親しく接してきた人達に、はだで感じ、強い感化を受けているのではないであろうか。戦時中、文部省で督学官をされておられた時、また横浜高商の校長をされておられたときもときどきお目にかかったが、常に正義を求めて学者というよりも教育者として終始一貫された方である。

和歌山大学長のときも先生の正義感が左翼の先生方と正面衝突をされて非常に苦しまれたそうであるが、一歩もゆずらず教育者としての態度をくずされなかったと聞いている。晩年まねかれて母校である松商学園長になられたが、先生は隠居されるというようなことは微塵もなく、この世に生のある限り自己の力を世のためにつくすことが最大の務と信じられ、長野県の地域社会のために寧日もなき活躍をされておられた。私の記憶では最も困難な仕事である長野県教育委員会会長、県労働委員会会長等々その数かぎりない程の地域社会の世話をされておられた。私は学生時代先生から教えられたものは学問でなく、人間としていかに生くべきかということであった。

先生はいつも「愛がすべての社会を支配する」と考えておられたにちがいない。そうしてある詩人がいった如く「友情は天国だ、その欠乏は地獄だ」ということを身をもって実践された偉大なる教育家であったと思う。このことは大野先生の追悼文にかかれた先生との友情でも明らかなように、先生はおそらく今の日本の教育にこの愛の精神がかけていることを痛感し、せめて松商学園の若き血潮にこの精神をうちこみ、その成長を楽しみにされていたにちがいない。



# 僕の書斎

戸谷太通三（昭和13年）
（札幌・戸谷ビル代表者）

戸谷家具店ビルの三階に住んでいて、「紺屋の白バカマ」ならぬ「家具屋の古机」という、小樽の下宿時代から三十年も経つ座机を後生大事に使っておりますのが、私の茶の間兼客間兼という第一書斎、この部屋の緑丘色といえば、机の壁の雲盤の色紙で、大阪緑丘会昭13年会諸君の寄せ書、その上には『小樽商大OB応援団』と印刷された、これまた大阪支部からの団扇が飾られています。さらに机上には、若山君よりの三春駒の玩具、小樽高商創立25周年記念の銅の文鎮などが置かれています。

洋間で第二書斎と無理に名付けるのは本箱が二つあるからで、ベッドは私の寝ころんでの新聞読み場。

本箱の一つは、これまた約三十年前のもので、この中にはロクな本はさっぱり入っておりません。というのは、古い本は私の療養中、小樽の下宿から札幌の実家へ、そして戦時疎開、また札幌へ、物置きにほったらかして二十年、病床から起き出てみればひどい汚れといたみように、大半焼却と雑品屋へタダで持って行ってもらう始末。

今、目につくものといえば、まだ結核の特効薬のない時代、私の療養生活の指針となった自然療養社の「自然療法指導書全六巻」その他数冊の療養随想と宗教関係及び運命学の本ぐらいのものです。

療養中に心の乱れたと思う時や寂しい時、これらの本を見ては心の安定を計ったことを覚えております。

私の家の宗教は南無阿弥陀仏の浄土宗ですが、私は聖書のマタイ伝第5章からのイエスの山上の垂訓が好きで、時々読んだものでした。これと仏教とを折衷して私独特の禊りを作り出しました。

キリストは〝おいのりは人に見られぬ処で人に知られぬようにしてやれ〟といっておりますが、真夜中目醒めた時や眠れぬ時には、好んで寝たままの神想観や、心の中でお経を称え（無言念仏）当時私の出来る唯一つのことである。他の人々の幸福の為に祈ることと、死んだ友人の冥福を祈ることを実行致しました。

即ち私の思い出すあらゆる友人知人いずれも皆の幸せをお祈りさせていただいた次第でした。

このことは私を小さな我（ガ）から広い処に出したような爽やかな心境にし、憎しみのない、天地宇宙と和解した如き心境となり、一切の敵が無くなり、病気とも遊ぶ心地で心も軽くなり、全快へ良い影響を与えたように存じます。

『僕の書斎』がいつか「僕の病牀道場記」になってしまいましたがなにとぞご勘弁の程を。

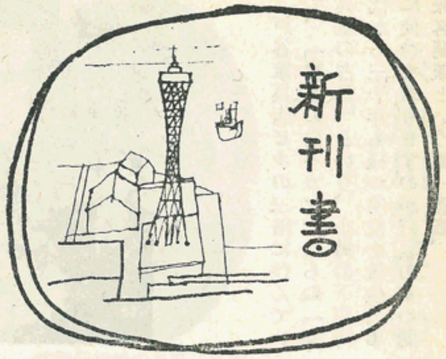
さて、もう一つの新しい本箱には私の仕事の帳簿や書類綴り、その他雑誌などと共に、緑色カバーの緑丘誌ファイル四冊と青色ファイル三冊のマルカニュースが目につきます。

私のベッドも木曽先生の〝僕の書斎〟で書いておられるように、やはり二段の書棚になっていて、療養中と同じく寝ながら読書するのに便利になっております。

さて、読書や書きものに疲れた目を窓外に転ずれば、東の方百米に、地下2地上9階の三信ビル（昭9・山本繁雄氏）が現在建築中、裏の屋上に出れば、東百米に11階のお菓子の殿堂千秋庵ビル（昭19・岡部卓司氏）北の方には、9階の日の出ビル（昭25・戸沢明専務）が見え、その他ビルの蔭ながら近くに大丸藤井ビル（昭17・藤井司郎氏）9階の富樫ビル（大4・富樫長吉氏）レジャーとショッピングの殿堂9階建のニコータウンビル（昭13・佐藤勇君）などの緑丘関係者のビルが聳えております。

その他私の町内には、札幌で一番うまいと評判の鍋やきの三河屋（昭19・平野清明氏）川中スポーツ（昭36・川中輝二氏）私の処と背中合せで狸小路には中川ライター店（昭5・中川精一郎氏）それから東へ行って、婦人洋品おしゃれの店まるきう（昭13・佐藤勇君）洋服のなかやま（昭15・小野寺一夫専務）洋服の大万（昭20・杉岡幸三郎氏）婦人洋品しがや（昭14・富江孝一氏）山福そば（大13・高松勲氏）など多士済々さらに近くの色々なビルにも緑丘会員が沢山活躍しておられます。

次の「**僕の書斎**」は芳賀　厚氏（昭二八）が登場します。自薦・他薦を問わず執筆の御協力をお願いします。




## 大一三　東口環著
## 比島作戦と河島兵団

B6版　二〇〇頁
価格　四〇〇円

東口環氏（大一三）は比島派遣軍、第四十一軍河島兵団、参謀部員、元陸軍中尉であり、同氏は大東亜戦争に応召、比島作戦に参加、昭和二十年十二月復員した。

当時比島作戦の悲惨な状況を記録して今日まで保管して来たが、各関係方面の有志の勧めによって戦記の出版に踏み切ったという。

内容はバシー海で魚雷に撃破されて以来マニラを中心として作戦に参加の状況を詳かに記録。更にルソン島の民族、風習、気象、産業方面に亘って見聞した事も加筆している。

希望者は左記宛御申込を乞う。

函館市弥生町二一―一七
東口　環

## 天才（ダ・ヴィンチ）にとりくむ
## 加茂儀一著　モナリザの秘密

五十年間ダ・ヴィンチ研究にうち込んできた前学長加茂儀一先生は世界連邦建設同盟の多忙なお仕事の中から今回芸術と科学、技術とのすばらしい業績を残したレオナルド・ダ・ヴィンチの人間像を通してモナ・リザの秘密を興味深く描いた〝モナ・リザの秘密〟を日本経済新聞社から出版された。以下朝日新聞の紹介を転載し緑丘人の一読をすすめる。

「ダ・ヴィンチの人間像」という副題のついた評伝である。レオナルド・ダ・ヴィンチはふつう日本では「モナ・リザ」や「最後の晩餐」を描いたすぐれた画家として有名だが、じつはかれの功績はそれにつきるものではない。「画家であり彫刻家であり、そのうえ自然科学者や技術者として、数世紀の偉大な人々が〝たば〟になってもとげることのできなかった仕事を、しかも一人でなしとげた」という天才であり、その過程で数学、物理学、光学、天文学、地質学、地理学、解剖学、生理学、植物学、軍事技術、土木工学など「近代の科学・技術のほとんどあらゆる分野に手をつけ、しかもそれらの分野において近代的学問の先駆となった」ほどゆたかな能力をしめしたルネサンスを代表するいわば「全能人、全宇宙人」であった。

『家畜文化史』『技術発達史』などの著書のある技術史・文明史の研究家であるが、このスケール雄大なダ・ヴィンチと正面からとりくみ、とくにルネサンス期における芸術と科学のみごとな結合、密接不可分な両者の関係を、ダ・ヴィンチの描いた名画をとおしてあきらかにすることに主眼をおいている。

ダ・ヴィンチは「世の中でもっとも麗しい顔」と同時代人からいわれたほどの美貌（びぼう）であり、やさ男でありながら「右手一つで馬蹄鉄を鉛のようにやすやすとねじ曲げた」という怪力を持ち、そこにくわえて多方面な才能にめぐまれていた。しかしおい立ちは私生児であり、五歳のとき生木をさくように実母と別れさせられ、また青年時代には男色事件に連座して投獄のうきめにあう。これらの人生体験から、かれはしだいに孤独に身を沈め、孤独のなかで自然を観察し、ついに「画家にとっては孤独であることが最良の手段である」という境地に到達する。一生のあいだ独身をとおし、性行為はたとえそれが正常なものでも、はげしい嫌悪（けんお）感をいだきつづけたという。これら極端な幸運と不運、さまざまな矛盾をまるで一身にしょいこんだような生活を述べつつ、多方面な要素をひとつに総合したかれの仕事の秘密があきらかにされてゆく。

ダ・ヴィンチにおける科学と芸術のことにみごとな結合の典型として著者は「モナ・リザ」をあげている。「モナ・リザ」はじめダ・ヴィンチの作品のなかに、たとえば人物の配列や距離の遠近のだし方、あるいは人体の部分の構造や背景をなす自然の風物に、いかに多くの科学的観察眼がひそめられているかをしめすことに著者の情熱はもっともそそがれている。

（新書判・二六〇円）

## 神奈川大学教授　大泉行雄（大一二）著
## 自然と人と生活

「ここに盛られた諸篇は日常生活における常住坐臥の生活事実にかえりみ、それに手がかりを求めて一端の思索を試みようとするものにすぎない。外表の起伏変転にもその根底には意外な単純明白な原理が横たわっているのでないか」という著書それは神奈川大学教授大泉行雄先生（大一一）である。

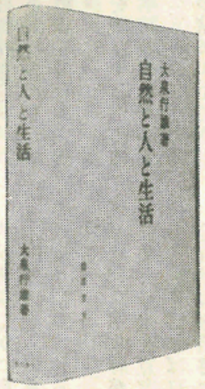
「自然と人と生活」は大泉氏の諸論文をまとめて刊行せられたものであるがどの一篇をとってみても教えられる数々のものを発見するであろう。ものを見る目のするどさに唯々驚嘆するばかりである。日常何の変哲もない事柄例えば「大掃除のときに踏台にのって天井や鴨居の煤ほこりを払い落してわずか五〇センチそこそこの踏台から見ただけで室内の視界ががらりと変ってしまう」この事と動物園に子供を連れていって見た時の象やキリンが同じように大人と子供にも映ったという考え方が違って来る事とを結びつけ子ども（嬰子）の世界、反抗期、個人発見、社会発見、子どもの問題などに進展し真実の躾とは何んであるかを語る。（第二部子どもの成長）〝人をつくる〟では「人間形成」の一番大事な大学生活についてウエーバーやマーシャルの含蓄ゆたかな考えを引用しているが大学生を持つ親の必読の書でもあろう。

この書は第一部、第二部、第三部からなっているが、今昔のドイツ――一九六六年経済学学会に出席して三〇年前のドイツと比較した旅行記を第一部に、そして軍政官当時ビルマ人の心境を通じて受けた感動を第二部に夫々入れるなど堅い論文のあとに肩もこらずに読めるものを入れて編集にも気をくばられている。

第三部は東京商大（現一橋大学）福田徳三、三浦新七、上田貞次郎三教授の当時の学問の広い視野から問題をとりあげたそれらの人々の横顔をのぞき、現在専門化されつつある経済学の深い究明については「つねに歴史と理論と政策を通じて広い視野をもたれていた」と現代の研究者の反省を求め、さらに上田貞治郎博士の「社会主義と企業者職分」の紹介にも及ぶ。

大熊信行先生の「経済研究と経済学研究」という問題にもふれ、さらに著者の尊敬するワルター・オイケン教授の人となりと思想と学問を紹介する。

紙幅の関係上編集部に寄せられた「自然と人と生活を読んで」と題する小樽商大生K君の手記を次号に掲載したい。（勁草書房　七八〇円）




### 早川三代治遺稿
### 『地飢ゆ』北方文芸に連載

小樽に生れ、樽中、北大出の元小樽商大教授故早川三代治先生は純理経済学序論、レオンワルラス純粋経済学理論入門、など著書も多く、また文学上の述作も昭和七年聖女の肉体（戯曲集）をはじめ短篇、長篇小説も書き昭和七年から出版されていた。遺稿「地飢ゆ」八一七枚は十二月創刊になった「北方文芸」の第二号から連載第一回がはじまった。三月号は多喜二特集の予定と聞く。

（札幌・なにわ書房）



## 緑丘通信

☆朽木尚孝氏（大一五北海道熱管理協会事務局長）は昨年通産省関係四十二年度秋季国家褒章に際し黄綬褒章を授与された。

☆狭田喜義氏（昭一六）は広島大学政経学部教授であるが今回九州大学で学位論文通過、経済学博士号を授与された。主論文【重農学派賃金学説の研究】

☆伊藤整氏（大一三）は一月十五日付で文部大臣から芸術院新会員（第二部＝文芸部門）に任命された。

☆昨年十一月二十日北大クラーク会館で第一回北大寮歌祭が開かれたが小樽商大からも賛助出演して小樽商大寮歌の数々を披露。

☆去る十二月八日午後五時半―六時三〇分、HBC（北海道放送）から「ロバ先生」のラジオ放送があった。この日は戦争記念日であり、マッキンノン先生や三人のお子さんまで強制送還された事、マ先生前夫人の死亡の事、マ先生の歓迎会の情況など録音構成であった。このテープは松尾教授が去る一月十三日東京支部新年パーティに持参して数本希望者に頒布された。

☆十二月十五日北海道では私学教育功績者として野又学園理事長野又貞夫氏（大一二）も被表彰者五名の一人として表彰を受けた。表彰者を代表して「微力だが今後も私学振興のために尽したい」と挨拶。

☆前号で大野純一先生は「糸魚川君と私」の欄で「令息直祐君（直輔君は誤り）も今は阪大の先生で猿の心理学とか研究し一年の中半分位は山の中の猿を観察している。そして数年前には渡米して立派な業績を世に出しているそうである。」と紹介されたがはからずも「科学（岩波）一月号」にアメリカにおける霊長類行動研究―〈ヤーギズ研究所を中心〉―と題してその紹介記事が発表された。

☆実方学長は国立大学協会会報第三七号で「学問を忘れた大学生・教育の場でなくなった大学？」と題し「学問を忘れた大学生」という事態を作り出しているものに企業側の大学生に対する求人態度や講義する教授の質（学問の深さと人間性の深さを含ませて）―よき教授は学問の研究とその成果の講義とを全人格の発動として行うものでなければならない―を指摘している。最も望ましいのは学生の人間形成に大きな影響を与える「交わり」の場即ち厳しい講義こそ教授と学生との最も真剣な「交わり」の場であるという。ともすれば進歩的な態度を誇示して学生の人気を集め、学問探究の厳しい姿勢を二の次にする傾向のある一部教授がないとはいえないと指摘する。

☆小樽商大四十三年度卒業生の就職状況は「求人申込七七七社」に対して就職希望者一五八名は何れも四十二年十二月で全員決定す。この他大学院希望者九名。留年すでに十五名は確実という。

# 戰塵餘錄（七）

## ＝苦米地英俊日記＝

（小樽高商三代校長）

**七月二十七日**

金華山を敵潜が昨夜砲撃した。英労働党昨日の総選挙に快勝。国民の平和欲求の反映。英国疲弊の証拠。米、英、重慶の対日共同宣言。

一、世界征服の企図を誘発した権威と勢力とを永久に除去し軍国主義を駆逐する。

二、吾等の目的を確保するため連合国が指名する日本諸地点を占領する。

三、カイロ宣言の諸条件を実施し日本の主権を本州、北海道、九州、四国及び吾等の決定する諸島嶼に限定する。

四、日本の武装兵力を完全に武装解除する。

五、戦争犯罪人を厳重に処罰する。日本政府は国内に於ける民主々義傾向復活に対する障碍を除去し且つ基本的人権を尊重し言論信教並びに思想の自由を確立する。

六、日本に対してはその経済を指示し、かつ正当なる現物賠償に応じ得るための産業を維持することを許すが、再軍備を可能にする如き産業を許さない。以上の目的のため原料資源の入手を許され、かつ将来国際貿易関係に参画することを許される。

七、連合国の占領兵力は以上の目的が実現しかつ自由を表明された日本国民の意志に基づき、平和的責任政権が樹立されると共に直ちに撤収する。

八、日本政府が即時全武装兵力の無条件降伏を宣言することを要求する。然らざれば日本は速やかにかつ全面的に破砕されよう。

右に対し「敵米焦躁露呈」する当局の発表以外に紙上にも放送にも何等ふれていない。「黙殺」だそうである。自分も国民の一人としてとても我慢出来ない。一口にいって議論権を持っている如き言説は最も不都合、勝てば官軍か。政府に対しても足らぬのは「聖戦」がいつの間にか「征戦」となり、しかも勝つ見込みがあるなら如何にしてもそれを明確にせず、ただ「最後まで戦いあるのみ」「必勝の信念あり」だけでは判らぬ。前記の如き宣言を敵が発表した、その事だけでも我が国の恥辱だ。

警報一〇時三〇分夜、B29二機函館へ、艦上機日本海、近畿、中国、四国、潮ノ岬艦砲射撃。

**七月二十八日**

警報九時半頃青森方面がやられたらしい。函館へは七機。「物量には限りあり、闘魂には限りなし」と沖縄脱出の神中佐が言う。経済学者は言う「物量には限りあり欲望には限りなし」と語呂はよく似ているが併し中味は別。

今日も敵機来襲二、〇〇〇を超えたと放送。うち青森、平方面に来たB29一二〇、結果は思い知られる。関西、東海地区二二〇機、呉地区には計一一〇等と。本土決戦に備えて空軍を出さぬとか。分断され、焼かれ、殺されて、戦力が昂揚するのかしら、前大戦のドイツの海軍、大切にして使わずじまい。制海、制空権が敵に奪われたのだと遠から国民は気付いている。併し大本営の発表によるとそんな筈が無い。それでも大本営発表は正確無比、軍を絶体に信ぜよといわれても出来るものだろうか。口なき国民は責任を問うどころか実情を尋ねることも出来ぬ今日。「牛馬より悪い食物」と世間でいっている。軍の偉い指導者が「牛馬は草を喰べてあの通り丸々と肥えているではないか」と放送演述。願わくば我等に牛馬の胃を与えよ。牛馬が人間の真似が出来ぬと同様、人間には牛馬の真似は出来ない。

**七月二十九日**

正午すぎ警報、昨夜の戦果確認偵察に敵が来たのだと想像される。二時半出発仁木には昭子の疎開先きを尋ねた。昭子の衣類を届けるのが主目的。急製農家容易ならぬ様子。空襲熾烈、記するに暇なし。計六〇〇機。

**七月三十日**

艦砲射撃、浜松、潮ノ岬二三時三〇分頃より。浜松市に若干の被害があったとの事ほんとうは？今日も二〇〇機以上。

明治天皇祭、今日御代拝であった御様子。大帝神去りまして三十三年、世の遷り変り御偉業遂に消えなんとす。ああ

「食糧確保は厳粛な戦い」に相違なよいい、「一人一坪開墾で勝とう」と。よしやるぞ、と言いたい処だが、それが出来ず。塩も造らなければなるまい。配給も時を遅らせては貰えない。防空要員にも、職域にも、義勇隊にも尽す戦務があり、家庭農園も今あるだけでも手が届きかねる。その上、種子の配給もせず種子をまけ早く早くとは何としても解せない。そうした事情の下になお一坪開墾、そうした事情の下になお一坪開墾、号令者先づ一坪開墾をしつつありやと問う。

**七月三十一日**

今日初めて夏らしい。北海道の夏そこには涼しさがある。けれども夏服に着かえた。夏は夏らしい気分がほしいのだ。併しそれから暑くとも農作物は望みなし。

国民義勇隊の戦闘隊移行が慌しく速度を速めて来たかに感知せられる。「血と魂」が要求されている。「壊せば造る闘魂」それが必要なことには異論なしだが、壊されることは当然として怪しまざるは不思議。家屋疎開、第一次、第二次と続く。



この最初の時、自分は次のように意見を述べた。「小樽市の疎開は急速に進めるべきだ。その目標は三つある。第一は交通機関その他重要施設の保護、第二は人命の安全保護、第三は延焼防止。初期防火の必要は勿論であるが併し集中焼夷攻撃に対しそれが防止は容易のことではないと同時に延焼防止はある程度必らず出来、もしそれが出来たら災害は過去の何分の一かに止め得たと思う。それには最後に社会安全の保証がなくては容易に敢闘精神が振起されない。疎開には叙上三つの外に雑念を加うべきでない。

次には疎開はやる以上一度に徹底的にすべきだ。中途半端ではやらざるに劣る。二次三次になるといつ迄も人心が落付かぬ。立退き先が二次、三次に引かからぬとも限らぬ。のみならず賠償金も後になればなる程悪くなるのは必然。である上にぐづぐづしていては間に合わぬことになるかも知れない。政府下附金などあてにせず、市民全体のためである。市民全体が負担してよいではないか、また財ある人は寄附を出してもよいではないか、そして疎開される人も多少の分担のつもりで少額の支給（弁償金または移転料）に甘んじようではないか」と云うのであった。これは一笑に附せられた。が今になって自分の説を認めずには居られまい。

天候不順のため「本道の食糧事情逼迫は極度に達して来た。農家は援農学徒に喚い込まれることを嫌いはじめ、事々に面白からぬ風潮が現われている。今日の社説で「熊谷長官の要請に応えて協力一致必死の努力を払え」と論じている。その云い方が長官に媚を呈している感じを与える。官吏の要請に応えるのではない。自分のため、道民のため、戦争に勝つために必要なのだ。

艦砲射撃、清水市、真夜中〇時過ぎ、今日の空襲二、〇〇〇機内外、B32初登場米側より伝う。P51は天津まで足を伸ばした。沖縄に特攻続く、但し間歇的。

## 異動（二）

### 栄転

梅野弥太郎（昭九）
北海道銀行東京支店長（大阪支店長）
東京都中央区日本橋本石町四丁目二番地
瀬下雅也（昭一〇）
北洋相互銀行東京支店（同行札幌本部）
東京都台東区上野五丁目六—一〇
江上芳雄（昭三）
熊本家庭裁判所長（大阪高等裁判所）
太田英治（昭二）
㈱横浜コイルセンター取締役経理部長（三井物産）
東京都港区西新橋一丁目五—八（仮事務所）
畑中二郎（昭一〇）
湯浅貿易㈱常務取締役（取締役）
津久井七雄（大一五）
湯浅貿易㈱取締役（副社長）
永井正一（昭九）
日本製粉株式会社取締役
小山　猛（大一二）
船場経営相談所
大阪市東区横堀三丁目十七　福星ビル金剛内
星野　貞（昭一六後）
日商欧州総支配人、ロンドン支店長取締役
山本陽治（昭一六）
日綿実業株式会社取締役内地繊維本部長
長崎　弘（昭一六）
外務省ラスパルマス（スペイン）総領事
八家要（昭七）
山陽特殊製鋼株式会社常務取締役（神戸銀行）
水島弘（昭八）
神戸コンテナターミナル株式会社々長

### 住所変更

谷　英純（昭一四）
東京都世田谷区新町二丁目二九—六（表示変更）
桜庭亥一郎（大一一）
北海道亀田郡亀田町字富岡五六—二
小島典春（昭一一）
浦和市大田窪五丁目二〇—二五（表示変更）
田森誠一郎（昭一八）
愛知県愛知郡東郷村和合ケ丘二丁目二十一番の五
橋田和道（昭三四）
尼崎市南竹谷町一—二九　太子伊太郎方
田辺靖雄（昭三五）
豊中市新千里北町三丁目B17—二〇二
鈴木啓介（昭一三）
豊橋市駅前大通三丁目一一三番地の二
瀬下雅也（昭一〇）
千葉県松戸市中根四〇四
水越金二（昭一九）
名古屋市緑区有松町往還南二三六—六
江上芳雄（昭三）
熊本市京町二丁目二二三　裁判所官舎
能代鉄雄（大一二）
東京都大田区池上七丁目一四—四（表示変更）
望月鷹雄（昭七）
横浜市港北区つつじケ丘一八番—二〇号
角江重保（昭一〇）
旭川市六区一条　公務員宿舎四〇六—二一一
山口民男（昭二二）
豊中市服部南五丁目四—一〇

**〈まんびつ執筆者つづき〉**

田森誠一郎、七戸真次、松沢久隆（昭一九）高山博男、荻村茂雄、赤津俊樹（昭二三）牧口富伍、福田和、服部奎吾、北野巧（昭二五）我満博仁（昭二九）古内一成（昭三〇）石津洋三（昭三一）小田島和夫（昭三五）佐藤良雄、本前勝支朗、長津行高、猪浦淳一（昭三六）神田隆志

## 緑丘余話

# 歌会始めの召人に選ばれた 松山茂助氏（大四・北大卒）

サッポロビールの会長である松山茂助氏はこの緑丘に表紙絵を昨年度一年間描いて下さった方であるが、新春恒例の皇室行事「歌会始の儀」が十二日午前十時から皇居仮宮殿の北の間で行なわれ、召人（めしうど）として出席された。

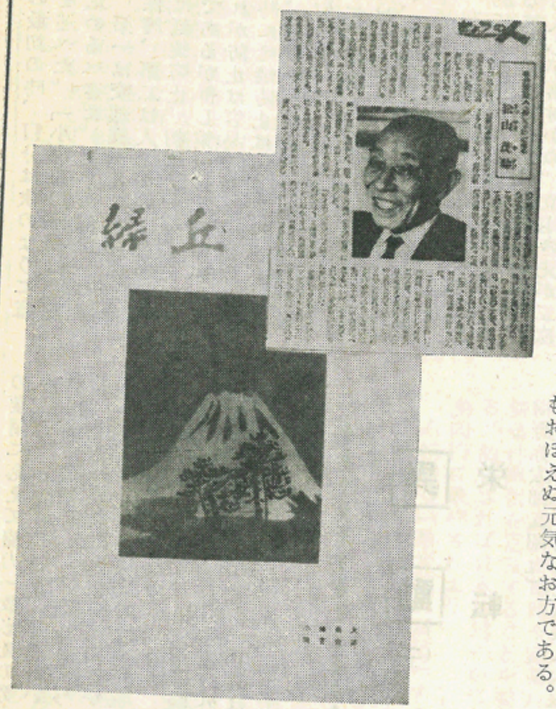
ことしの御題は「川」で天皇、皇后両陛下をはじめ皇太子ご夫妻、常陸宮ご夫妻、秩父宮妃殿下のほか入選者十二人や選者五人が出席。このほか各界から約百人が招待された。

召人の歌　松山茂助

ふるさとの町を流るる千曲川
たちまちにして峡（かひ）に入りゆく

〝千曲川〟という歌集の自費出版についてはすでにこの〝緑丘〟で紹介したが選者の一人となった佐藤佐太郎先生に師事、〝千曲川〟第二集も近く出版と聞く。

北大寮歌「藻岩の緑春たけて…」は松山さんの作詞であり、昨秋大阪松豊画廊での三人展では油絵二十余点出品、全部売れ切れ。七十七才ともおぼえぬ元気なお方である。




# 札幌商科大学誕生

## 学長に室谷賢治郎氏

昨年苦杯をなめた札幌短大の昇格も一年後の十二月には念願かなえられて札幌商科大学となり、室谷賢治郎氏は学長となった。西野幌の文教地区にすでに鉄筋四階建ての校舎が完成し、予定通り初年度二百五十人の募集で四月から開校となる。

商学科のなかに商学コース、会計学コース、経営学コース、経済学コースを設け、ゼミナール形式で徹底した小人数教育を行なうといい、四十五年度までには、図書館、体育館、学生寮やスポーツ施設を完備する予定。

大学の特徴について室谷新学長は次の様に語った。

「将来の北海道は日本の商業貿易の中核になるというのがわたしの持論です。公立の商科大学は型にはまりすぎているのでのびのび勉強のできる学園づくりをしたい。

理論はもちろん大切だが、それ以上に実務に強い学生を養成し、新時代の貿易マンを社会に送り出したいと思っています」

すでに発表になった教授陣の顔ぶれを見よう。

学長に小樽商大名誉教授室谷賢治郎（経営学総論）北大名誉教授の児玉作左衛門（人類学）専修大学教授、常盤敏太（法学）北大名誉教授、舘脇操（生物学）室蘭工大、増田貢（英語）茨城大、桐田尚作（商学概論）北大、川村琢（市場論）学習院大、大谷敏治（貿易論）同志社大、松山武司（保険論）一橋大、古川栄一（経営学）もと中央学院大、古沢磯次郎（協同組合論）電通本社広告次長（広告論）札短大、朝倉和夫（会計学）日本リサーチセンター研究部長、安永武巳（市場調査論）道立総合研究所次長、林武司（労働経済論）のほか客員教授に一橋大、宮沢健一（景気変動論）同、吉永栄助（商法）各氏となっている。

### 北海道開発調査会

**岡田春夫氏（昭12・衆議院議員）から〝プロレタリア文化大革命〟を聴く**

北海道開発調査会（東京都中央区日本橋通一―六　万才ビル　佐々木周一事務所内）では十一月三十日、中国人民外交学会の招きで中国訪問の旅を終えた岡田春夫代議士を招き『プロレタリア文化大革命について』の生々しい近況を聞く。

北京、山西省太原、その他農業でどを訪問の旅行情況をはじめ、毛主席のまとまり、文化大革命と幹部問題、そして劉少奇の再起は不可能で、次の人民大会（日本の国会に当るもの）にその処遇が決定するであろうが、毛主席、林彪副主席を中心とする指導体制はますます強いものとなろうと語り、種々の質問に応えてこの会を閉じた。

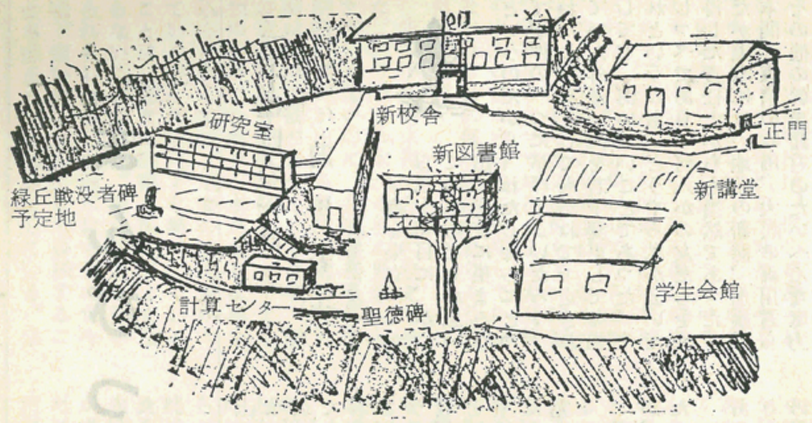


着々進む

# 緑丘戦歿者慰霊碑建立計画

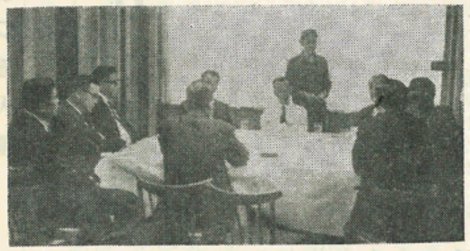
## 『参加する事に意義がある』

## 五百万円資金募集開始




緑丘戦歿者慰霊碑の計画はその実行委員長に昭四池田昇一氏が就任。着々会合を持ち、その経過報告をはじめ戦歿者名簿の作成確認等が北海道特に中心地札幌に於て活発に活動を開始している。そして各支部に対し募集要綱を送り一口二千円の応募について三月を目標に協力願いたい旨を発送した。

しかし北海道以外の地区はまだ静観している様にも思えるが至急協力願いたい。


（東京に於ける打合せ）

今回の募集総目標額五〇〇万円、これに対し特に活発な動きを早くも示したのは昭和一六―一九で、一つの新らしい横の連繋の密接さを語るものであり、立派な団結の現われとして賞讃すべき美挙である。

東京支部新年懇親会（一月十三日）のあと別室に於て松尾教授を囲み実方学長、神田事務長、東京支部武岡副支部長、北海道から来阪の竹山涼一（昭一八事務局担当）、小林英一（昭一八募金担当）の両氏と大阪支部から蟇目英三（昭一一緑丘編集部）も参加、その他計十名で協議を開始した。

碑の建立場所について松尾案が示された。（図面）その理由今後校舎増築に何ら支障を来たさない将来も残って行くと思われる場所が一カ所あること、実方学長案もあり、両者の協議にまつこととする。

**碑の形式**

一、立像、群像について……予算との関係で決定。

二、彫刻家の指定。

当日、本郷新（新制作会員・小林多喜二碑建立）ほか二、三人、名はのぼったが経歴書もなく、討議の対象となるべき何ものもなかった。たとえそれを提出したとしても何ら決定すべき知識も持ち合せている様子も見当らなかった。

立命館大学わだつみの像……本郷新制作

藤川〇〇氏試作……石膏像の二枚の写真が回覧されたが結論として、松尾正路教授に像の型、大きさ一任とした。しかしその会における空気は抽象を排し具象、誰れにでも判かるものという条件がついていた。

**募金について**

大阪支部より「もう一度本部会報送付の時に振込用紙を送る事」その裏面に各支部名と年次別を印刷し、各支部申込金額、年次別が集計可能とすることの申入れを行ない、各支部募金について事務手続きを容易ならしむるように協力を依頼した。

**戦歿者名**

戦歿者の氏名については各支部に送附されて、戦歿者名簿の訂正、遺族の氏名住所の空欄埋めを急いでいる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 三名 | 大正十三年 | 三 |
| 〃十四年 | 二 | 昭和二年 | 一 |
| 昭和四年 | 一 | 〃五年 | 八 |
| 〃七年 | 六 | 〃八年 | 六 |
| 〃九年 | 五 | 〃一〇年 | 一二 |
| 〃一一年 | 一六 | 〃一二年 | 一七 |
| 〃一三年 | 一八 | 〃一四年 | 一六 |
| 〃一五年 | 一六 | 〃一六年 | 三六 |
| 〃一六年後二九 | | 〃一七年 | 一七 |
| 〃一八年 | 二五 | 〃一九年 | 一四 |
| 〃二〇年 | 二 | 在学中 | 四 |

となっているが急拠準備委員会の作成になるものであるため記載洩れがあるかも知れないので補正の上、遺族の連絡先も出来る限り記入して緑丘会札幌支部へ返送を希望するとの事である。連絡洩れのあった場合は永久に除かれるであろう。

なお本日の打合せでは氏名を銅板に刻み像の基部の中に入れてはの案もあった。これは希望に終ったが全て彫刻家にまかすべき問題であるかも知れない。

参加する事に意義がある。ご成功を祈り応募の速かならんことを。

# まんぴつ五人集

## 次回

加藤　勇（昭一二）
草野　一（大七）
中瀬　秀一（大一一）
柳　悦蔵（昭一八）
一　健太郎（昭二）

## 三十年目の一日

岡田春夫（東京支部）

学窓を巣立ってから三十年目に、かつての悪童どもが思い出の学校に集まろうというのだから、わたしたちにとって事件の一つに挙げてよいだろう。わたし自身としてもかねて予定されていた外遊計画を若干変更して参加しても、悔いないことであった。それというのも、どうやら私が云いだしっぺであり、何人かの友だちを説得した責任上からも当然であった。だが実際には、地元の新海、加藤、本間、東京の牧田、大阪の森川君らその他の幹事諸君のたいへんな尽力で、すべては順調にはこばれていったのである。

その日―昭和四十二年八月二十六日、小樽はもう秋めいてはいたが、きらめくような快晴であった。一寮のあとにできた学生ホールには、むかしの美少年がそくそく六〇人も参加してきたのは、よろこびというよりも、少々おどろきであった。

街で会ってもわからないほど禿げ上ったり、あるいは銀髪になってしまった旧友をつかまえ、胸にさげた名札から記憶をよびかえしても無礼でもなければ、年輪のふかい顔から若き日のおもかげを発見してもゆるされるのは、友情というものであろうか。その晩の天望閣の懇親会から翌朝にかけて、飲むほどに、歌うほどに、すっかり学生服のヤンチャ坊主に還えってしまったのである。わたしたちは三十年目の貴重な一日を完全に満喫した。

喜怒哀楽をこめた学校ではあったが、むしろそれなればこそ、月日がたつほど懐かしいものであった。

二階のラセン状階段の真うしろにある合併教室は、学生時代の印象よりもえらく小さな部屋であった。その机にすわると、鈴木の爺さんが大きな名簿をもって、ひとりひとり出席をつけているような気がする。冷たい掲示板が厳然とその存在をしめしていた生徒課の角部屋から、浜さんか、木部さんがノコノコ出てきそうだった。わたしたち二、三人はなつかしい緑丘新聞編纂部を新講堂の地下の一室にさがしあてたが、暑中休暇でガランとした室内は、それでも三十年前と同じように、原稿用紙など乱雑にちらばっていた。カビくさい古新聞のページをめくっていると、なぜか心の安らぎをおぼえた。

なんとしても淋しかったのは、正面玄関前にひろがっていた、静かな芝生のローンが消えて、その上に洋式の、大きな新校舎がデンと腰をすえていることだった。あの場所で、高下駄をはいた学生もまじえて、軍事教練がおこなわれたものだったが……。初夏になると、よく芝生に横になった。晴れわたった空と青い海の彼方から、ブルーファネルの汽笛が〝ボー、ボー〟と余韻をただよわせ、異国への旅愁をかきたてたものだが、それがまるでいましがたの昼休み時間のことのように浮んでくる。戦争がもう身近かにせまっていたとはいえ、それでもまだまだ平和な、自由な、よき時代であった。

天望閣でみんなと別れたあと、森川、梅原君らとつれだって、手宮公園にあるといわれる小林多喜二の碑に車をはしらせた。道々ひとにたずねて公園を一周したけれども、結局見つからずじまいになった。誰にきいても多喜二のことは知っているが誰にきいてもその碑のことは知らないという奇妙な共通点が心にいつまでものこった。もっとも碑建設の発起人の一人であったわたし自身が知らないことが問題なのである。その夜、札幌で応援団長に当選した「おやじ」、佐藤輝夫君を加えて大いに痛飲した。しかし誰からも「ストームをやろう」という提案がなかったのは、半世紀をこえた肉体の厳しい現実の所産であろうか。

梅原君からバトンを渡されながら中国滞在中であったため、森川君が代走してくれた。親友とはありがたいものである。

次ぎは小樽の加藤勇君に登場ねがおう。

（昭一二　衆議院議員）

## 老いのくりごと

金栄酉吉（小樽支部）

想いがけなく、同期の白瀬治三郎君から『まんぴつ五人集』のバトンを渡された。顧みると、白瀬君には卒業以来一度もお会いしていないように記憶する。在学時代の小生は、それこそ珍香もたかず屁も放らずの、目立たない存在だったし、卒業後もとんと御無沙汰ばかりで、今日に至った小生をどうした縁で想い出してくれたものか、些か不思議であり、またこの上もない光栄でもある。卒業式の夜、今は跡形もなくなった『高田家』で、最後の訣れの盃を交してから五十年。よく忘れずに居て呉れたもの、これが同窓の良さというものかと、つくづく有り難かった。友遠方より来るに似た感懐で一杯である。

白瀬君が指摘した通り、この『まんぴつ五人集』には、若い卒業生は別として、大正年代の卒業生で今まで執筆者のないのは、大正七年の吾々の期と大正十年の期と二つだけである。（本誌第五十七号記載の調査による）何んだか仲間から除け者にされたような変な気がしてならなかった。この両期の卒業生は、ひとつは第一時大戦で景気が最もよい時期に学窓を巣立っており、他は大戦後の不況のどん底時代に卒業しているということに何か関係がありそうな気がする。

さて小生近来視力とみに衰えて来た。罰で眼がつぶれる程の悪事をした覚えもないのに、左眼は辛うじて明暗の判別が出来る程度であり、右眼は極度の乱視と来ているので、物の遠近高低の判断が怪しくて、よく物につまづいたり、水だまりに落ち込んだりしては、老妻の渋面をかっている。それに何より難渋していることは、好きな読書と旅行がままならないことである。随分手術を勧められもしたが、耐用年数も済んだ今頃、痛い思いをしてまで修繕することもあるまいと達観？している。幸い胃袋が人一倍頑丈らしく、飲むことと食べることの楽しみは満喫している。好きな庭いじりをした後で一風呂浴び、老妻の手料理で一盞傾ける時の酒の味は、また格別である。

酒と言えば、近頃の酒呑みは大変様子が変って来たようだ。浅酌低唱などという意気な風情は、今時の人に言うだけ野暮であろうが、それにしても何とも早や味気ない飲みっ振りである。割り勘で行こうなどという方は上の上で、多くは会社の招待客などで、埋め合わせをつけているようだ。招待客の顔色を窺い乍ら飲んでいては、恐らく酒の味はすまい。その口直しにと二次会、三次会と流れて、それが皆会社のツケになるという。昨年度の法人の交際費が六千億円とか。全部が全部飲み食いではないとしても、いわゆる社用族の浅ましさを披露するものではなかろうか。土台酒で相手を釣ろうという考え自体が、自分の腕のないことをさらけ出すようなものである。酒はひとりで静かにのんでこそ天の美録であろう。

しかし振り返って見るとこんな気の利いた口を利けるのも年のせいであろうか。お前の若い時はどうだったと問われると、時代が良かったからと逃げる以外に手はなさそうだ。時代は変る。やがて置いてき放りを食う時も来るだろう。吾々の年では先は知れている。過ぎて来た年の方がずっと長いのだ。過去を想い出すだけが楽しみとなって、それこそ明治は遠くなりにけりである。

折角白瀬君に白羽の矢を立てて頂いたが、大変な雑文で申しわけない。お許しを乞う次第である。

次は矢張り同期の草野義一君にお願いしたい。

（大七　㈱大国屋会長）

## 齢をとると段々不安になるが皆元気で行こう

中田新平（東京支部）

齢の関係からか責任ある仕事から離れて仕舞ったためか人生への希望もなくなり、将来へのビジョンもなくなると共に行く先が何んとはなしに不安になって来た。これから何年生きるのだろう。余り永生きすると残り少ない貯金もなくなるし、若しも病気でもしたら入院料は大変だし、子供達に迷惑をかけることになると考えたり他人に迷惑をかけることになると考えたり、せめて他人に迷惑をかけずに自分のことは自分で処理出来る間は生きるだけ生きて、後はストンと逝きたいものだなーと考えたり、時には老妻と話し合ったりすることがある。皆さん、そんなことはありませんか？

若い読者は何んと気の弱い先輩なんだろうと御笑いでしょうが、どんな会社だって停年のない会社はありません。概ね五十五才停年です。最近停年延長が唱えられ五十七、八才になった会社も少なくありませんが六十才停年と言うのが全国で二十余りの会社だけですし、組合役員になっても七十過ぎで会長に居据って居られる方は稀でしょう。本当に齢をとると言うことは淋しいことですが、知らぬ間に齢をとってしまいます。最近、国家としても人口の老齢化と言うことが問題になりつつありますが、厚生省の人口問題研究所の研究によると昭和四十年度の六十五才以上の老人は六百二十八万人であるが、五十年度には八百七十五万人になり、六十年度には千百五十一万人となり、飛んで九十年度には何んと二千万人となり総人口の十六％を占めるであろうと推算されています。社会環境の改善と医薬の進歩がもたらす結果であろう。

しかし一方、十四才迄の人口は産児調制等の関係で毎年減って行って昭和七十年位から三百万人も減っている。そして十五才から六十四才迄の労働可能人口も昭和八十年位迄は増加して行っているが、昭和九十年になるとグッと減って昭和五十年位の数に減ると推算されている。そうなると国家としても老人をどうして養って行くかと言う問題が出て来る理であるが、そこで労働省ではF・I・E・S及びC・P・Iと言う統計のとり方で人口一人当り実質的可処分所得と消費額を差引いて平均貯蓄性向を調べて物価高による貯蓄不足はスライドして若い人達が負担すると仮定して計算すると、国家全体では大丈夫だと言う結論に達すると

言う統計を見た。

昭和四十年六月から厚生年金は平均一万円年金となったり、国民年金も今年から月額二千円から五千円に増額されたり、昭和四十四年からはこれらを二万円、一万円に増額する外、物価にスライドするように計量されているように新聞が報じて居りますが、既に恩給も六十五才未満は一割増、六十五才から七十才迄の方は二割増、七十才以上は二割八分五厘増しと増額され、一般公的年金もこれに倣って増額される等、社会保険制度もおそまき乍ら欧米なみになろうと漸次拡充されつつありますが会社の幹部であり経営者も多いであろう読者の皆さんも公的年金に平行して適格年金なり調整年金なりの税法上優遇を受けている制度を実施して、数多くの社員の将来のための施設とされんことを望みます。欧米の公園等のベンチや軽食堂で老夫妻を多く見受けることが、こうしたノドカな風景を我が国でも見受けられるようになりたいものである。それには吾々も社会保険、行き過ぎない適切な社会保険の拡充への道を常に叫びつつ、余り老後のことを心配せず、また遠慮することなく安心して永生きすることが出来る社会に致しましょう。

私は常にそうした平和国家社会になることを信じて安心してのんびり生きて行くことにしています。

因に筆者は日経連社会保障委員会の委員であり、YKKファスナーで有名なYKK厚生年金基金の学識経験監事でもあり、年金について研究を楽しんでいる。

次回は同期の中瀬秀一氏にどうぞ（大一一）

## 歳末雑感

松沢久隆（大阪支部）

一九六七年も早や旬日足らずで暮れようとしている。街々は喧騒に満ち、人々は慌だしく往来する、毎年乍らの景観である。〝光陰は矢の如し〟と言う言葉があるが全くその通りで、懐しい緑ケ丘を振り返り、学友の声に答えながら地獄坂を降ったのはつい昨日のように思うのに、既に二十有余年の歳月が流れ去った。今でも瞼に浮かぶ緑丘の四季様々な有様が鮮明に蘇って、当時の生活が楽しく偲ばれるとともに、学友の声や諸先生の声咳もつい耳に聞こえてくるような心地がする。これは私だけでなく、学窓を去った人々の共通の感懐であろう。

小生の卒業当時は〝校門から営門へ〟と太平洋戦争の激化につれて、学業も放擲して軍隊に投ずることが学生の辿るべき途と定められていた。小生も一八年秋に学期試験の最中にも拘らず小樽を去り、学徒兵として陸軍飛行学校に入校し、翌春には台湾、フイリッピン、ボルネオ、マレー等、南方の空を転々として二〇年初頭に本土決戦に備えて内地に帰還した一人である。八月の終戦を迎えて九死に一生を得て復員した次第で、同期生十数名中生き残った者二～三名を数えるのみと言う状況であった。爾来日本の復興、経済の再建と云う掛け声に合わせて、焼土の裡に遮二無二生き続けてきた。

流れ去った二十余年の年月は、如何に大きく、急激に日本人全体の生活を変えたであろうか。政治、経済、社会、文化等、凡ゆる面で変革をもたらし世相を変えていったかを思えば、感慨無量のものがあります。顧みれば、終戦直後の混乱、飢餓感に苛なまれた食糧不足時代、破壊の後の復元、朝鮮動乱を契機とする特需ブーム期、底の浅い我が国経済は国際経済の波のまにまに木の葉のように翻弄されながらも徐々に体力をつけ体質を改善して高度成長を遂げ、今日の安定成長時代を迎えた訳である。そして今年の投資景気好況に遭遇した。今では戦後と云う言葉は抹殺されて、新しい時代の中に明日への限りなき前進の意欲と方向を求めなければならない時に至ったのではなかろうか。

身近かな生活環境から眺めると、トランジスター、電気洗濯機、テレビ、冷蔵庫等の便利な耐久消費財がどんどん出現して日本の隅々迄普及し、さては三C時代来たる。クーラーだ、カーだ、カラーテレビだとマスコミが騒ぐ程である。誰が戦後の混乱期に、いや十年前ですら今日の世の繁栄を予想しただろうか。家庭生活の様式も変った。家事に躍躍していた女性が、雑事の時間から解放されて主婦の座が高まり、消費の王様、消費のリーダーにのし上った。そしてこの歳末には史上空前のボーナス、供米代金が支払われて、消費景気は一層盛り上り、商店街もデパートもこの時とばかり札束をのみこんでゆく。有難い世になったと思い、一方ではこれで良いのだろうかとも思う。愚鈍な頭には分り兼ねる許りである。四季に応じたレジャーブーム、消費ブームと言ってる間に本年も暮れてゆく。新年が訪れる。来るべき年はどんなことになって、その先はどうなるだろうか等と心配する。回転の早い、移り変りの目まぐるしい世の中に、今後もまた一生懸命について生きてゆかねばならぬ。

日本全国に散らばってる同級生諸氏も今頃は多忙な毎日を送っておられることと思う。どうか健康で明るい新春を迎えられんことを祈念します。〝まんぴつ〟執筆を突然仰せつかって、誠にと惑って、さて何を書こうかと思っている裡に日が過ぎてしまい、懐旧とも世相批判ともつかぬ、とりとめのないことを書いて申し訳がないと思いますが、大阪の生き馬の目を抜くと云う商業都市の片隅で、激しい商戦に目を廻している愚人のたわごとと読んで頂きたい。

次回は川口市で家業に励しんでいる一柳悦蔵君にバトンを御渡しします。

（昭一八　旭ダウ株式会社）





## 随想

小西征夫（札幌支部）

前号の「まんぴつ」を中沢勝平君から依頼されていたところ、悪性の感冒にやられ、岩岡秀三君に代って貰ったので、無性筆をとることにした。

長年の糖尿病がたたって仆れてから五年、医師の厄介になりながら無為徒食の今日此頃である。何が間違ったのか、どうやら間違いだらけの小生の人生のようだ。

高商に入ったのがそもそもの間違いのスタートのようだが、それでもやっと人の倍かかって社会に投げ出され、会社員を三十年やって定年で放り出されてまた十年。この間俺は一体何をしたのかと思ってみても、ちっとも判っきりしないということだけが判った時、六十五才の〝じじい〟になっていた。

本夏緑丘総会を機に四十年振りに古巣小樽に三十名のサムライ共が集まったが、全く愉快に尽きる一夜の宴であった。若き日の友情程尊くもなつかしいものはないなとつくづく感じた次第であった。

小生は故郷札幌で隠居したから年二回の支部会合もあるし、月一度の緑丘ゴルフのマンスリーも欠かさず出るようにしているから、割合校友諸君との交りは多い方だろうが、やはり同級生というものは格別なものである。そこで考えて見たら「友達」これが我々の一番尊いものなのだなと思い当った。

校外の人達から緑丘会は盛んだ、殊に戦後新制大学に吸収されて母校を失なった人々からは羨ましがられること屢々である。これは確かに我々緑丘人が誇り得るものの一つであろう。それはそれなりに色々の要素が混じり合って世に羨ましがられるような緑丘の基盤を作ったのであろうが、益々この基盤を拡大して一層発展させ度いものである。それには本誌の如き、友情の所産以外には考えられぬ会誌の発行などは全く頭の下がる思いであり、主管者の長年の努力に感謝と敬意を表するものである。緑丘の諸兄よ、同級生諸君よ、何年も元気で良い年を迎え益々雄飛されんことを祈って拙筆を擱きます。

次のバトンは、氷かがやき千鳥なくと唱われた釧路に隠栖する矢野健太郎兄におねがい致します。

（昭二）

### （まんぴつ執筆者）

（客員）松尾教授
（大三）高橋徹男、下吹越栄吉
（大四）八木康之助
（大六）伊東小四郎
（大七）白瀬治三郎、金栄酉吉
（大八）戸井正三、大野純一、三好長次、増井得三、谷本朋次、郡菊之助、西村百太郎、松本義一、大山謙吉、広岡一男、福田誠、藤居元三
（大九）菅谷重平、奥村義信、小島憲市、奥田直
（大一一）宮地邦介、小橋庸三、杉山昌作、神沢重治、梶川亨司、功刀素重、越崎宗一、大泉行雄、中田新平
（大一二）田中弥三郎、塩谷精一郎、大久保鹿弍、大井義郎、渡辺一夫、小河成美、池田繁正、田中実、穴釜升夫、玉井武、日南田美文、佐藤信雄、若林周五郎
（大一三）古関周蔵
（大一四）畑信太郎、片岡亮一、小武海鉄郎、松原治郎、森下弘、北村良吉、桐田鉄郎
（大一五）増田常次郎、中野清一、白木小一郎、近藤徳弥、津久井七雄、大平善梧、西野嘉一郎、竹内隆、吉田荘太郎、祐村脩平、松村義公、川上貞光
（昭二）黒羽秀夫、牧野吉男、岡田政治郎、堂城不二人、友沢和一郎、小貫武、手島恒二郎、山中晴雄、太田英治、広瀬久一、石田平八、中沢勝平、加藤正善、古川敬止、清水文男、茂垣英夫、岩岡秀三、小西征夫
（昭三）佐竹繁寿、樋山三郎
（昭四）小山健児、湊静男、高橋一男、玉井英雄、宇山慶三
（昭五）池田啓助、井藤久也、吉田友記、北村太治郎、横井七之助
（昭七）八家要、鹿島憬策
（昭八）土岐秀雄、本間広松、小池三郎、高見美雄、会津幸雄、鈴木三七
（昭九）梅野弥太郎、塚越誠、本田正一
（昭一〇）篠崎万治郎、若月雅司、北村匡弘
（昭一一）浅野潔、土屋龍郎、木下春雄、三崎嘉郎、島崎保信、中尾弘、中道良徳、川原俊一、松井要吉、進藤彰、越崎清二、中木平三郎、丸山一郎、柴竹亜津視、秋葉隆一郎、蟇目英三、本間誠一、鎌田正三、木村頼雄、小林啓作、角谷栄作、上野茂、村山重三郎、国安猛、小島典春、砂子沢正
（昭一二）内藤好生、皆川荘一、矢野正郎、宮内美雄、木内武之助、牧田恒雄、本間英作、森川正明、石川孝一、浅田厚、岡田保司、山村太兵衛、佐々木成彰、岡本元次、立石市郎、佐藤清治、山下政道、高橋景則、金三郎、須永誠一、白潟良造、曽根重四郎、大井健一、梅原音次、森川正明、岡田春夫
（昭一三）江川裕一郎、若山永太郎、木村章三、山本俊雄、松ケ野寿夫、丸山弥、平木勇三、金垣英雄、柳川憲夫、西谷作太郎、森川正明
（昭一四）井原利勝、大沼誠治、北村幸、谷英純、沼田博、太田正勝、壱岐隼雄、河西辰男、沢村重一、石黒政夫、北条恒一、三浦正飛塚誠一、竹島篤二郎、金井勇、八木安、野村鉄太郎、福地貞雄、樫村久好、尾崎哲平、沢井道成、隈田鑽三、市橋宏一郎、内藤義信
（昭一五）柿本恒一
（昭一六）相原正美、相田正、河上鎮男
（昭一六後）中村平之助、小林芳美、松村克己、山内孝、杉原貢、久保宗司、若林幹一、阿部英一
（昭一七）籾谷真一、長尾昌弘、桑野泰次郎、阿部敬作、越智直行、山田光男
（昭一八）亀井尚一、湊誠、島田恵治、

（三九頁へつづく）

# 大正十三年会の記

余り押し詰らない内に、お互いに顔を見たいと云うので常任古関幹事の勧誘に乗って集まったのが大野元学長、加茂前学長のお客様を交えた総勢下記十四人（森、門馬、渡辺、中尾、久木、久保田、広野、高浜、二馬、田中、古関、谷）

時・十二月五日午後五時半
所・赤坂宿美川

不相変忙しい古関幹事最後に到着しての挨拶はいきなり一昨日逝去された福田勇一郎君のことに触れ、之亦九月に鬼籍に入られた糸魚川先生とのお二人の霊に黙禱を捧げる。

一同一寸しんみりしたが、アルコールが入ると「生きてる内が華」と許りに少し宛元気を恢復して昔通りの楽しいクラス会となった。その昔箱根で採録したテープに、生前一番元気そうだった石川清四郎君の声が残って、いい記念になってることでもあり、この際皆の声を残そうと云うことになった。

先づ大野先生―東京転任の挨拶。久木君―之亦東京移住の件を報告。門馬君―今夜夜行で福井出張する張切りをチョッピリ。中尾君―十年期限の借金に成功した自慢話。加茂先生―図書館開館式の話と世界連邦の団長として各地を廻ったお話、特にローマ法王に肩を抱かれて世界平和を誓い合った一幕は嬉しそう。

少し柔かくと云うので久保田君―小唄を一つ。前回から格段の進歩に一同賞讃。渡辺君―健康保持のため皆の勧告に従って少食に踏み切る所信を表明。広野君―元気横溢した調子で四十碼のオールパーポスゴルフ場経営の件を宣伝して低音のミリキを発揮して小唄を一席の後、真打高浜宗匠―お得意の小唄『心して』を一つ。アンコールに応えて長唄吾妻八景の内二上りのサワリだけを一寸披露。不相変綺麗な声で聞かせて呉れた。この程度で切上げたのは田中君が平素二十分以上は駄目と念を押されたるための由、お蔭で一同聞かされる難を免れた恰好だが、唄は流石に素人離れで立派と云うのが皆の本音のよう。その後田中君―糸魚川先生と福田君との縁に触れて皆に感銘を与え、いい記念の集になった。

二馬君、谷君は簡単に自己紹介で責を塞いだ。因に森君は一番初に到着、後口があるとかで中座、古関幹事は他人の世話許りして両人共録音に漏れたのは一寸残念だった。

午後九時、大野先生の発声で十三年会の万歳。古関君の音頭で大野、加茂両先生の御健康を祝って散会。「永生きして下さい」と云う大野先生の声も一入身にしみて、夜の巷に散って行った。少し唄い足りなさ相な高浜、久保田君は継続興行に何処かへ曲って行ったようだけど。

（谷記）

**【写真説明】**
（後列右から）谷、広野、久保田、古関
（中列　〃　）久木、中尾、門馬、高浜
（前列　〃　）田中、二馬、大野先生、加茂先生、渡辺

# 阪神緑士会忘年会

十二月十八日夕、紫畑荘に集まる。出席者杉山、四谷、竹村、久保、北島、松本、宮地。これで健康のものは皆出席と言うところ。

ここ紫畑荘は専売公社が昨冬以来改築にかかり今夏竣工なったばかりで、一流料理旅館の態をなし、招ぜられた部屋は宿泊者用らしい小部屋、清楚にして木の香ただよい、老人の集会には最適のところ。

運ばれた料理は何れも板前さん御自慢のものなるべく、而も盛沢山だったが何れも健啖家揃いで次々と平らげて行き酒や麦酒も適当に飲んだ。席の話題は主として現下の経済談義とでも申した方がよいかも知れぬ。或いは身辺の事共隔意なく話せるのもこの会ならではのこと。ところで何時も健康管理のことに話の花が咲くが、今度は遂にその話が出なかったのは一同元気のしるしなるべく慶祝せずばなるまい。午後八時頃散会することになったが、勘定書を持参に及んだ女中さんを前にしての割勘支払の図は、えも言われぬ和やかさ、はたの見る目も羨ましい限りではないだろうか。

（四二・一二・二〇、宮地記）



# 福田勇一郎君を悼む

大一三卒　東京常任幹事
古関周蔵

数多い緑丘同窓生の中に、こうした人が居たことを緑丘の各位にそして又これから卒業して来られる人達にもお知らせしておき度いとペンをとりました。

福田君と私は大正十年四月、小樽高商一年A組に入りました。彼は○○中学出、私は福島中学出で全くの初対面の間柄でした。私は薄暗い教室の左側の窓際、前から七、八番目の席に決めていました。そこは教室中で一番良い席だと私は思っていました。いつの間にか福田君は必ず私の前の席をとるようになりました。彼は当時流行のオールバックの長髪に縁無しの眼鏡と洒落た風貌のスマートボーイでした。

彼が大変な勉強家であると感じたのは、大熊信行教授（現神奈川大学）の講義の時でした。随分と突込んだ質問をして大熊教授の説明に容易に納得せずたたみ込んで質問を重ねていたものです。

学生時代の福田君と私とは机を並べたというだけで、とりわけ打明話をしたでもなく深い交際に入らず三年を過してしまいました。というのは彼は学業の進むに連れ当時の経済理論としては当然のように左傾する形になり、級友小林多喜二君等ともかなり突込んだ話し合いをしていたようで、寧ろ理論的には福田は小林君をリードしていたかと思わせるものがありました。そんなことから私とは相触れ合うことのないまま卒業して、彼はジャーナリストに、私は野暮な銀行員へと、それぞれの社会へスタートし二人はそれなりに生涯ふれ合うことなしに終るかと思いました。

処が戦後、多分昭和二十四、五年の頃、毎日新聞名古屋支社に、梅島貞氏（現毎日新聞専務取締役）が赴任して来られ、当時名古屋の銀行にいた私は屢々面談する機会に、偶々新聞界四方山話に級友福田の消息を尋ねた処、彼の返事は「福田勇一郎こそは私の心の友で現在朝日新聞本社の取締役であるばかりでなく朝日新聞にとって掛け替えのない立派な重要な人物」であるということでした。これがきっかけで早速福田を名古屋に呼ぼうと、それから間もなく三人は、名古屋で卓を囲んで歓談することになりました。

旧友福田が、新聞界でそれ程まで高く評価され、成長したかを知って、何十年振りかで会うことを非常に心待にしていましたが、会った瞬間私はアッとばかりに驚いた。というのは頭は禿げ上り、鼻頭は酒毒で赤く肥厚し、嘗ての緑なす黒髪、眉目秀でた彼とはまるっきり予想もしなかった彼でした。が言葉少ない彼も話して昔の福田を感じるにはものの五分とかかりませんでした。

それ以来彼と私とは、折にふれ突込んだ打明話をして彼の職掌柄持っている彼の情報も、時によっては私自身も知らない私の身辺の情報をすら、彼から受けたアドバイスは得難いものでした。

月に一、二度東京、名古屋を往復する車中で私は又しても毎日新聞の梅島氏から、福田の身辺の情報と社内の彼の進退は極めて逼迫したものであるが恐らく福田は見事な出所進退を示すであろうし、万一に彼が辞任するような事態に至れば朝日新聞にとって大きな損失であろうということでした。間もなく彼に会って私は彼に切に自重を勧めた時彼は短い言葉で「節は枉げられない」旨を言っていました。

あの時分の朝日新聞の内部事情は今ではもう大方周知の事でしょう、しかしその中に在って彼福田は彼なりに些かの乱れもない自身の信念に従った見事な進退をしたことを同窓の各位と共に賞讃してやり度いと思います。

その引退後彼は専ら、陶器、絵画等の趣味の世界に専念したらしく偶々瀬戸の赤津や美濃多治見山中の窯場の芳名簿に彼の自署を見たことがありました。

関西を引揚げて藤沢の辻堂に洒瀟な居宅を建て彼はそこに隠棲しました。級会の通知に対して「長年の欠席の罪亡しだ」と出来るだけ出席して来ました。北海道の秋の紅葉が忘れられないらしく、ナナカマドのかなりの長尺物を鉄道便で送れなくて船便で沢山取寄せ庭に植え込んだと言う彼に、庭が広けりゃと私から天然記念植物の浜木棉と印度浜木棉と二種類届けてやりました。うまく活着したから見に来て呉れと再三の望みで私はさがみゴルフの序でに一走り彼の新居を訪れました。

庭の広さは四、五百坪もあろうか閑雅な日本式ながら新しい様式の住宅で寧ろ阪神間の山の手にありそうな感じで、茶室風の離れに窯が築いてあり、ロクロの傍に小型の冷蔵庫を据えて陶芸に専念した合間にスコッチを嘗めている風でした。未だ焼いていない乾燥中の鉢や茶盌らしきもの二、三自慢そうに見せて呉れました。庭のたたづまい、離れの電気窯等激しかったであろうジャーナリストとしての人生の後半を、如何にも静かに自らを慰めいたわっているような福田を私は改めて見直したような気持で、いい人生だなと今更ながら考えたことでした。

今年（昭和四十二年四月）卒業後四十三年全国大会の級会を名古屋、犬山で開いた時彼が姿を見せなかったのは肝臓が悪くてと不参加料を同封して来たので彼の宿痾を知りました。折返して見舞の手紙を出したっ切りで、この十二月五日今年最後の級会を開くその前日彼は肝硬変で逝ってしまいました。

あまりにあっけない彼の逝去は我々級友の心を痛く悲しませ、出席者一同級会の開宴に先立ち、旧師糸魚川先生と彼福田の冥福を祈って心からなる黙禱を捧げました。

出所進退に際して、志を高く捧げ

て節を持したと言う彼、引退後露微塵世俗を離れて趣味の中に生きようとした彼、彼を思えば清風松林に聞く思いです。

級会の翌日彼の自宅で告別式が行われ級友の森君、谷君等心からなる焼香を捧げました。私は浜木棉の露地植えがどうしたかと彼の遺愛の窯場の南の空地に行って見ました。美しく掃き清められた庭の片隅に植木職の手になったと思われる薬苞が寒牡丹の帽子のように覆われているのを見て、病中ながら庭の隅々まで彼の好みらしいものを感じて帰りました。

粗文追悼の辞とし、同窓各位への報告と致します。

# 消えていった三人目

## ——故福田勇一郎氏と小林多喜二特集号——

墓目英三（昭一一）

「小林多喜二と一緒に写した写真があるのだが、届けるといいのだがね、すまんが来てくれないか」と福田さんの丁寧な電話がかかったのは三九年の年末であったと思う。

小林多喜二特集号の編集がもうはじまっていた時で朝日新聞社（大阪）へ飛んでいった。

福田さんの現われる一寸の間に応接室の福田平八郎、小林古径の絵をながめていると「態々呼び出してすみません」と後から声をかけられた。

この時が私の福田さんにお会いしたはじめであった。その時は年末の事でもあり、原稿をいただき、写真を拝借してから多喜二特集に寄せられた執筆者の事など話し合って別れた。

写真の複写を終えて原写真を返却に再び朝日新聞社を訪ねたのは正月であった。

「今、西山英雄の個展を見て一枚買って来たので見てくれ」といって自分の部屋へ戻って行かれた。大阪・梅田の某画廊で中国帰朝作品展を開いていたので中国の赤い山なみを想像していた。やがて包み紙を開いて前の椅子に立てかけて見せていただいたのがやっぱり想像通りのすばらしい作品であった。

西山英雄の作品を中心に話は絵画の話から陶芸の話にすすんでいった「そろそろ会社をやめて藤沢の辻堂に家を建て、陶器でも焼くさ、先生か？ぼくは浅見隆三に習ったんだが…。君のにうわぐすりをかける自信はないよ」など語り合って短時間に福田さんの趣味の一端をかいまみて別れたのがつい先達ての事のように思う。

小林多喜二特集に話を移そう。福田さんの原稿は「写真の三人」と題して多喜二の家を訪問した思い出と多喜二、福田、乗富の三人が一緒に写っている写真の事を書いておられた。再びこの機会に転載してみたい。

『この写真が出来てからのある日、小林君は△昨夜、おばあちゃんにみせたら、この三人ともロクな死にかたはしない、といった▽と笑っていた。

後年小林君は周知のようなことになり、その葬儀に列した乗富君も、その後二年を経ないで肺を患い寂しく逝った。その頃の私は札幌に勤務していた。

爾来渺茫三〇年、辛ろうじて生き残っていた私はこの先、何時、かって小林君のお祖母さんの例外を作らないことになったとしても悔はないように思う。』

私はこの原稿の編集に当って特に多喜二死亡記事を大阪朝日新聞からとって編集することが意義のあることと思って昭和八年の縮刷版をくってその記事を同一頁に組んだ。

写真の三人は低い方から順にこの世の中から消えていった。

福田さんの訃報を手にしたとき多喜二特集号の頁をめくりながら福田さんのご冥福を祈った。

写真の三人？
福田勇一郎
小林多喜二
検事中急死
文学の本質を問える
小林多喜二の急死十年目



# 昭十二卒　京浜関東地区集会

## 〝緑丘〟を昭一二の機関誌として全員購読を決定す

年の瀬も逼って参りました去る十一月二十七日、忘年会には一寸早い感じでしたが、その意味も兼ね有楽町国策パルプ地下日比谷ニューアサヒビヤホールに於て十二年会を開催致しました。当初二十七名程出席申込みがありましたが急用のため五名欠席となり二十二名に止りましたが最近東京に転勤になった山下政道君（日本セメント）畑山昌次郎君（日本火災海上）坪井敬君（北越製紙）の三名が初参加され、特に山下、畑山両君とは卒業以来初めての対面。顔は憶えていましたが名前が出て来ず、名乗られてはじめてああそうかと思う次第。誠になつかしゅうございました。

卒業三十周年全国大会の模様の話や其他よもやまの話に酒杯のピッチも上り盛会裏に九時一応散会。三々五々打連れ、銀座の街に散って行きました。

（出席者）新谷健夫、千野秀夫、福田政治、長谷川順治、畑山昌次郎、川村勉、牧野栄二、松本浩三郎、松岡卯之典、中沢正五、岡田春夫、山下政道、坪井敬、竹島旬、曽根重四郎、岡崎弘、菅原文夫、楠岡治、高木光孝、梅原音二、大村良雄、牧田恒雄。

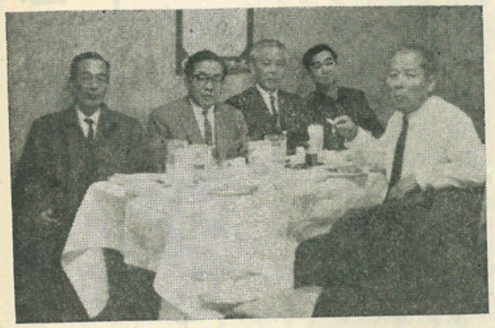
尚本日の決議事項として

(1)「緑丘」を昭一二の機関誌として利用させて貰う。そのため昭和十二年卒は全員購読すること。

(2)次回幹事選挙の結果左の方々が当選

松岡卯之典（神戸銀行）
広瀬順造（農林漁業金融金庫）
千野秀夫（大平興業株式会社）

（牧田記）


左から　内藤，森川，田中，八尾，林

### ＜昭一二大阪同期忘年会＞

十二月十日、在阪昭和十二年の同期が忘年会を兼ね東京同期会からの決議につき色々話し合うため忘年会をかねて集まった。

年末も近いこととて集まったのは写真のメンバーだけであった。

# 昭和五年　新名簿（第一〇集）を発刊

昭五会幹事北村太治郎氏は第一〇集新名簿を発刊した。

この名簿程内容の充実した名簿は見当らない。各年次の方々へ参考までにその内容を紹介しよう。

この名簿の特徴ともいうべき点は

①連絡相互扶助のため、全国を十五ブロックに分けブロック長を決定してブロックナンバーを各人の氏名の前に印してその長には△印を付している。慶弔、小会合の緊急手配もその長に連絡すれば電話隣組式に伝わるように図表までも付されている。

②恩師住所のほか逝去者命日、遺族名、住所が掲載され、誰によって知らされたかも記載。

③地区別（ブロック）人員表

④弔慰基金の内規

⑤諸報告集

Ⅰ佐藤正夫氏激励見舞金決算報告

Ⅱマッキンノン先生招待謝恩会報告

Ⅲ渡辺勘吉氏中央後援会結成報告

Ⅳ戦歿者記念平和碑建立基金募集

⑥五行近感（同期生のハガキ近況）

⑦東京（並に近郊）緊急連絡電話隣組表

以上の内容をもっている。

### 昭和八年新名簿を作成配布

昭和八年幹事鈴木三七氏はこの度昭八会名簿（昭和四十二年十二月一日）を作成、会員に配布された。この名簿によれば約二分の一は緑丘愛読者であり、今年度は三分の二までに愛読者を増やそうという。

## 岡田春夫君来阪

左から　岡田，墓目，森川

師走も押し迫った十二月二十一日夜、社会党代議士岡田春夫君（昭十二卒）は、大阪国際貿易促進協議会の招きに応じて来阪、文化大革命の一応の終焉後における最近の中共の政治情勢、ポンド切下げに伴う中共貿易への影響、ポンドの危機とドル防衛の可能性等について講演した。

翌二十二日夜、墓目先輩と同期生森川と三人で夕食をとり、時局談、『緑丘』の話等、静かな薬業クラブの一室で閉店迄話に花が咲いた。会談の途中から、同期生上家君の遺児富靖君が加わり、福祉事業問題についても話がはずんで閉会の頃は、さすがの道修町界隈も人影がまばらだった。

# 戦歿者の想い出

## 昭一二　上家富誠君のこと

土橋　千代子

卒業三十周年同窓会で数多くの友人との再会の喜びを味合い得たのは、卒業者数の二十五パーセントに及ぶ物故者の、特に戦没者の貴い犠牲があったからである。と云う参加者の感慨が、期せずして、『五年後の同窓会には遺家族を是非共招待したい』と云う満場一致の決議になって現われたものと思われます。

生死不明であった上家富誠君については、懇親会の席上、本間英作君から報告されたのですが、その後、学生時代同じグループであった佐藤輝夫君の尽力で、遺家族の消息が判明しましたので、同君の死の前後の情況を御報告したいと思います。

上家君は、ごく普通の民間人でした。しかも『戦死』です。日本国家は彼を戦死者の名簿には登載してはいないでしょう。しかし彼は『戦死』です。私は彼は当然近い将来建設される緑丘戦没者平和記念塔に、その一員として刻銘されるべきだ、と考えます。

深い感慨をもって読まして頂いた上家君の奥様（現在は土橋千代子様）の手記をここに掲載させて頂き、彼の戦死時の情況を報告し、再び同期の諸君と共に彼の冥福を祈念したいと思います。

（昭一二・森川正明）

終戦記念日も近づきました。八月になると日頃忙しさにとりまぎれて忘れていた終戦前後のことを思い出す。北小学校の母親学級が出している文集「まどか」に川染さんとおっしゃるお母さんが終戦前から終戦後にかけての悲惨なさすらいの旅を投稿されていたが、私などそれに比べればほんとに恵まれていたとは思うものの、子供達の父の死という一生に一度の悲しい体験であり、私は私なりに悲惨な思い出なので、書いてみようと思う。

終戦当時私達一家（亡夫、私、妹幼児三人）は満州にいた。亡夫は小樽高商を出て、当時の満州ブームですぐ鞍山の昭和製鋼所（当時東洋一の製鋼所であった）につとめ、兄妹五人の末っ子である。

当時私たちは本社から十里ばかり離れた弓張嶺鉱業所に転勤したばかりであった。主人は経理庶務係で毎日忙しかった。家族の者は社宅に入って空襲も知らず（本社のある鞍山市はB29の空襲でだいぶやられたらしいが）割にのんびりとくらしていた。

八月十三日にソ連参戦の報せが入り、皆騒然となった。家族を疎開させるかどうかで議論百出だったが、もう少し様子をみようということになった。あとから考えると、この決定で私達は生きながらえて祖国へ帰られたのだ。もし疎開していれば、何百万という人達がそうであったように、悲惨な流浪の旅をしなければならなかったのだ。十五日に思いもかけず終戦の詔勅をきいた。悲嘆のあまり自殺しかけた奥さんもいた。

まもなくソ連兵、八路軍が入山して来た。庶務経理係の主人は、お金のやりくりに、連絡にと、十里離れた鞍山まで危険をおかして何度も往復した。社宅のまわりには鉄条網を張りめぐらして、電流を通じてあった。夜は社員たちが長刀をもって満人の暴動を警戒した。倉庫は襲われたけれど社宅は無事だった。

貴金属、着物、その他珍しい物は皆供出した。兵隊の土産用である。鞍山本社から商売女をよこして来た。私達は胸なで下したけれど、今考えるとすまないと思っている。

色々交渉の末、一カ月後に鞍山に集団移転した。列車一台を借りて布団と衣類、鍋釜だけもって鞍山についた。方々の社宅に同居させてもらい、一カ月後に私達は一軒の社宅に入ることが出来た。

鞍山の街は当時人口四、五万。日本人が二万人余りいた。製鋼所でもっていた町であり満人も沢山働いていたせいか、他の町のような暴動も少なかった。町の端々の社宅が暴徒に襲われて窓ガラスまでもって行かれたりしたが……。鞍山も初めソ連兵が駐屯していた。皆おそろしくて外出もしなかった。夜になると回覧が廻る。『どこどこの社宅街にソ連兵が酔っぱらって回ったから注意せよ』との回覧である。それが回ると皆電燈を消して身仕度し、女は押入れや天井裏にかくれる。そういうことの連続であったが、幸い、私達の社宅は何事もなかった。皆の団結がかたかったのと、男の人たちが夜中見廻ったり警戒していたから――。

それに鞍山に来たソ連兵は航空兵が多かったとかで、教養のある人が多かったとのこと。ソ連兵の軍規もきびしかったようだ。少し離れた所に日赤病院があったが、その庭に一つづつソ連兵の墓が増えて行った。病気で死んで行った者もあるだろうが、軍規を犯した者が射殺されたそうでその墓だということであった。

日本人達は居留民団を作り、各方面との折衝をして皆を守った。主人も居留民団の仕事をしていた。ソ連兵のあとに八路軍（今の共産軍）が入って来た。当時私達は共産軍ときいただけでもおそろしかったが、なかなか規律正しい軍隊だった。そして国民軍（蔣介石軍）との市街戦があり、八路軍は去り国民軍が支配するようになった。すぐまた八路軍のまき返しがあり、国民軍は鞍山の町の電源をめちゃめちゃにこわして逃げ去った。そのため引揚げるまでの一年間、鞍山市民は闇の生活を送った。水道も出ないし、電気もない生活であった。

夜はろうそくをともし、生れて初めて水汲みに遠い水源まで毎日通った。丁度家の前に独身寮があり、そこが八路軍の宿舎になった。戦々兢々であった。若い人たちばかりであった。すぐ目の前だから何でも目に入る。おそろしいと思っていたけれど、彼等も普通の人間であった。規



律正しく、自由時間など家の前に来て何かと話しかける。私は満語がよくわからないのでニコニコうなづくだけである。当時四才の長男がいると、一緒に遊ぼうと手まねしてボールで遊んでくれたりした。夜、家の前をコトコトと音をたてて守備しているのが、却って安心な気持になった。日本人の生活は今までの持ち金と衣類を売って生活した。

満人は日本人の衣類をよろこんで買った。今まで汚なかった満人は日増しにきれいになっていった。私達も貯金と僅かばかりの衣類を売ったりした。引揚げが何時になるかわからない見通しになると、日本人も商売を始めた。お餅やさん、お菓子やさん、衣類やさん等であった。

初めは米をたべていたが、だんだん心細くなると皆コーリャンをまぜて食べるようになった。赤くてかたくてバサバサした粒である。私達大人はがまんして食べたが、子供たちには可愛想であったが、しまいにはそんなことも云っていられなくなって、軟かく煮てまぜてやったりした。物資は割にあったように思う。

召集で入隊した人がやっと逃げ帰って来た話や、帰って来ない夫を待ちあぐねている奥さん方、国境方面、北方都市の人たちの悲惨な話等いろいろと伝わって来た。

終戦後、日本人は鞍山を支配する軍隊の使役によく使われた。何百名と命令されると人数を揃えて何日間かつれて行かれた。傷ついたり、死んだ人達もいた。八路軍が二度目に入って来た時も四、五百人の人が使役に徴発された。私達の社宅では順番を決めてあって、隣の人が当番であったが、割合年をとった方であり少し風邪気味だったので主人が代って出ることにした。これが運命の別れ道になろうとは誰も考えなかった。十日間の約束で皆十里程はなれた大石橋という所へ弾丸はこびに行ったそうだ。その十日間に国民軍と八路軍の市街戦があり、八路軍は逃げ去り、国民軍が支配するようになった。私達は心細く主人の帰りを待った。十日目にぞくぞくと帰って来たらしい。早朝に私は叩き起こされた。主人が負傷して長店補という街はずれまで助け出してつれて来ているという。子供達を妹にたのんで、私は走った。走った。

街はづれの家に主人はタンカにのせられて運びこまれていた。沢山の日本人がガヤガヤとさわいでいた。何百人の者が三々伍々と帰って来たが、最後にかたまって来た三、四十名の人達が運悪く街はずれを警備していた国民軍につかまり、何の弁明も許されず前後から機銃掃射をうけたという。無事だった人もいるが、大部分が負傷し、死者も五、六名出たとのこと。主人はタンカの上に寝ていた。意識は明瞭であった。

『心配するな』と云った。でも、他の人の話では弾丸が腰を貫通し、膝にも弾丸をうけたという。気丈にも自分で止血のホータイを巻いていたという。すぐ病院へ運ばれた。病院といっても「東洋一」と云われた大病院は接収されて日本人は使用できず、社宅の一隅に診療所があるだけである。

知人の医者で『こんな有望な人なのに足を切ってしまうのは惜しい。今少し様子をみましょう』とのことで、その晩私と友人はつきっきりで看病した。夜になってひどい痛みがおそい、主人は男泣きに泣いた。モルヒネを何本打っても効力はなかった。朝方になって痛みは納まったが手術をすることになった。手術用の薬、器具など皆で手分けして集めていたらしいが、手術したのは晩方であった。私は足を切断してしまえばよくなるものと思ってホッとしていた。ずうっと意識は明瞭であった。後で聞いたのだが、弾丸があたると「ガスエソ」になり毒素が血管の中を通って体中に廻ってしまうそうですぐ血清注射をしなければならないそうだが、その血清が無かったのかも知れない。夜中の十一時十五分に死んだ。子供達をこわがらせてはならないと思い、連れて来なかった。まさか死ぬとは思わなかったし、足さえ切れば直ると思っていたから……。

当時戒厳令が布かれていて、夜は何人も通行禁止であった。夜の通行人は有無を云わせず射殺される。私はそれをも忘れて『子供をつれて来る』と外へ飛び出そうとして周囲の人たちにだきとめられてしまったが――翌朝早く家へ知らせてくれ、妹が子供たちを連れて来た。長男は四つ、まだ死というものがわからず、異様な雰囲気を感じて泣き出しそうな顔をしていた。長女三才と次男一才は何も判らずニコニコ笑っていた。

お葬式は盛大にしてもらった。居留民の犠牲だというので沢山の弔慰金ももらった。お金を持っていても引揚げには一人千円しか持って帰れないので、気前よく出した。国民軍が入ってから引揚げの話が噂されていた。私達は引揚げる前一カ月間、悲しい贅沢な生活をした。

七月二十日すぎに鞍山の引揚げが始まり、無蓋列車で何週間もかかってコロ島についた。ここでコレラが出たとかで二週間もとめられ、博多についたのは八月二十二日であった。『なつかしの故国』『早く内地に帰りたいなあ』と云っていた主人は、四才の長男のリュックの中に納まっていた。その長男も福祉関係の大学を出て、今大阪の学園で働いている。父のことで記憶があるのは『でんでんでん……』と云いながら耳から南京豆をとりだす手品をしてくれたことだけ、とのこと。次男も今東京の社大へ行っている。娘は家にいる。皆成人した。

戦後五味川先生の『人間の条件』を読んだけれど、あの梶の勤めていた会社は鞍山の昭和製鋼所がモデルであったそうな。あのような悲惨な毎日があったことなどつゆ知らなかった。

私達はほんとうに何も知らなさすぎた。ただ自分たちの生活があった。新婦人広島支部で出した『木の葉のように焼かれて』を読んで『原爆体験記』を読んで、また多くの戦災者、戦歿者の肉親の手記を読んで今更のように戦争のおそろしさを知った。日本国民が味わったこの戦争の体験を無にしてはならないと思う。

# 関西地区　昭一一集る

## 三十五周年記念大会は一年繰り上げ万国博に合わせよう

三野六郎君の社長（住生住宅KK）就任を祝い、併せて足掛け五年振りにまた大阪へ還って来た小池輝男君の歓迎を兼ねて久方振りに大阪サムライ会（昭一一年度生の会）の会合を持とう、と計画したのは十月頃だったが、何かと忙がしく延び延びになって、遂々師走の声を聞いてしまった。お互いに多忙になる年の瀬のことゆえ、慌てて日を十一日と決め、在阪の諸兄に案内を出した。

当日会場へ集まった面々は、たまたま商用を兼ねて来阪中の小野寺君（旧姓新国）を始めとして新大阪造機の山口君、日産化学の進藤君、三和銀行の凩君、松村組の藤川君、浅沼商会の小池君、自営木材会社々長の竹内君、第一銀行の浅野君、神戸から出て来てくれた七福相互の栗山君、塩野義製薬の蟇目君の計十名だった。三和銀行の三崎君は胃カイヨウで目下成人病センターに入院中、東洋棉花の島崎君は兄上の死去と云う事故のため、住生住宅の三野君は出張のため、とのことで不参、誠に残念だった。ともあれ久方振りで顔を合わせた面々十名のこと、何のかのとお互いにほめて見たりくさして見たりで大変にぎやかだった。蟇目君持参の卒業アルバムを回覧しながら各自色々と往時を偲んで感無量の態。特に満州でこの貴重品を失なった藤川、竹内の両君は何時迄も之に見入って居たのが印象に残った。

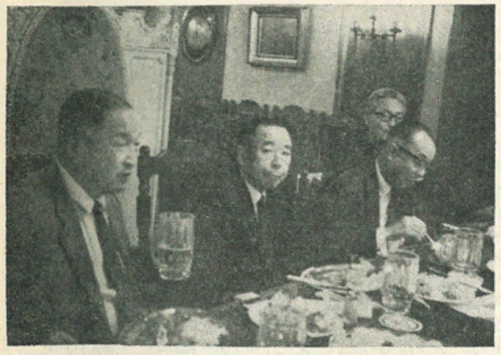
本日の会合の第二の目的は、四年後に催す可き吾々の卒業三十五周年の行事を関西地区に於て取行なう予定に付き関西側の意嚮を纒めて案を作るとのことであったわけで、この件に付き皆から色々と話が出たが、先ずその時期に付き、あだかも催される世紀の行事・万国博と時を併せて行なえば集まりもよいだろうし、出て来る方も一度で済むではないか、と云うことで之は出席者全員賛成、一年繰り上げて昭和四十五年に催すことに決定、早速各地の委員宛連絡を取り賛同を得るように手配することとした。こうなると宿舎の確保が大変だぞ、とのことで、またまた色々と案が出されたが、この方は何と云ってもまだ大分先の有ること、追而また相談したらよいではないかと云うことで結論迄は行かず。ただ進藤君の〝何れ三年後ともなれば吾々の内何人が現役として活躍して居られるか判らん、会合は何としても持つ可きだが、その時浪人して居る者も負担を感ぜずに出来る丈多く集まれるよう費用の面等も考慮すべきではないか〟との発言あり、皆で深く頷き合ったのだが、この時丈は皆神妙に夫々年令のことを考えたらしい。

だが何分にも一騎当千の士ばかり。痛む腹を押えながらジョッキを傾ける栗山君、棺桶に片足を突込んで居るんで孫のような娘のことが気になって仕方がない等言いながら痛飲する小野寺君、余り偉くならなんだ故か体丈は丈夫だ、一日に二ラウンドを三日続けても平気だ、と気焔を挙げる進藤君、今でも土曜日は必ずプレイしてるんだぞ、と怒鳴りながらグイグイのむテニスの小池君、もうすぐ一本も髪がなくなりそうだ等言われながらエビス顔でジョッキを注文する蟇目君、学生時代とちっとも変らん、相変らずあの方で発展してるんだろう、等と云われながらニヤニヤして飲んでる山口君等、全く時の経つのも忘れ、互いにシャベリ、互いに飲んで楽しい一夕を過ごした次第。因みに会場は北大使館貴賓室（蟇目君の斡旋による）。

なお社用接待で中座した山口君を利用して悪童二、三名が集まり、二次会で深夜の町に蛮声を張り上げたとのこと。

正面から 小池，藤川，凩，進藤の諸君

左から 蟇目，小野寺，浅野，竹内の諸君



左から 小野寺，栗山，浅野，竹内の諸君



# 札幌・昭和13年会　秋の同期会

前回の会で、秋の同期会は札幌郊外下野幌に今夏新築された室谷賢治郎先生邸のお庭で、新居を拝見しながらやろうではないかと話し合っていたが、鎌谷君その他に日時の都合がつかずこれは取り止め、十一月七日午後五時半から、いつものゴードーの直営で開く。

この度は、室蘭、小樽など加えて四十一名に案内したが出席は僅か十一名にとどまり、また、いつもご招待している室谷先生は急の東京出張でご出席いただけず残念であった。

たびたび会を開いているのだが、卒業以来初の邂逅という人もいた。

佐藤（輝）君が林君、花野君に対してそうだそうで、特にここへ来て紹介されるまで、佐藤君は毎朝宮ノ森のバス停で林君と並ぶのだが、どちらも気が付かずにいたという。この辺に同期会の面白い値打ちあり？

当夜の会では、審議議題として「小樽商大旧本館正面建物移設存置運動の提唱」について、主唱者の鎌谷君から「明年が卒業三十周年に当るわが昭和十三年会は、率先してこの運動を提唱すべきである」と説明。これに対し一、二の質疑応答の後、出席者一同の賛同を得た。

この件につき、鎌谷君はこのあと東京、大阪の同期会にも連絡し同意を得るはずである。

当夜は名幹事の多賀君が風邪で欠席、専ら歓談に終始したが、終りに校歌を合唱して散会した。

なお、当夜の出席者と欠席の多賀君、室蘭の中野君より、室谷先生新築お祝い品（寄贈済）代として若干宛拠出された。（戸谷記）

出席者

写真後列（右より）戸谷　大津　林　佐藤（勇）

小松　鎌谷　佐藤（輝）

花野　斉藤（貞）　永井

前列（右より）野田

## 昭和13年卒各位へ
## 卒業30周年記念全国大会に関する御知らせ

昭和13年卒30周年
全国大会東京幹事

私達が昭和13年，小樽高商を卒業して，今春は早や30周年を迎えることに相成りました。

就きましては，先般来東京地区幹事が中心となり，30周年全国大会を計画中でありますが，一応下記の通り概略プランがきまりました。

細部に就いては，追って逐次連絡ある筈でありますが，準備の都合もありますので，それぞれ地区委員に出席に関し，御一報下さい。

**全国大会要領**

（極く概略であり，今後追って詳細に計画致します）

1. **期　日**　43年6月15日（土）16時頃
2. **場　所**　静岡県伊豆稲取温泉
   〝赤尾ホテル〟
   熱海より伊豆急にて約1時間
3. **行事予定**
   6月15日（土）夕　懇親会
   16日（日）
   ◦一般有志はバスにて下田～天城スカイライン～熱海解散
   ◦特別有志については早朝海つり及びゴルフを計画
4. **費　用**　極く概算
   第一日目　6,000～6,500円
   第二日目　1,500円（一般有志の分）

※行事につき御希望の向は御申出下さい。

**＜地区委員名＞**

北海道地区　鎌谷勤
東北地区（青森・秋田・岩手）木幡清甫
（宮城・福島・山形）只野裕一郎
北陸地区　高杉隆平
東京地区　木村実，飯川益男，小田乾三，高野憲一郎
中京地区　鈴木啓介
関西地区　若山永太郎
中国地区　和田益太郎
九州地区　野沢義人　（敬称略）

# 東京　昭和十三年卒同期会

十一月二十七日
於・有楽町『九重』

忘年会を兼ねて今年掉尾の同期会を十一月二十七日（月）お馴みの有楽町「九重」にて開催した。当夜は元学長大野先生をお招きして楽しく一夕を過すことが出来た。

先生は今年五月より東京都国分寺市に住まわれておられるが、実は今夏開催の同期会にお招きするところ丁度その時期に帰樽されておられ果さず、今回ご出席いただくことが出来た次第です。月末多忙のためもあり同期生出席者は十七名と少なかったが、我々学窓を出てより二十九年目に始めて恩師にお逢い出来たもの多く、先生のお元気なお姿に接し、本当に久し振りにお話を承わる機会を得て誠に嬉しい有意義の一夕であった。

先生は戦後昭和二十四年国立小樽商大の初代学長になられてより八年間、よく学生の薫陶に尽されたのであるが、商大昇格決定するまでの苦労談や現在の心境について親しくお話をうかがうことが出来、先生は六十九才の御齢ともみえず。一語一語明確な口調でお話しされ、曽つての講義口調を思い出さしめるものがあった。最後に人生、健康第一にして今後も社会の第一線に活躍されんことを祈ると結ばれた。

酒杯進むにつれ四方山の話に花が咲き宴つきることもなく見えたが、時間も九時過ぎし頃、校歌斉唱、学校の万才と先生並に同期生の健康と活躍を祈り乾杯し名残りを惜しみつつ散開した。

今後同期会開催の節は在京の元先生方を順次お招きすることに致したく思うので同期諸兄多数の御出席をお願いする。

当夜出席者は左記の通り。

来賓　大野先生

青塚、新井、大野、小川、窪田、河井、鈴木（暉）、高野、田村、納富、羽鳥、村田、信田、藤城、柳川、木村（実）、江川（江川記）

〈追記〉

大野先生から幹事宛に早速御丁重な御礼状をいただきました。左記住所と共に掲載させていただきますからお便りを差上げて下さい。

東京都国分寺市本多三丁目六の二三
大　野　純　一

『昨夜は昭和十三年の集いの会にお招きを受けまして、大部分の方には約三十年振りでお逢いし皆さん立派な実業人となって第一線に活躍しておられるのを承知致し、誠に誠に楽しく嬉しい一夕でありました。今私がこうして老後の生活を送っておりますと、昔の学生諸君がすっかり「おやじさん」に成長していづれも会社の重鎮となっておられる姿を見ることが、ただ一つの生き甲斐であります。幾重にも御礼申し上げます。また鈴木君には態々国分寺の拙宅までお送りいただき皆様の温かい心に強く強く胸を打たれた次第です。一々御礼状差上ぐ可きですが、失礼させていただきます。江川さんから感激の私の気持をお逢いの方にお伝え下さい。

取敢ず御礼まで』

**この『緑丘』を昭和十三年の機関誌としよう**



# 緑丘30期会（昭和17年卒）

## 卒業25周年総会 全国大会盛大に挙行

—参加者旧師を含め49名—

昭和十七年卒の吾々は丁度緑丘三十回目の卒業生になるため「緑丘三十期会」を結成、五年前より全国大会を行なっているが、去る八月十九日、第三回目の全国大会を卒業二十五周年を記念して熱海富士屋ホテル（遠藤支配人は昭和十六年後期卒）で行なった。

この日、全国から馳けつけた同期生四十五名に加え、東京在住の旧師四先生（久木、花村、中込、横田の各先生）も参加していただき、五十名にならんとする大きな会合となった。

当日午後一時より総会を行ない、物故者への黙禱、現況報告、次期役員の改選などにつづき、マッキンノン先生訪日の各地で行なう行事に積極的に参加すること、松尾先生が進めておられる戦没学生・学友の碑建設に積極的に協力することなどを決議した。

この後、午後二時半より四師も加わっていただき懇談会を開催した。懇談会というのは今回初めて採用した企画で、この会を単に「古き良き日」を懐古するだけにとどめず、自分が現在どんな仕事をしているのか、どんな問題に直面しているのか、将来にどんなビジョンをもっているのかというようなことを出しあって、共に前進を期するために四時間近くを費して行なった。四十五名が発表した共通点をあげれば、

①全員が戦火の中に青春の血を燃やした。北は千島から南はジャワまでその転戦範囲は大東亜全域に及んでおり、この中で二十有余名の同期生が還らぬ人となった。戦地で明日知れぬ身を他の同期生に邂逅した時の喜びも多くの人より語られた。

②戦後に辿った途も厳しかった。卒業の際就職した会社が解散してしまっていたり、住宅、食糧事情のため復職出来なかった例も多い。現在の職場が卒業時と同じであるのは全体の二十五%にすぎないという調査結果も出ている。

③現在は、企業においては中堅からトップ・マネージメントに居る者が多く、人生において最も油の乗りきった年令である。その中でコンピューターの話が随分出た。コンピューター時代の中にあることが強く感ぜられた。同時に属する企業を思い、これに対する一〇〇%の忠誠心が感ぜられる話が多かった。

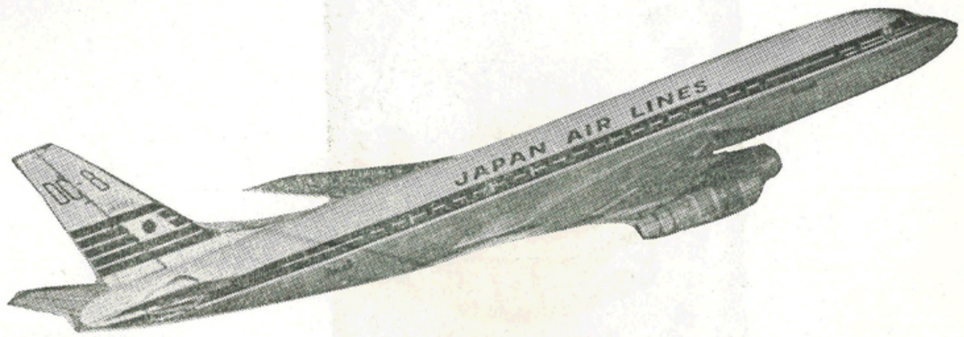
④激動の経済界にあって、将来への大きな夢をもって努力している真剣な話が数多く披露され、多くの人々の胸を打った。

この懇談会は今度の総会のハイライトとして企画されたものであったが大成功であった。花村先生よりも「よい企画であった」と絶讃を受けた。

夜の宴会は中込先生（チャタレー裁判の判事）の銀座の夜の蝶の生態などの話もあり、興のおもむくところ校歌、行進歌、緑丘讃歌、そして大ストームにより幕をとじた。

翌二十日の朝食時にマッキンノン先生に対する寄書、御病気のため参加いただけなかった旧師（糸魚川、大野、南、木部各先生）に対する寄書などを行ない、三年後の再会を期して散会した。（大庭記）

# 世界のどこへでも お好きなときに！




'68 バイキングツアー

ヨーロッパの旅　22日間　旅費：¥598,000

出発日（水曜日）　5月8日・5月22日・6月12日・7月17日・7月24日・8月7日・9月11日

（旅行コース）　東京・コペンハーゲン・ストックホルム・ロンドン・ブラッセル・パリ・マドリッド・ジュネーブ・ローマ・ミュンヘン・ウィーン・アテネ・東京

関西地方の方は緑丘編集部（大阪202局2161）へ御相談下さい

IATA（国際航空運送協会）公認代理店

世界中の航空会社の代理店です。日航，全日空，国内航空はもちろんです

JATA（国際旅行業者協会）会員
ASTA（米国旅行業者協会）会員
PATA（太平洋観光協会）会員
UFTAA（国際旅行業者連盟）

# 太平洋観光株式会社

本　社／東京都千代田区丸の内2の18岸本ビル　TEL(281) 9864～5
銀座営業所／東京都中央区銀座5丁目2番地　TEL(573) 5416 代
札幌営業所／札幌市北二条西三丁目(越山ビル)　TEL(24) 7913




## 某月某日

**某月某日**

例年春のはじめに大阪・阪急で古書展が開かれる。古ぼけた大津絵が千二百円と値段書きがついていた。二枚の中一枚が目の前で売れていった。そばにいた顔なじみの某古書店の主人に何時頃のものかと聞くと割合新しいものですよ古い紙を使って刷ってたら素人に判らぬでしょうね。岩絵具とあの緑の所が化学絵具で、古いものと並べるとすぐ判りますよ、切り（筆のはね方）も一寸ボケていますからねと他店のものを批評するようにいう。これは三万円ですがいいものですよと示したのは何処かの神社に奉納されてあったと思われる一メートル×五〇センチもある額で関羽の絵のようでもあった。弘安〇年とかすかに墨が浮彫りのように消えないで残っていた。

日本文壇史（五）以降を安く手に入れようと目を皿にそして足早に廻る。〝レオナルド・ダ・ヴィンチ〟の素描一九二三の原書があった。加茂先生の寄贈になる〝モナ・リザの秘密〟を読んだ後でもあり、興味をもって手にとった。クルフイッシャーの著書で加茂先生に喜んでいただければ幸いと思って買う予約をして棚の下にかくして貰う。

**某月某日**

日動画廊へ走る。木村忠太展も終ってアイズピリ展が開催されていた。〝ジャジャ馬馴し〟限定版の下絵でリトグラフ数枚と水彩画が四十点もあったろうか地下室一ぱいに展示されていた。赤札も数枚ついていたが馬が一枚よりない。花と人物が多いのに動物しかもジャジャ馬一枚とはなさけない。

**某月某日**

銀座松坂屋で郷土玩具展を見る。江戸時代の雛人形とはとんな顔をいうのかとその古さを知り横に目を転じたらダ・ヴィンチの書いた図面に従って作ったという臼砲や首切り戦車など数点がガッチリしたつくり（真鍮と鉄と木部）で展示されていた。勿論イタリア人の作ったもので十八万円とこれまた高い値段がついていた。

**某月某日**

京都美術大学学長近藤悠三先生の紹介状をもって京都美大探検隊の幹部二名来訪。ポリネシヤ群島を探検、予定特にまだ日本人の入ったことのない小さい島々の民族美術やマーシャル群島の中でも仮面民芸を探求するのが目的だという。関西の寄附金予定一覧表を見せて貰い、五十万円の作戦計画を練る。一しょに行きませんか、グアム島まで往復五万円ですよ。宿はどうするとの問いに、一覧表を見せて私たちはこの八ドルの宿に泊るのですという。次の機会にしようとお茶をにごす。

**某月某日**

五九号初校三〇頁をもって土曜日の午後二時から京都近代美術館デュフィ回顧展に走る。車中一五頁を終る。ポスター一枚を求めて京都博物館古代イタリー美術展へ向かう。高さ二米の皇帝像（スーサ出土、トリノ博物館）に圧倒される。特に青銅「トウニカと外套をまとい片手に杯をもつ像」のイミテーションを見ているものには、実物を見てその近代的な感覚をさらに再確認した。あと三〇分で閉館のベルがなる。急いで見終って、守衛においたてられて再び車中で校正を続ける。

（緑丘編集部）

△某月某日原稿募集▽

この頁は編集部の書くべき頁ではない。追加原稿のため半頁が余ったので止むなく執筆したものである。皆様の御投稿を期待する。

締切毎月十五日

## 松本敬一氏（大七）

昭和四十二年十二月十八日発病風邪気味だったが、余病急性肺炎を併発、三十日兵庫県立西宮病院に入院昭和四十三年一月二日午前八時四十五分死去。行年七十二才。三日自正午至一時自宅にて告別式、小樽高商同級生一同として生花を供え一同参列、冥福を祈った。

**略歴**　卒業と同時に三井物産株式会社入社、同小樽支店勤務三年余にて退社、岡山県にて三石耐火煉瓦、神戸市にて布引商事等を経営、晩年は春日商会大阪支店や丸嘉機械株式会社等にて英文通信担当、敏腕を振う。

現住地　兵庫県西宮市苦楽園二番町八の五

未亡人　松本たね

## 編集後記

☆新年号は二月に刷り上る。奇数月発行とは羊頭を掲げて狗肉を売るのたぐいか。四十二頁を昨年印刷屋に渡して、新年の休暇あけに十二頁渡してこの始末。申し訳なし。

☆外人講師特集号をお届けします。次号も特集第二号を続けたいものです。どうぞ二月二〇日までに執筆希望者は約何字執筆と書いてご連絡下さい。今度は三月号を奇数月に違わず発行し度いので〆切は二月二十五日とします。御協力願います。

☆三〇頁平均を維持して年間六回発行の〝緑丘〟もこの調子では予算オーバー（印刷代と郵送料で）。東京からわざわざ（大一二）加地幸一社長の電話あり「君、大丈夫か、もっと年間契約の広告をたのみたまえ」このご親切全く有難い助言。どうぞこの〝緑丘〟の編集をあきらめさせぬよう広告の協力をお願いします。½頁で一回五千円。年六回として三万円です。代金は掲載の都度で結構でございます。一頁はその倍です。

☆緑丘申込四十三年度受付け開始しました。早めにお願いします。

## まんびつ執筆年次ベスト5

先輩・同輩・後輩に執筆バトンを渡して昭和三十三年から今日まで四五頁のように続けて参りました。何年の年次がベスト5に入ったでしょう。

| | | |
|---|---|---|
| 第一位 | 二十六名 | 昭和一一年 |
| 第二位 | 二十五名 | 昭和一二年 |
| 第三位 | 二十四名 | 昭和一四年 |
| 第四位 | 十七名 | 昭和　二年 |
| 第五位 | 十三名 | 大正一二年 |

まんびつ執筆者は年次の面子にかけて棄権なきよう同期の方々の支援をお願いします。

△どうしても遅れます▽

まんびつ執筆者よ

バトンを受けたら責任の回避をやめましょう。バトンを渡した方は次の方へ執筆するようすゝめて下さい。若しその方が困難な場合は執筆者変更をすぐ編集部へ連絡願います。

たが、我々学窓を出てより二十九年　来賓　大野先生